聖代女子國語讀本

吉岡義則編

六

375.9
Y019
資料室

42393
教科書文庫
4
810
42-1941
2000 0
4751/0

資料室

昭和十六年十月二十四日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用
實業學校國語科用

文學博士 吉澤義則 編

聖代女子國語讀本

375.9
Y019

昭憲皇太后御歌

我ひとりのみ
行くべき方を
すべらぎ
人を

廣島大学図書之印

廣島大学
教
47510
図書

昭憲皇太后御歌

義則謹書

夜ひかる玉も
何せむ身をてら
す

ふみこそ
人の
寶なりけれ

聖代女子國語讀本　卷六　目次

一　君民同和（和歌）……（勅　題　集）一
二　富　士　山……杉浦重剛　七
三　鎭守の森……笹川臨風　三
四　鄕土の魅力……相馬御風　一六
五　四時の樂しみ……貝原益軒　二四
六　女流俳人……荻原井泉水　三三
七　秋海棠（書簡）……樋口一葉　四三
八　松の下露……（太・平記）四五
九　吉野の宮（和歌）……（新　葉　集）五一

一〇　新葉集の精神……魚澄惣五郎　三五
○一一　空行く雁……（曾我物語）　六〇
○一二　我が父母……新井白石　六六
一三　末ひろがり……（狂言）　七二
一四　狂歌……（諸家）　八〇
一五　味はひある生活……下田次郎　八三
一六　鈍と根……永井潛　八九
一七　新聞……小野賢一郎　九四
一八　松下村塾……德富蘇峰　一〇六
一九　妹に訓ふ（書簡）……吉田松陰　一二五
二〇　太宰春臺の母……下田歌子　一三四
二一○　人臣の道……北畠親房　一三九
二二　北畠親房……中村直勝　一三五
○二三　乙若……（保元物語）　一四一
二四　詩篇
一　曝冬……百田宗治　一五二
二　雪のなかの樹……富田碎花　一五三
二五　文鳥……夏目漱石　一五五
二六　早春の賦……阿部次郎　一六三
二七　道……芳賀矢一　一六七
二八　日本國民の大信條……黑板勝美　一七四

—（目次終）—

廣島大學圖書之印

聖代女子國語讀本　卷六

一　君民同和

風光日々新（明治五年）

御製

日にそひてけしきやはらぐ春の風よもの草木にいよゝふかせむ

皇后宮御歌

しきしまやたゞしきみちの春風はきのふにけふと世にのどかなり

太政大臣　三條實美

日にそひてあらたまりゆく君が代の春の光のかぎりやはある

御製　明治天皇御製。

皇后宮　昭憲皇太后。

三條實美　明治維新の元勳、明治二十四年薨、年五十六。

御製　明治天皇御製。

皇后宮　昭憲皇太后。

幟仁親王　有栖川宮第八世、維新の元勳、明治十九年薨、御年七十五。

岩倉具視　明治維新の元勳、明治十六年薨、年五十九。

新年祝言（明治十二年）

御製

あらたまの年もかはりぬ今日よりは民のこゝろやいとどひらけむ

皇后宮御歌

日の御旗たかくかゝげて國民のあふぐや年のひかりなるらむ

一品　幟仁親王

君が代のひかりにみがくあら玉の年のはじめはゆたかなりけり

右大臣　岩倉具視

あらたまの年たちかへる大空に田鶴の音たかく千代よばふなり

小出粲　歌人、號は梔園、島根縣の人、明治四十一年歿、年七十六。

御製　明治天皇御製。

皇后宮　昭憲皇太后。

税所敦子　歌人、掌侍、京都の人、明治三十三年歿、年七十六。

選歌　小出粲

いはひつゝたれも迎ふる年なれど千年は君のものにぞありける

松上鶴（明治三十三年）

御製

風の音はしづまりはてて千代よばふたづがねたかしみねのまつ原

皇后宮御歌

さかえゆく御園の松にひなづるの千代のはじめのこゑをきかばや

選歌　權掌侍從五位　税所敦子

大庭の松のはやしのふかければむれゐるたづのかずもしられず

尾上八郎
歌人、書道家、國文學者、文學博士、帝國藝術院會員、號は柴舟、東京女子高等師範學校教授、岡山縣の人、明治九年生。

御製
大正天皇御製。
○みあかし

皇后宮
現皇太后陛下。

東宮
今上天皇陛下。

東京帝國大學文科大學學生　尾上八郎

大君のちとせをよばふたづがねに松のあらしはしづまりにけり

社頭曉（大正十年）

御製

かみまつるわが白妙のそでの上にかつうすれゆくみあかしのかげ

皇后宮御歌

つたへきく天のいはやもしのばれてあかつき清しいせの神がき

東宮御歌

とりがねに夜はほの〴〵とあけそめて代々木の宮のもりぞみえゆく

智惠子
閑院宮載仁親王妃殿下。

佐佐木信綱
歌人、國文學者、號は竹柏園、文學博士、帝國學士院會員、文化勳章受領者、御歌所寄人、三重縣の人、明治五年生。

松枝
松山松枝、歌人、大阪府の人、明治二十年生。

○むすぶ

御製
今上天皇陛下御製。

○こそ……やれ。

大勳位載仁親王妃勳一等　智惠子

御社のとりゐほのかにみえそめぬよこ雲はれしやまもとの杜

選歌　御歌所寄人勳六等文學博士　佐佐木信綱

宇治ばしをとゞろ〳〵とふみならし曉ふかくまゐるもろ人

正七位松山基範妻　松枝

神山のあかつきまうでみたらしにほしのかげさへむすびつるかな

田家雪（昭和十二年）

御製

みゆきふる畑のむぎふにおり立ちていそしむ民をおもひこそ。やれ

○ぞ……ける。

○うぶすな

皇后宮御歌

この秋もみのりよからむをやまだのさとましろにぞゆきのふりける

皇太后宮御歌

里人のいさみきほひて新米を納めしくらにゆきぞつもれる

選歌　神奈川縣　小津たみ

ぬま水のひかりもさむき葛飾の田づらの里に雪はふりつゝ

愛知縣　角田ともゑ

うぶすなの神にまうづる道のみは雪にあとあり小山田のさと

二　富士山

杉浦重剛

杉浦重剛　教育家、東宮御學問所御用掛、滋賀縣の人、大正十三年歿、年七十。

古來我が國は風景の美なるを以て稱せられ、名山甚だ多しと雖も、其の最も美なるものは富士を以て第一とすべし。

富士は駿河・甲斐の兩國に跨がりて、高さ三千七百七十八米、巍巍乎として雲表に聳ゆ。本來火山なるが、久しき以前より火息みたるものなり。山容秀靈にして整齊、詩人之を歌ひて、白扇倒に懸れる如しと爲す。恰も姿心共に正しき人の威儀端然として仰ぎ慕ふべきが如くなり。夫れ人の世に立つや、其の心を正しくし、其の容儀を整へ、一見人をして先づ心服せしむるの威容を具すること肝要なり。殊に高貴の人に於いて最も其の然るべきを覺ゆ。

凡そ山なるものは前より之を望み、後より之を眺むる時、多く

○巍々乎

○秀靈

○整齊

白扇倒に懸る東海ノ天。（石川丈山）

仙客來リ遊ブ雲外ノ巓、神龍棲ミ老ユ洞中ノ淵、雪ハ紈素ノ如ク、煙ハ柄ノ如シ、白扇倒ニ懸ル東海ノ天。（石川丈山）

○威儀端然

○心服

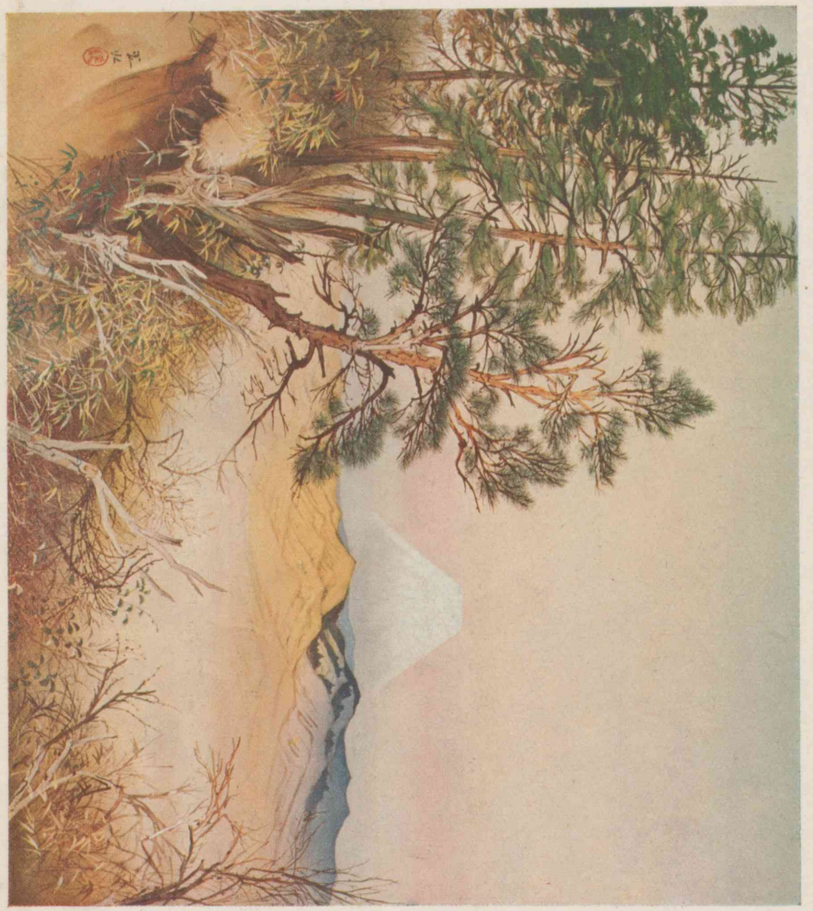
○八面玲瓏
○天眞
○世表に屹立する
○千秋
○皎潔
○清廉潔白

山部赤人　奈良朝初期の歌人、富士山を詠じた歌は萬葉集卷二にある。

は其の姿態を變ずるものなり。然るに富士は東西南北よりして之を望むに、山容殆ど相同じ。此の如きは天下稀に見る所、所謂八面玲瓏の美は、富岳獨り之を恣にするものといふべし、若し人を以て之に比すれば、偉大なる人物の天眞を發露したるが如く、陰翳なく、邪念なく、虛飾なく、悠々として世表に屹立するに似たり。

又富岳の頂を見るに、千秋の雪白皚々たり。恐らくは神代の色、其の儘にして傳へられたるならんか。崇高の限り、皎潔の極みなり。人にして清廉潔白、至誠を以て一貫するものあらば、當に之を富岳の雪に比すべきなり。

古來富士を推して、我が國の名山第一とするは、單に其の尺度の高きが故のみならず、其の靈氣人の心情を打つものあるを以てなり。萬葉集にある山部赤人の歌は能く此の心を詠じて古



富士

狩野探水筆

○絶唱

モリソン　新高山、海拔三九六二米。

○凌駕す

○同日にして談ずべからず

○欽仰す

今の絶唱と稱せらる。明治の御代、日清戰爭の結果として臺灣を獲り、此處にモリソンと呼ばるゝ一高山を得たり。高さ富士を拔くこと百數十米、帝國の領土第一の高峰たり。然れども之を富岳の神靈なるには比すべからざるなり。若し單に高さを以て言はば、ヒマラヤ・アンデス・ロッキイの諸山、皆富士を凌駕するものなり。然れども、其の山容の整齊にして端然たるは、何れも富岳と同日にして談ずべきにあらざるなり。これ富岳が我が神州の神山たる所以にして、獨り我が日本人が之を欽仰するのみな

富士山

○驚嘆す

某俳人　永機、老鼠堂と號した、明治三十七年歿、年七十六。

○適切

藤田東湖　水戸の藩士、幕末の志士、安政二年（一八五五）歿、年五十。東湖の正氣の歌　天地正大ノ氣、粹然トシテ神州ニ鍾ル、秀デテハ不二ノ嶽トナリ、魏々トシテ千秋ニ聳ユ、云々。

○模す

○ざるはなし

らず、歐米人の我が國に來遊するもの、先づ海上よりして、富岳を望みて、其の崇高なるを驚嘆せざるものなしといふ。

某俳人が、

日の本の堅看板や富士の山

といへる句を詠じたるあり。語稍俗なるが如きも、其の意は頗る適切なるものあり。富岳は實に日本山水の代表者たるのみならず、日本人の精神の表章たるべきものなり。藤田東湖が、其の正氣の歌に於いて、我が國人の正氣秀でて富嶽となれるを詠じたるは、則ちこの意なり。又我が國人が古來美術に秀でたるを以て稱せらるゝも、其の美術の模範たり骨髓たるものは富岳なり。繪畫にもせよ、彫刻にもせよ、皆富岳の美を摸せざるはなく、詩歌俳句も亦甚だ多しと爲す。故に若し富岳を取り去らば、我が美術の大半は失はるべきなり。思ふに地と人との關係は

○粹

村田清風　長門藩士、四郎左衛門と稱し後織部と改めた。

○强ち

○皇道

頗る密接なるものあり。日本の山水は能く日本人を生み得たり。而して富岳は其の山水の粹を集めたるものなり。

最後に一言を附加せんとするは、村田清風の歌に、

來て見れば聞くより低し富士の山
釋迦も孔子も斯くやあるらん

といへる一首あり。是れ强ち富士の低きを言へるにはあらずして、我が皇道の尊きに比すれば、或は釋迦孔子と雖も餘り高きものにはあらざるべしとの意を詠じたるものなり。富岳の崇高にして且つ優美なるは、天下何人か之を疑はん。

（倫理御進講草案）

笹川臨風　歴史家、文學博士、名は種郎、東京の人、明治三年生。

○滿目蕭條
○風情
○鬱葱
○一陣
○花信
○瑞籬　何事の云々　西行の歌、下の句は「かたじけなさに涙こぼるゝ」
○涼を趁ふ

三　鎭守の森

笹川臨風

滿目蕭條として田も畠も霜枯の風情見るかげもなき間に、一むらこんもりとして綠鬱葱たるものは鎭守の森なり。金も石もとけむばかりの夏の眞晝中に、一陣の涼風殿角より起りて、社前の注連繩はら〳〵と鳴れば、此處は子守・田夫等の安樂世界となりて、拜殿に晝寢の夢は圓かなり。春のあしたには、祠前一二株の彼岸櫻咲きこぼれて、一村に花信を傳へ、秋のゆふべには、社殿の蔦蘿、紅を染めて、夕日の色もまばゆし。花朧なる曉、月明き夜、松・杉暗くして、瑞籬のほとり神さびたり。詩趣獨りこゝに饒かにして、「何事のおはしますかは知らねども」神々しく覺ゆるなり。

日落ちて月漸く上る時、涼を趁ふ村人の影婆娑として、鎭守の

○翩翻
○天旱す

宇都宮二荒神社　國幣中社、栃木縣宇都宮市にある。

森は舞踏場と化するなり。祠頭の旗幟翩翻として風に靡く時、滿村の老幼織るが如く、鎭守の祭禮は一歲中、復と得がたき歡樂なり。年豐かなれば詣り謝し、天旱すれば雨を乞ふ。洵に鎭守の森は一村の望をあつめ、一鄕の中心として神聖なる、しかも面白き所たるなり。

鎭守の森

かゝる鎭守の森にいます神は多くはその土地、その土著の民と何等かの關係あり。溯つてこれを考ふれば、氏族・部民がその祖先を祀りたるものも少からずして、社格は鄕社・村社などなるが、官幣國幣の神社は、畢竟鎭守の森の大いなるものなり。卽ち、宇都宮二荒神社は毛野君の一族がその祖先を祀れる所なる

○千木高知る
○前賢の英魂
○奮勵・自彊
○天佑・神助
○勇氣を鼓舞す
○料
○保守的
○ざるべからす

べく、その大いなるものには出雲大社あり。しかしてその最も大いにして日本の鎭守たるものには、五十鈴川の上に千木高知れる伊勢大神宮もあらせ給ふなり。

鎭守の社は、小にしては一村の中心となり、大にしては帝國の中心となる。祖先の神靈、前賢の英魂は、長へに鎭守の社に留りて、子孫・後人の精神に通ひ、彼等をして奮勵・自彊せしむべし。天佑・神助の信仰は勇氣鼓舞の最良法なり。しかも信仰とは權道にあらず方便にあらずして、直に神に接し、靈に感ずる唯一の法なり。

祖先崇拜なるかな。これ獨り原始の觀念のみにあらず。祖先の勳功は後人奮勵の料たり、子孫の名譽心を發揮すべき興奮劑たり。たゞその崇拜をして保守的たらしむる勿れ、回顧的たらしむる勿れ。進歩的たらしめざるべからず、自覺的たらしめ

〔筆已勝津會〕　苑　神

○心なき田夫
○戀々の思
○風化

ざるべからず。

こゝに於いてか鎭守の森をして、一層、一村一鄕の中心たるの實あらしむべきなり、更に神さびて神靈の窟たるに適せしむべきなり。これが爲には苗樹を植ゑ、草葉を去り、祠宇を修め、園地を美にすべし。一村一鄕の崇敬地たらしめ、遊樂地たらしめ、集會所たらしめ、心なき田夫にも美の觀念を與ふる所、村人の誇とする所、他鄕に在りても猶戀々の思あるべき所たらしむべし。小學兒童の運動會もこれを中心としてこの附近に行はしむべし。小やかなる村落圖書館の如きもこのほとりに設けらるれば最も妙なるべし。鎭守の森をして一村一鄕の中心たるの實あらしむるは、蓋し風化の上に得る所極めて大いなるものあらむ。

相馬御風　文學者、名は昌治、新潟縣の人、明治十六年生。

○陳腐　月日は百代の云々　奥の細道の一節。

○すみか

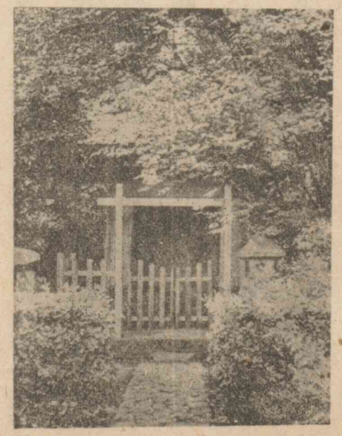
羇旅邊土の行脚云々　これも奥の細道の一節。

芭蕉　江戸時代の俳人、本名は松尾宗房、伊賀國の人、元祿七年(三三歳)歿、年五十一。

四　郷土の魅力

相馬御風

甚だ陳腐な事のやうであるが、郷土といふものの、人間の心を惹きつける作用は不思議なものである。一方に、「月日は百代の過客にして、往きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず。」といひ、或は「羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん。これ天の命なり。」等といつてゐたかの芭蕉翁でさへ、他方に於いては、「代々の賢き人々も、故郷



芭蕉の故郷

代々の賢き人々も云々　「歳暮」と題して知行の編纂した「千鳥掛」に載つてゐる。

○はらから

○齢傾く

伊陽　伊賀國。

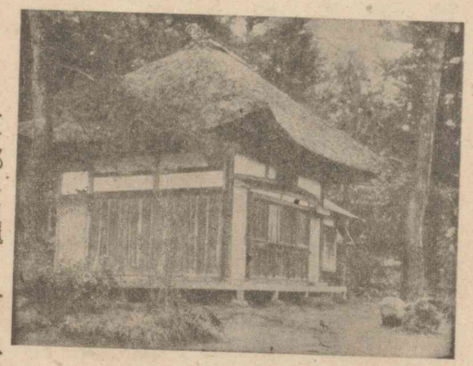
○いまそかり

○漂泊する

は忘れ難きものにおもほえ侍るよし。我、今は初の老も四とせ過ぎて、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまた齢傾きて侍るも見捨てがたくて、初冬の空のうちしぐるゝ頃より雪を重ね霜を經て、師走の末、伊陽の山中に至る。猶、父母のいまそかりせばと、慈愛の昔も悲しくおもふ事のみあまたありて、

ふる里や臍の緒に泣く年の暮」

などといつてゐる。



一茶の俳諧寺

故郷は蠅まで人をさしにけり

故郷やよるもさはるも茨の花

といつた風に、永い間自分の故郷を呪つて旅から旅へと漂泊し

一茶　徳川末期の俳人、本名は小林彌太郎信濃國柏原の人、文政十年（一八二七）歿、年六十五。

柏原　長野縣上水内郡にある町。

○稀有

良寛　徳川末期の歌人、越後國糸魚川の人、天保二年（一八三一）歿、年七十五。

○雲水行脚

○あきたる

○往生

○にき

てゐたあのすね者の俳諧寺の一茶ですら、晩年には、

これがまあつひのすみかか雪五尺

などと驚きながらも、その雪の深い信濃柏原の郷里に歸り住んでそこで一生を終へた。

更に、かの近世稀有の聖僧と云はれる越後の良寛和尚の如きも、二十三歳から四十三歳までの二十餘年間の雲水行脚の旅にあきたらないで、それ以來、ずつと越後の郷里に孤獨な庵住生活をつゞけて、靜かな往生を遂げてゐる。

故郷へ行く人あらばことづてん

けふ近江路をわれ越えにきと

良寛の五合庵

西行　歌僧、俗名佐藤義清、鳥羽上皇の北面の武士、建久元年（一八〇）寂、年七十三。

○しかく

草枕夜ごとに結ぶやどりにも

むすぶはおなじふるさとの夢

などといふ彼の旅中の歌を讀んでも、いかに彼が故郷を慕ふ思の切なるものであつたかを察することが出來る。

二十三歳で妻子を振棄てて佛門に歸し、諸國修業の旅に出た西行も、

柴の庵のしばし都へかへらじと

思はんだにもあはれなるべし

世の中を捨てて捨てえぬ心地して

みやこ離れぬ我が身なりけり

などと歌つて居り、且晩年には都に歸つて死んだ。

かういつた風に、昔からの代表的な漂泊の人々さへも、不思議に彼等の生まれ且育てられた郷土に對しては、しかく切なる愛

魅力

○理智的判斷
功利的見地
○美的判斷

○本然的情緒

慕の情をもつてゐた。抑この鄉土の人間に對して持つてゐる魅力はどこから來るのであらうか。

それは全く、「何とはなしに」である。理智的判斷によるものでもなく、功利的見地からでもなく、或は特に美的判斷の然らしむるといふでもなく、それはたゞ「何とはなしに」である。鄉土の人心を惹きつける魅力は、實にこの何とも言ひ現されないところから發する。それは自然と人間と、過去と現在とをひとつに融した、一種不思議なる音樂的な魅力である。また私達が鄉土を慕ふこゝろは、全く自分にもよくわからない內心自發の情緒である。いかなる力を以てしても否定しがたい本然的情緒である。この不可思議なる情緒の存在してゐる事實はおそらく如何なる理智の人といへども、否定することは出來ないであらう。

○失ひ。

エマーソン
アメリカの哲學者、詩人。（西暦一八〇三―一八八二）

けれども今の時代には、追々この自分の鄉土といふものを失ひかけてゐる人が多くなつてゐることも、亦明らかな事實である。愛慕すべき鄉土を失ふことは、同時に心靈の故鄉を失ふことである。漁夫に取つて、海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁夫は卽ち心の故鄉を失ふのである。農夫が、山野・田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、彼等は心靈の鄉土を失ふのである。

幾度も引合ひに出す言葉であるが、私にはどうもエマーソンの自然論の左の一節は忘れがたい。

「樵夫の伐る一箇の材木と、詩人の見る樹木との間には區別を生ずる。私が今朝見た愛すべき風景は、疑もなく二十・三十ほどの農圃から成立つてゐる。誰はこの畑を所有し、彼はかの畑を所有し、また某は向ふの森林地を所有してゐる。然し、彼等の中

誰一人もこの風景を所有するものはないのである。蓋し地平線の中には、あらゆる部分を全きものに統べて觀ることの出來る眼を持つた者の外には、何人も所有せぬ一つの財産がある。

即ちかくの如き人は詩人である。この財産こそ、是等三人の農圃に於いて最も優れたものであるが、彼等の所有證明書はこの財産に對しては何等の權利を與へぬのである。」

このエマーソンの所謂二つの心を併せ持つた人々が、最も幸福な農夫であり、樵夫であり、漁夫であり得ると私は思ふ。樹を材木として伐る樵夫は、同時に樹木を全き一つの物として眺め得る詩人であるのに、何の差間があらう。海をすなどりの場所とすると同時に、そこを心の郷土として愛することの出來る漁夫が、最も幸福な漁夫であるべきである。

郷土に定住して、さういつた幸福を見出し得る人は、眞に郷土

○すなどり

を有する人だとも云へる。私達にはさう云つた人々の生活が最も懷かしく思はれる。

自然は何といつても私達のこゝろの故郷である。脚氣患者が郷里に歸ることによつて、何時となしに健康を恢復することが出來るやうに、私達の傷ついたたましひは、心の底から自然を愛し、自然に懷かしむことによつて、その健康を取りもどすことが出來る。

自然を魂の郷土として懷かしむことの出來る幸福を、私達は永遠に失ひたくない。私達は、自分にも、また自分の周圍の人達にも、永遠に郷土の有する魅力を失はせたくない。それは私達のための搖籃であつて、また墳墓であるべきである。

（對山雜記）

○恢復する

○搖籃

貝原益軒　儒者、名は篤信、筑前國（福岡縣）の人、正德四年（一七一四）歿、年八十五。

○うつろふ
○消えがて
○こそ…なれ
○えならぬ
○けおさる

よしさらば　藤原爲時の歌（續古今集）。

五　四時の樂しみ

貝原益軒

一　花ざかり

花もやう〳〵咲きつゞきて、梅花既にうつろひて後新なるは、我が國ならぬからもゝの花なるべし。桃紅なるに、たなびく雲の面影の立つ心地す。李白きは、消えがての雪の梢に殘れるかと見えていとうるはし。

櫻の綻び出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動かしてえならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多き中にも、第一の見ものなれば梅散りて後、この頃のこと花は皆けおされぬ。されど、日頃待たせ待たせてやう〳〵咲けるが、飽くまで見るほどもなく疾く散るは、又うらめし。「よしさらば散るまでも見じ山櫻花のさかりを面影にして」と古の人の詠みけんも後

○しき〳〵
○うしろめたし
○柳綠に花紅
○か…んや
○思ふどち
○かいつらぬ
○あくがれありく
○無頼
○行樂す

杜　杜甫のこと。

陳希夷　支那五代宋初の道術家、西曆九八九年歿

醉ひて

の思ひ出にせんとにや、情深し。この折柄、春雨のしき〳〵ふれば、我が宿の園の櫻はいかにあらむとうしろめたし。柳綠に、花紅にして、春の色を畫がき出せるは、いと麗しき眺なり。

春やう〳〵深くなれば、風和やかに日暖かに、百草芳を爭ひ、群花艶を競ふ折なれば、何れの所か春のなからんや。かゝる景色にふれては、人の心も浮きたちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあくがれありき、ひねもす花を眺め暮すこそ、目を恣にし、心を快くするわざなれ。世の中の、いみじく嬉しきことのあるが中なる、その一つなるべし。わが心の樂しみを知らざる人は、無頼の少年の閑を偷みて、そゞろに行樂するに似たりと思ふべし。

芳草雨後に秀で、好花風裏に空しきも、この折なり。杜が詩に、「鶯ノ歌アタヽカニシテ、正ニシゲシ。」といひ、陳希夷が、「野花啼鳥一般ノ春。」と詠ぜしも、皆この時なり。花に坐し月に醉ひて、二

春宵一刻　宋の蘇軾の詩。
花ヲ惜シミテ　宋の林布逸の詩。
あたら夜の　あたら夜の月と花とを同じくは、心知れらん人に見せはや。（源信明―後撰集）
夜の間の風　朝まだきおきてぞ見つる梅の花。夜の間の風のうしろめたさに（元良親王―拾遺集）
惜しめども　惜しめどもとまらぬ春もあるものを、いはぬにきたる夏衣かな（素性法師―古今集）
○うら珍し
○今めかし
○めでたし
なん…めでたき
○緑蔭晝寂を生ず
○わびし
○閑談

つながらかねたる樂しみ、「春宵一刻値千金、花ニ清香有リ、月ニ陰有リ。」といふ詩の思ひ出でられぬ。又、「花ヲ惜シミテ春起早ク、月ヲ愛シテ夜眠遅シ。」といへり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人のあたら夜の月と花とに背きて、空しく臥すはいと惜しむべし。又、夜の間の風のうしろめたきをも知らで、朝起くる事遲きは、花を惜しまざるなり。

二　杜鵑

惜しめどもとまらぬ春已に去りぬれば、いはぬにきたる夏衣のうら珍しく、今めかしう改れる頃ほひ、大方の空の景色心地よげなるに、青葉の梢若やかに、物毎に春に立ちかはりて、又、世異なる有樣なるも、いとなんめでたき。

緑蔭晝寂を生ずれども、わびしからず。閑談に耽る人は繁花

心地すなる　空もとどろに五月雨の空もとどろに杜鵑、何をうしとて夜たゞ鳴くらん。（紀貫之―古今集）
○あなかま
今一聲　行きやらで山路くらしつ時鳥、今一聲のきかまほしさに。（拾遺集）
卯の花の　時わかずふれる雪かとみるまでに、垣根もたわに咲ける卯の花。（讀人しらず―後撰集）
○もはら
○餘寒
○さいつ頃
○鳴神
○おどろ〳〵し
○あやめ

にも優れりとす。折待ちえたる杜鵑の初音まづ懷かしくて鶯の啼く音すでに老いたるに代れる心地すなる。唐人は杜鵑の聲聞く事を惡めども、我が日の本にては昔よりこれを憐みて、歌にも多く詠めり。夜もすがら空もとゞろに啼き渡れども、聞く人皆あなかまとは思はず。多からぬ所は、今一聲だに聞かまほし。又、啼きゆく方の人も待ちなんと思へば過ぎゆくも更に怨むべからず。卯の花の垣根の雪に紛へるも、ひとりこの月の名を負ひて、美をもはらにすと謂ふべし。凡そ卯月の景色は清くやはらかにして、空晴れ雨久しく降らず、餘寒盡き、日彌永くして暇多ければ、出でて遊ぶによし。

卯月はかく空はれやかなれど、やがて五月になりぬれば、大空の景色さいつ頃に引きかへて、五月雨久しくつゞき折々は鳴神おどろ〳〵しくて、降らぬときだに曇らはしく、物のあやめも知

○垂れこむ

蓮

○わらふだ

蓮葉の　蓮葉の濁にしまぬ心もて、なにかは露を玉と欺く。（僧正遍昭―古今集）

○所せし

休ら。ふ。

○遣水

清少納言　清原元輔の女、平安朝時代の女流文學者、一條天皇の皇后定子に仕ふ。

夏は夜　夏は夜、月の頃は更なり。（枕草子）

らず、園をうかゞふべきひま稀にして、常に垂れこめて日數を經るもわびし。

三　端居の風

水無月の頃になりぬれば、端居の風したしく、わらふだ敷きて居るも快し。池の心深く、蓮葉の濁にしまずして、花ならで夕風に匂ひ渡るだにも、こと草にすぐれたり。殊に花の笑の唇開けたるは、所せきまで香りみちて、世に似たるものなく清らなり。涼を追ひて木蔭に休らひ、木々の下風のなつかしきに、清き泉を掬び、夏を忘るゝ心地するも、いさぎよし。光明らけき夜半の月を、清き水に宿して見るは更なり、遣水の音など聞くも、いみじう心ゆくばかりなり。日頃經て暑さ堪へ難きに、夕立のしぐれ渡りて、名殘涼しきも、いと快し。清少納言は「夏は夜」といひつれど、夕べは蚊といふ蟲人を螫して、年老いては殊更いみじう堪へ難ければ、たゞこのねぬる朝けの風の涼しきこそ、清くして心にかなひ侍りつれ。

○もなか

○ついでひとつ

○年のは

○上の弓張

○居待

○三秋

このねぬる　秋立ちて幾日もあらねばこのねぬる、朝けの風の袂さむしも。（安貴王―萬葉集）

こそ…つれ。

四　月の色

秋のもなかになりぬれば、一年を經て待ちえたる月あきらけきは、凡そ天地の間にならびなきついでひとつの見ものなればよろづのうるはしき景色は、皆その下なるべし。この夕べこの景にあへるこそ、うき世の中のおもしろさも、哀れさも、殘らぬ折なれ。年のはに、一とせのうち、月ごとに、上の弓張より居待の頃まで、空はれぬれば夜ごとに、心を樂しましめ、目を悅ばしむる事、更に數なし。ことさら、三秋の間、折々のいみじき光を、年ごとに心にまかせて、見る事、まことに幸多きこの世なり。凡そ、天が下

○八すみを知ろしめす

身にし餘りて

○分かず

○ほい

西行

俗名は佐藤義清、歌僧、建久元年（一八五）寂、年七十三。

ひとりぞ月は
寂しさに哀もいとゞまさりけり、獨りぞ月は見るべかりける。（顯昭―千載集）

○もろこしの人

李白

名は太白、號は青蓮、唐の詩人、寶應元年（西暦七六二）歿、年六十二。

の君は、八すみを知ろしめして、天地は皆その領し給へる國の内なれど、いやしきわが輩まで、天つ御空に唯ひとつ懸れる月をおのがものとして、ほしいまゝに仰ぎ見るもいともかしこく、身にし餘りて、いみじき幸なり。やどり分かず、賤しき巷をも同じく照らせる、いとめでたし。年々に、月と花とをあくまで見るは、まことに思ひ出多きこの世なりと謂ふべし。あたら夜の月なれば、同じくは心知れらん人と共に見んこそほいなれど、同じ心に見る人稀なれば、顯昭が、「ひとりぞ月は見るべかりける」と詠めるも、うべなり。もろこしの人も、「秋月ハ俗士ト見ルベカラズ。」といへり。李白は、「今人ハ古時ノ月ヲ見ズ。」といへれど、昔世々の人の眺めこしも、この月なれば古人のかたみとなれるも、昔おぼえてしのばし。古今の人の世を去りゆくは、流水の逝きてかへらざるが如し。たゞ月の光のみ、いにしへ今、かはる事なきこ

○こよなう

○えもいはぬ

○とりわき

○かはす

神無月

少し春ある

埋火に少し春ある心地して、夜深き冬をなぐさむるかな（藤原俊成―風雅集）

木の葉ふり

冬の來て山もあらはに木の葉ふり、殘る松さへ峰にさびしき（觀部成茂―新古今集）

○よそほしかり

そ、こよなうめでたくたふとぶべけれ。月の梧桐の上にいたり、風の楊柳の邊にきたるは、心を洗ひ興を催して、えもいはぬ快き折ふしなり。四時ともに思ひ出多きこの世なれど、とりわき秋の月見ざらん後の世の光までも思ひやられ侍る。

五　埋火

冬もきぬれば、今朝よりなるゝ埋火のもと、やう〳〵立ちはなれ難し。露と霜とおきかはし、紅葉色濃く、木々の梢、淺茅が原も冬枯の景色となり、面がはりするも、秋に異なる眺なり。神無月の時雨も過ぎて、日暖かなれば、少し春ある心地す。うべこの月を小春とぞいへる。されど、一の日、二の日、やう〳〵かさなれば風氣愈劇しく、木の葉ふりて山もあらはに見え、殘れる松も峰にさびし。春・夏・秋の艶なる景色、よそほしかりつる有樣、皆この時

に至りて盡きぬれば、殊の外にも變れる空かなと、目驚かれぬ。

日ごろ雪いみじう降りて、いかめしう積りたる曉は、山も里もひたすら銀世界となりて、世かはり景色異なる有樣なり。冬籠りせし梢の枯れたるも、再び花咲けるが如し。ことさら、冬の夜のすめる月に、雪の光りあひたる空こそ、見る人なく、獨り身にしみて、あはれも深けれ。空晴れて後まで、友待つばかり所々に消え殘りたるはだれ雪も、いと心にくし。かゝる時、する業なく、ただ袖ぐくみしていらゝき居る人は、いとわびしげに見ゆ。或は埋火にむかひ、文を卷きひろぐるを以て業とする人は、樂しみ深くぞありぬべき。凡その事、年に先立ちて早く計るべし。若き時勉めて文を讀みならはば、かゝる時もわびしかるまじ。

（樂訓）

○いみじう
○いかめしう
冬の夜の花紅葉の盛りよりも、冬の夜のすめる月に雪の光りあひたる空こそ（中略）面白さもあはれさも殘らぬ折なれ。（源氏物語）
○はだれ雪
○心にくし
○袖ぐくむ
○いらゝく
樂訓　三卷、貝原益軒著、益軒十訓中の一、人間の諸種の正しき樂しみに關する論說・感想を記せしもの、寶永七年（三七〇）作。

六　女流俳人

荻原井泉水

女流の俳人は古來甚だ少い。芭蕉の時代に、乙州の母の智月尼、去來の妹のちね、凡兆の妻の羽紅は、七部集の中にもその句が見えてゐるし、伊勢の園女や、加賀の千代女や、江戸の秋色女などは逸話を以てその名が著れてゐる。これ等の女流を一作家として見ると、さして秀でた人はないやうであるが、女は女だけに、感情の調子が柔らかくて潤がある。それが、枯木に時雨の音を聞くやうな、閑寂な趣味を貴んだ昔の俳句の中にあつて、殊更珍しく、寒椿の一二輪を見るやうな氣がする。

女流の俳人には二つの型がある。一つの型は、弱々しい纖細で、若くて佳い句を殘して、死んで行く人である。ちねも三十にならずに死んだらしく、文政年間の花讃女も、二十三で死んだ。

荻原井泉水　俳人　名は藤吉、東京の人、明治十七年生
芭蕉　蕉風俳諧の祖、松尾氏、伊賀の人、元祿七年（一六九四）歿、年五十一。
乙州　俳人、川井氏、芭蕉の門人、近江の人、生歿年未詳。
智月尼　俳人、川井氏、近江の人、芭蕉の門人、生歿年未詳。
去來　俳人、向井氏、長崎の人、芭蕉の門人、寶永元年（一七〇四）歿、年五十四。
ちね　長崎の人、清水藤右衛門に嫁す、元祿元年（一六八八）歿。
凡兆　俳人、宮城氏、加賀の人、芭蕉の門人、正德四年（一七一四）歿。

羽紅　名はとめ。七部集芭蕉及びその門人の俳諧集。

園女　斯波一有の妻、芭蕉の門人、享保十一年（一七二六）歿、年六十三。

千代女　福岡彌八の妻、乙由の門人、加賀國松任の人、安永四年（一七七五）歿、年七十四（一說に七十三）

筆蹟　蕨のみだれはや山法師通りしか　園女

秋色女　大目塞玉の妻、其角の門人、享保十年（一七二五）歿、年五十七。

文政　仁孝天皇の御代の年號。

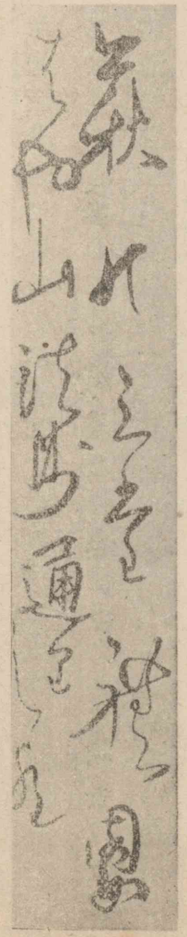
花讃女　古川氏、名はまつ、萬里の門人、天保元年（一八三〇）歿。

捨女　田氏、丹波の人　元祿十一年（一六九八）歿、年六十五。

多代女　市原氏、岩代國須賀川の人、慶應元年（一八六五）歿、年九十。

筆蹟　井戸ばたの襁あぶなし酒の醉　秋色

他の一つの型は、夫に別れてから、孤獨の心を俳句で慰めて、隱遁的に安住したり、又は髮を落して尼になつたりして、心持も男性に近く變つて來る人である。この型の人は、皆長生をしてゐる。園女は六十三歳、智月尼・千代女は七十餘歳、捨女は六十五歳、多代女の如きは九十歳までも生きた。



園女筆蹟

●園女は伊勢の松阪の人で、晩年芭蕉が大阪のその家に立ち寄つた時、「白菊の目に立てて見る塵もなし」といつて、賞讃した句を以て見ると、いかにも貞淑な清艶な婦人であつたらしく思はれる。

2 寢どころへ扇にするゑし螢かな

○負うた子に髮なぶらるる暑さかな

○生業

○逸脫する

照降町　今の日本橋區小舟町。

かうした句も女らしい。

その後、園女は江戸に出て深川に住み、眼科醫を生業とした。又禪を學んで智鏡尼と名を代へた。剃髮をした頭上に、わざと十本許りの髮の毛を殘して置いたといふのでも、晩年にはよほど逸脫して、女離れがしてしまつたやうである。

秋色女筆蹟

●智月尼の句には美しい繪畫がある。

山ざくら散るや小川の水車

雲の間の星見てゐるや杜鵑

秋色女は、江戸照降町の菓子屋の娘だつた。十三の時、上野の

花見に來て「井戸端の櫻あぶなし酒の醉」の句を詠んで、俄に名高くなつた。その對象になつたといふ櫻から、幾代目かの樹が、今も清水堂の裏手に秋色櫻として殘つてゐる。さる丈名から俳諧のために召された時、父がその庭を拜觀したいため、下男に扮してついて行つた。歸りしなに雨が降り出したので、秋色女には駕籠を下されたが、門を出ると、秋色女は父を駕籠に乘せて、自分は下男になつて、駕籠について歸つたといふ話が、名高いものになつてゐる。

すゞしさや日の落ちかゝる海の上

は、この人の佳い句といふべきであらう。

捨女は丹波柏原の人で、六歳の時に、

雪の朝二の字二の字の下駄のあと

といふ句を詠んだといふほどだが、その作風は、

○さる

○扮する

柏原　兵庫縣氷上郡。

うきことになれて雪間の嫁菜かな

といふ風なもので、女らしくはあるが、句としては感服されない。

この人も剃髪して、播州の網干に庵を結んで長生した。

凡兆の妻羽紅は、

霜やけの手をふいてやる雪まろげ

縫物や著もせずよごす五月雨

などで見ると良妻賢母らしい。

女流俳家としては、何としても加賀の千代女が傑出してゐる。

千代女の句には女らしい優しさが生きてゐる。

蝶々や何を夢みて羽づかひ

ともし灯の用意や雛の臺所

夕顔やもののかくれて美しき

かういふ句にはどうしても男には詠まれない、女性獨得の境

網干　兵庫縣揖保郡。

○傑出する

○境涯

○小心

○神經質

○素振

涯がある。併し、この優しい感情が、やゝもすると女らしい小心や、女らしい注意となる。

白菊や紅さいた手の恐ろしき

根をつけしをなどの慾や堇草

それがまた神經質過ぎる思ひやりともなる。

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

これは千代女の名と共に、普く知られてゐるが、どうも優し過ぎて、この優しい氣持を見て下さいといふやうな素振の見えるのが厭である。女らしく佳い所があると共に、女らしく惡い所がある。それは又、女流一般の俳句といふものの缺點でもある所以なのだ。

男さへ聞かれぬものをほとゝぎす

けふばかり男を使ふ田植かな

○淺薄

松任　石川縣石川郡。

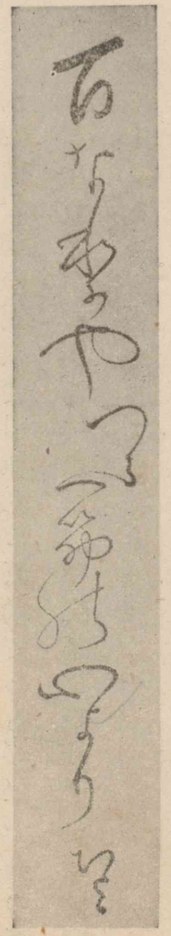
支考　俳人、各務氏、芭蕉の門人、美濃の人、享保十六年(一三九一)歿、年六十七。

盧元坊　俳人、仙石氏、延享四年(一四〇七)歿、年五十六。

筆蹟　百なりやつる一筋の心より　ちよ

この樣に男に對する女の位置を詠んだものも淺薄に聞える。

千代女は加賀の國松任の產で、幼少の時から句を好んだ。支考の門人の盧元坊が松任に來た時、千代女はその旅宿を訪うて、始めて敎を乞うた。その時、杜鵑といふ題で苦吟して夜を徹した後、「ほとゝぎすほとゝぎすとて明けにけり」と作つて、その才を認められたといふ話もある。



千代女筆蹟

子を亡くした時、

蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら

破る子のなくて障子の寒さかな

剃髮して妙林尼と號した時、

○人口に膾炙する

○後　代

乙二　俳人、亘理氏、陸前國白石の人、文政六年（一八二三）歿、年六十九。御忌　法然上人の忌日、毎年一月二十五日。

髪を結ふ手のひまあけて火燵かな

これなどは、いづれも人口に膾炙してゐる。人情味が強く出てゐるところが人をひきつける。

女流の俳人で、最も多く佳い作を殘した人としては、私は寧ろ後代の多代女を擧げたい。

多代女は、岩代の國須賀川の人、市原氏である。二十一の時壻を失つてから、乙二の門に俳諧を學び、晩年江戸に出て諸俳家と交はつた。

空にみち空にきゆるや御忌の鐘

根に雪のはきためてある椿かな

鶯や宿はともしをくばるまで

行くも來るもみな春風の堤かな

有明の野ずゑに白し春の水

○月竝調

○風靡する

○先鞭をつける

句風が一體に客觀的で、引きしまつてゐて、危げがない。これほどしつかりした句を作つた人は、嘗て女流にはない。併し、それだけ女らしい所は少しもない。

山吹やむしろの上の土人形

橋詰に小店のかゝる新樹かな

賣れ殘る市の庭木やほとゝぎす

天保の月竝調が一世を風靡してゐた中に立つて、明治の寫生風に先鞭をつけてゐるのは、實に偉いといはねばならぬ。

生きすぎてわれも寒いぞ冬の蠅

かの女は九十歳まで生き、生前に自分の句集も出して、慶應元年に死んだ。

樋口一葉、文學者、名は夏子、東京の人、明治二十九年歿、年二十五、
江の島　神奈川縣鎌倉市の海岸に近い島、
鎌倉　神奈川縣鎌倉市。
珍しう。　○蝸牛の殼　申し。し
高う。

七　秋海棠

樋口一葉

人に誘はれ候ひて、一夜泊りに江の島・鎌倉をと、珍しう蝸牛の殼を出で候處、きのふ立ちかへり、留守居のものより聞き候へば、「一昨日の午後、御車にて美しき孃樣おはしまし、御留守なる由申ししに、『然らば又こそ』とて御立ち歸り遊ばされしが、御土產はこれ」とて、見事なる一折差し出し見せ候。この女、田舍の親類より下女代りにと居らせたるにて、私宅にはまだ居る日の淺ければ、どなた樣をも御見知り申上げず、仰せ置かれし御名前をさへ何時しか忘れて、あまたゝび首のみを傾け居り、「見上げたる所、御年は二十歲ばかり、御束髮に高う遊ばされ、色白にて如何にも美しき方」と、唯是ばかり申し候まゝ、私も考へつき候はず、編物教へまゐらせたる子爵の姫君二方の中か、然らずば例の參事官が御妹

若う。

秋海棠（シウカイダウ）高さ約六十糎、花は淡紅色で雄花と雌花がある。
○まゝ　近う。

かと、知れるほどの年若う美しき人を選りては、その御名申し試みるに、「いな〳〵、さにも候はず、候はず」とて、更に御人知れ難く、困じてそのまゝ昨日は暮し、今朝起き出でて嗽ぎながら、ふと中庭に秋海棠の美しく咲けるを見出で候まゝ、「あはれこの花の優なることよ。懷かしくもあるかな」と、獨りごち候ひしに、緣先近う箒を執りゐしこの女、あわただしき聲を立てて、「それよ、一昨日の御方はこれが名に能く似たまへるなりき。何かいだうとやらん」と口疾く申し候、「さらば二階堂の君か」と言へば、「まことにその通り」と申されて、手に持つ楊枝取落し、打ち笑はれ候ひき。

二十歲ばかりとだに言はずば、やがて御上とも思ひつくべきを、「孃樣」と先づ言はれしかば、唯年の若き人をのみ選り出して問ひ聞きたる愚かさ。實に束髮に遊ばされなば、人の親とも見えさせ給ふまじく、こゝなる婢女が、十九・二十と思ひしは誤にもあ

○いとど　など。……
○けん。　難う。
○口惜しう。
○さるにても
○ありき
○とまれ

らざるべく候。斯くと知りしより、いとど御目にかゝらざりし残念さまさりて、など稀々の御訪問に折悪しき不在になしたりけん。取返し難う口惜しう思はれ申し候。賜はり物今ぞ水引を解きて心安く頂戴、有難く御禮申し上げ候。さるにても萬一こゝもとに御用などにて御入りにはあらざりしや。御道も近からず、御事多き御前様の、例ならぬ御ありきはと考へられ候まま、御詫びかた〳〵歸京の御知らせ申し上げ候。急なる事にも候はば御郵書御遣はし下されたく、御急ぎならぬ御用などにも候はんには、何れ私近々に參上致すべき心得に候まゝ、その折御聞け願ふべく、とまれ御人定かになりしを喜びて。かしこ。

（一葉全集）

○さるほどに　皇居　笠置の行在所。
主上　後醍醐天皇。
○卿相雲客
藤房　藤原氏、南朝の忠臣。
季房　藤房の弟。
○十善の天子
○田夫野人
○あさまし
赤坂　大阪府南河内郡金剛山の北麓、當時楠正成の居城があつた。

八　松の下露

さるほどに類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々卿相雲客みな徒跣（かちはだし）なる體にて、いづこを指すともなく、足にまかせて、落ちゆき給ふ。この人々、始め一二町が程こそ主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第にわかれ〳〵になりて、後にはたゞ藤房・季房二人よりほかは、主上の御手を引きまゐらする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひてそことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有樣こそあさましけれ。いかにもして夜の中に赤坂の城へと御心ばかりを盡くされけれども、假にもいまだ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路を辿る御心地して、一

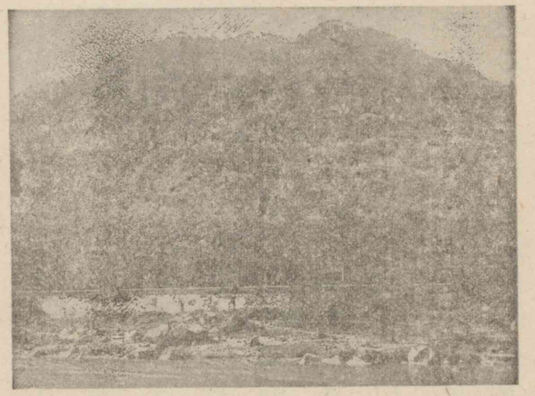
多賀郷　京都府綴喜郡多賀村。

○てけり

○たゆむ

○現の夢

足には休み、二歩には立ちどまり、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隱させ給ひて、寒草のおろそかなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分けまよはせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかうして夜晝三日に山城の多賀郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。



笠置山

藤房も、季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れて、今はいかなる目に逢ふとも、逃れぬべき心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣・兄弟もろともに、現の夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞し召して、木の蔭に立寄らせ給ひたるに、下露のはら〳〵と御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

○あめが下

さして行く笠置の山を出でしより
あめが下には隱れがもなし

藤房卿涙をおさへて、

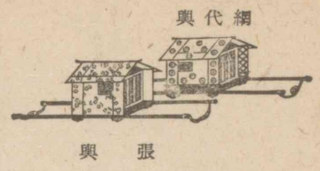
○天恩

いかにせん賴むかげとてたち寄れば
なほ袖ぬらす松のしたつゆ

○ばや

山城の國の住人深須入道・松井藏人二人、この邊の案内者なりければ、山々峰々のこる所なく搜しける間、皇居隱れなく尋ね出され給ふ。主上誠におそろしげなる御氣色にて、「汝等心あるものならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ。」と仰せられければ、さしもの深須入道俄かに心變じて、「あはれこの君を隱したてまつつて義兵を擧げばや。」と思ひけれども、あとに續ける松

○うたてし



南都の内山　奈良の内山、永久寺。

夏臺　支那夏の時の獄名、夏の桀王、湯を夏臺に囚へたことがある。

越王云々　越王勾踐、呉王夫差と會稽山に戰ひ破れ捕へられた故事。

十月二日　元弘元年。

關東の兩大將　金澤貞冬・大佛貞直。

井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして道の成り難からん事をはかりて、默しけるこそうたてけれ。俄かの事にて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乘せまゐらせて、まづ南都の内山へ入れ奉る。その體、たゞ殷湯夏臺に囚はれ、越王會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。これを聞き、これを見る人毎に、袖をぬらさずといふ事なかりけり。

この時こゝかしこにて生捕られ給ひける人々都合六十一人、その所從眷屬どもに至るまでは計るに遑あらず。或は籠輿に召させられ、或は傳馬に乘せられて、白晝に京都へ入り給ひければ、その方ざまかと覺ゆる男女街に立ちならんで、人目をも憚らず泣き悲しむ、あさましかりし有樣なり。

十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞三千餘騎にて路を警護仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日、關東の兩大將、京へは入らずして、すぐに宇治へ參り向かひて龍顏に謁し奉り、まづ三種の神器を渡し給はりて、持明院新帝へ參らすべき由を奏聞す。主上、藤房をもつて仰出されけるは、「三種の神器は古より繼體の君、位を天に受けさせ給ふ時、自らこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて、暫く天下を掌に握るものありといへども、未だこの三種の重器を自ら擅にして新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本堂に捨ておき奉りしかば、定めて戰場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも吾が國の守とならせ給はぬことあらじ。寶劍は武家の輩、若し天罰を顧みずして、玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させ給はんずる爲に、暫くも御身を放たるゝことあるまじきなり。」と仰せられければ、東使兩人も六波羅も、ことばなくし

持明院新帝　北條高時の擅に擁立し奉つた光嚴院

○内侍所

○龍駕鳳輦

○袞衣

太平記
室町時代初期に出來た軍記物　四十卷
建武中興吉野朝時代の葛藤を取扱つたもの、作者は未詳。

て退出す。

翌日龍駕を廻らして六波羅へ成し參らせんとしけるを、さきざき臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を、强ひて仰出されける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に御逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸に事かはりて、鳳輦は數萬の武士に打圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠輿・傳馬に扶けのせられて、七條を東へ河原を上りに、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ　悲しいかな、昨日は紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の裝をつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の嚴しきに御心を惱ませらる。時移り事去り、樂しみ盡きて悲しみ來る。天上の五衰、人間の一炊、たゞ夢かとのみぞ覺ゆる。

（太平記）

右近大將長親
藤原家實の子、學者、歌人、永亨元年薨、年八十餘。

前大僧正賴意
傳未詳。

妙光寺內大臣
花山院家賢、師賢の子、貞治五年薨、年三十七。

九　吉野の宮

千首の歌奉りし時、嶺の花を　　右近大將長親

月のこる峰の梢は明けやらで風に分かるゝ花の横雲

新樹を　　前大僧正賴意

花に見し昨日の春の面影も何時しかかはる夏木立かな

曙郭公といふ心を　　妙光寺內大臣

ほの〴〵とあくる外山の横雲に鳴きて別るゝ郭公かな

後醍醐天皇御製

吉野の行宮にて上のをのこども題を探りて歌よみ侍りけるついでに五月雨のことをよませ給うける

都だに淋しかりしを雲はれぬ吉野の奥の五月雨の空

藤原行房朝臣　世尊寺經平の子、後醍醐天皇の近習。
後村上院　後村上天皇。
新待賢門院　藤原廉子、後醍醐天皇の御妃、後村上天皇の御母君。
從三位行義　傳未詳。
坂　駿河の宇津の山。
阿部　駿河國にある。
權中納言長賢　長親の弟。

後醍醐天皇御製

河月をよませ給うける

照らし見よみもすそ川に澄む月も濁らぬ浪の底の心を

題不知　藤原行房朝臣

かへり見る都の方も雲とぢてなほ遠ざかる五月雨の空

後村上院御製

夕立をよませ給ひける

鳴る神の音は雲居に高砂の松風ながら過ぐる夕立

題不知　新待賢門院

花はまだ片枝ばかりに咲きそめて露のみ繁き庭の萩原

同　從三位行義

村雨の過ぎ行く雲は坂越えて阿部の田のもに秋風ぞ吹く

妙光寺内大臣の家の百首に　權中納言長賢

文貞公　花山院師賢、師信の子、元弘元年歿、年三十三。
○きほひ鳴く
前内大臣隆　隆は隆俊のこと、隆資の子。
嘉喜門院　後村上天皇の御妃、長慶・後龜山兩天皇の御母君。
宗良親王　後醍醐天皇の皇子、中務卿、新葉集撰者。
小手指が原　埼玉縣入間郡にある。今の所澤の附近

雁鳴きて寒き夕べの山かげに木の葉いろどる秋風ぞ吹く

文貞公

ある野原の中にて夜を明かしけるに、秋の末つ方なれば蟲の聲々きほひ鳴くを聞きて、思ひつゞけ侍りける

古はつゆ分けわびし虫の音をたづねぬ草の枕にぞ聞く

冬の歌の中に　前内大臣隆

吹き迷ふ嵐につけて浮雲の行くへ定めず降る時雨かな

江寒蘆をよませ給ひける　嘉喜門院

なには江や汀の蘆の夜もすがら結べる霜を拂ふ浦風

宗良親王

武藏の國へうちこえて、小手指が原といふ所におり居て、手わけなどし侍りし時、いさみあるべ

き由つはものどもに召し仰せ侍りしついでに
思ひつゞけ侍りし
君がため世のため何かをしからむ捨ててかひある命な
りせば
越の國に侍りしころ覊中百首歌よみて都なる
人の許へ遣はし侍りし中に、初冬を
都にも時雨やすらむ越路には雪こそ冬の初めなりけれ

權中納言眞行

あづまに赴き侍りけるに逢坂の關を越ゆとて
思ひつゞけ侍りける
歸るべき道しなければこれやこの行くをかぎりの逢坂
の關

（新葉集）

權中納言眞行
北畠師行の子、元弘二年五月關東下向、同六月十九日に近江國柏原にて殺さる。

新葉集
二〇卷、宗良親王御撰、元弘以後弘和に至る吉野朝の人々の歌集で勅撰に準ぜらる。

魚澄惣五郎
史學者、大阪府女子專門學校教授、兵庫縣の人、明治二十二年生。

護良親王
後醍醐天皇の第三皇子。
御子左爲世
氏は藤原。
長家―忠家―俊忠―俊成―定家―爲家―爲氏―爲世

○造詣
○さこそ
○東奔西走
○切實

一〇　新葉集の精神

魚澄惣五郎

後醍醐天皇の皇子幾柱かおはします中に、わけても和歌に秀でさせられたのは、宗良親王であつた。親王は大塔宮護良親王の御弟宮にましまし、御母は歌道の達人權大納言御子左爲世の女、贈從三位爲子と申上げ、堪能な歌人として聞えた御方である。されば親王がこの道に御造詣深かつたのも、さこそと察せられる。

親王はまた中務卿征東將軍宮として、或は關東に、或は越路に、或は東海に、御鎧は曉の霜に白く、御劍は夕の星に閃き、東奔西走ただ皇家中興の御爲に盡くされること、殆ど吉野朝廷五十七年の歷史と終始された。親王の御歌を拜誦すると、いかにも心の底からにじみ出るやうな切實な感じを受けるのも、全くこのた

○悲壯激越

○高調する

○ちはやぶる

めであらう。親王の御家集を「李花集」といつたが、また親王は吉野朝廷君臣の詠歌が、徒に朽ち果てることを惜しまれ、長慶天皇の弘和元年に「新葉和歌集」二十卷を撰ばれて、天皇に上られた。この歌集は後醍醐天皇の元弘元年から御三代五十餘年に亘る吉野朝廷君臣の作歌のみから成り、その內容は時代共通の形式的な歌風を多分に有しながらも、憂國の精神に滿ち、風格おのづから悲壯激越なものが多い。

實に吉野朝廷の崇高な精神は、この歌集によく發揚されてゐるといつてもよいので、まさに北畠親房の「神皇正統記」が堂々として吉野朝正統論を高調するのと相應ずるものといはねばならぬ。その御序に「ちはやぶる神代より、國をつたふるしるしとなれる三種の寶を承け傳へましまし」と述べさせられたのは親王の御信念の固きを窺はしめるもので、この歌集最後の

○首尾相應する

○わけても

後村上天皇の御製に「四つの海浪もをさまるしるしとて三つの寶を身にぞ傳ふる」とあるのと首尾相應じて、この歌集のもつ尊嚴さに胸打たれるのである。

この集に載せられた歌の數は、凡そ千四百二十餘首に上つてゐるが、わけても後醍醐・後村上・長慶三天皇の御製の如きは、深い感激なくては拜することの出來ないもので、

後醍醐天皇御製

こゝにても雲井の櫻さきにけり
たゞかりそめの宿と思ふに

後村上天皇御製

鳥の音におどろかされて曉の
ねざめしづかに世を思ふかな

長慶天皇御製

なにとかく濁り行く世ぞ石清水
　　人の國とは神もおもはじ

の如き、畏くも亂れた世を慨かせられ、皇家一統の御世を神かけて祈りたまふ大御心が拜察されて、恐れ多い極みである。諸皇子またこの天意を體して、おのおの南船北馬皇軍を指揮されたので、宗良親王が武藏の小手指ケ原の戰の時に、その雄々しい御心情をのべられた御歌の如き、御氣魄の迫るものあるを覺える。

元弘・建武以來の文武の功臣が空しく義に殉じて世を去り行くのを歎かせられて、後醍醐天皇が「事問はん人さへ稀になりにけりわが世の末の程ぞ知らるゝ」と詠ぜられたのは、宸衷のほどを洩らし給うたのであるが、やがて天皇も延元四年秋南山の皇居に崩御遊ばされた。宗良親王は遠江井伊城にあつて遙かにこれを聞召され、お歎きになつたが、折節秋の盛りであつた

○南船北馬　雄々しい御心情を云々　君のため世のためなにかをしからむすてはてかひあるいのちなりせば。
○氣魄
○宸衷
南山　吉野山をいふ。
井伊城　靜岡縣引佐郡伊谷村にあつた。

四條隆資　吉野朝の忠臣。

○境地
○風流閑事
○公卿
○殿上人
○泯ぶ

ので、一枝の紅葉に左の和歌を添へて四條贈左大臣隆資の許に送り哀傷の御心を述べさせられてゐる。

思ふにはなほ色淺き紅葉かな
　　そなたの山はいかゞ時雨る

かくこの歌集は特殊の境地の詠作にかかるものが多いので、痛切な實感から出たものであるから、作歌も尋常の風流閑事とは異つてゐる。

この他、公卿・殿上人等の詠じたものも數々載せられ、何れもその歌は忠誠の心情があふれ、人の心を動かすもの多く、吉野朝忠烈の士の遺恨思ふべきものがある。

實に新葉集は國體の精華が美しく發揮されたもので、その詠歌の精神は、たとへ吉野山の花枯れる時があつても、永へに泯ぶべきものではないであらう。

年たち返り　安德天皇の養和元年。

○きしかた　○こしかた

伊東祐親―祐泰―祐成
　　―祐信
曾我―祐信
滿江―時致

○陳じやる　狩場　靜岡縣赤澤山の狩場。

工藤一萬　即ち祐經。

鎌倉殿　源頼朝。

○きり者

二　空行く雁

新玉の年たち返り、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕ぐれ、箱王は母の膝の上にたはぶれながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛はいづくにましますぞや。往きてをがみたてまつらばや。母御前いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたるこしかたも、今更おもひいだされて、消えいるばかり思はれて、母泣く〳〵のたまひけるは、「あの曾我殿こそ、おのれ等が父にてあれ。」と、心強くかたらひけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

箱王、かさねて申しけるは、「父御前は、まことやらむ、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一萬とやらむに射られ、死にたまひぬと、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。われらをも殺さんとや思ふらん。われらがこの里に在りと知らでや過ぐらん。」など、おとなしく語りければ、母よりはじめて女房たちまで皆袖をぞ絞りける。

この里　神奈川縣足柄下郡曾我中村。

○おとなしくぞ…ける。

○隈もなし

○すら　○人倫

河津殿　三郎祐泰。

○だに

かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの、南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。空を飛ぶつばさもみな、別の翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥のなかに、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物いはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫にうまれながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は、實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。われらが父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢

○ありく

○こざかしく

をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。われ〳〵より幼き者にても、馬鞍・弓矢をもて物を射ありくことの羨ましさよ。

これらの事ども思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。」とて、袖に顔を差入れて、さめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顔を合はせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし。人もこそ聞け。いかに、和上薦達、夜も更けぬるに、さやうにておはするぞ。とく〳〵入らせ給へ。」と、怖しげにいひければ、二人のものは門外へ逃げいでて、思ふやうに飽く迄泣

一萬と箱王　（飛田周山筆）

○遠侍

○明障子

○年ばへ

○仰天す

○謀叛

きて後に内に入りけり。

或時兄弟は竹の小弓に薄矧の小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人立向かひ、あなたこなたへ射とほして、一萬、箱王に申しけるは、「われらもいつか成長し、和殿は十三、われは十五にだにもなるならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經を、かくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ。われも射習はむ。弓矢は男の一の能にあるなるぞ。」といひければ、弟もうちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖しきことかなと人々思ひけり。

一萬が乳母此のよしを聞知りて、大きに驚きて母にかくと申しければ、母も大いに仰天し、二人の子供を呼びよせ、泣く〳〵語られけるは、「まことか、おのれ等がさも怖しき謀叛を起さんと

伊東入道
祐親。

千鶴御前
母は祐親の女。

松河が淵
靜岡縣田方郡伊東にある、石橋山附近

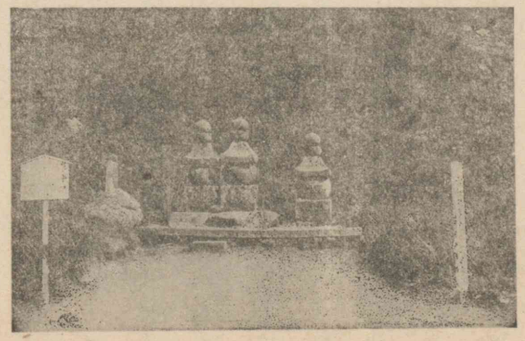
石橋山
神奈川縣足柄下郡。

石橋山の戰
治承四年八月。

土肥の杉山
神奈川縣足柄下郡土肥の山谷、石橋山の南。

梶原景時
頼朝の寵臣。

議しあふなるは。もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りしゆゑに、御敵となつて、先年伊東の館において失はれ給ひぬ。おのれ等かゝる謀叛人の孫なれば、敵、左衞門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。その時千度百度悲しむとも、かなふべきか。そのうへ汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申してとゞまりたり。その故は、鎌倉殿石橋山の合戰に打負けて土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と、二人心をあはせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされし、その御恩を皆返しまゐらせて、『二人の幼き者


曾我兄弟の墓

○希有
○芳恩
○生々世々

曾我物語
鎌倉末期に出た曾我兄弟のことを記した物語、十二卷、作者未詳。

どもを助けて給はらん。』と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、『それほどの志ならば、二人の子供、祐信に預くるぞ。』と仰せられける故にこそ汝等も安穩にて、今まで希有の命を保ちたるぞ。それにつけても、曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡くすべきか。鳥類畜類にても恩を知るとこそ聞け。況んや汝等人倫においてをや。然るを却つて曾我殿に歎を與へん事、返すゞ〳〵も口惜しかるべし。その恩を報ぜんと思はば、速に謀叛をとゞむべし。」と口說きたてて誡められければ、二人の子供目と目とを見あはせ、顏うち赤めて立ちにけり。

それより後は人の聞かぬところにては內々相議しけれども、人目に顯れては語り合ふこともなし。母も內々怖しき者どもの心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせんとぞ思はれける。

（曾我物語）

新井白石　徳川中世の政治家、學者、名は君美、享保十年（一七二五）歿、年六十九。

父　名は正濟。

寅の時　今の午前四時頃。

埋み。て　埋め。て

忌日　炊ぐ

三　我が父母

新井白石

我、物の心を辨へしよりこの方のことは覺えしに、父が日々のことたゞ同じさまにして、つゆたがふところおはせざりけり。寅の時ばかりには必ず起出で給ひて、水をもて身を洗ひ滌ぎて、自ら髪取上げ給ひき。夜寒き頃は、母にておはせし人の、「我も齢の傾きぬれば、夜寒に堪へず。」とて、圍爐裏に火を埋みて、それに足さし臥し給ひて、鑵子に湯を入れて、火の邊にさしおいて、父起出で給ふ時に、その湯を參らせられたりき。

二人ともに佛の道をたふとみ給ひしが、父にておはせし人の、髪取上げはててては、衣裳改めて佛を禮し給ふこと、曉ごとに怠り給はず。父母の忌日には、手づから飯を炊ぎてすゝめられ、下部等に命ぜられしことあらず。夜未だ明けざるほどは、坐してあ

出仕す

したを待ちて、夜明けはてて出仕し給ふ。父のおはせし處は南にありて、出仕し給ふべき門は北にありしに、朝には東よりし、夕には西より道し給ふ。雪踏とて革を底にしたるものを召して、いかにも足音の高らかに聞ゆるやうに過行き給ひしかば、我が父の來り給ふは皆人の聞知りしほどに、幼き子もその啼をとゞめたりき。

新井白石

我が物覺えしよりは、髪に黑き筋は少かりき。面は方におはしまして、額上高く起り、眼大きく、鬚多く、丈は短くおはせしかど、すべて骨太く逞しく見え給ひたりき。天性喜怒の色あらはれ見え給はず。笑ひ給ふには、聲高く笑はせ給ひしことは覺えず。まして人を叱り給ふには、あら

あらしきことを宣ひしことを聞かず。物宣ふことも、いかにも言葉少くして、たちゐかろ〳〵しからず。驚き給ひ、騒ぎ給ひ、事に堪へかね給ひしなどいふことは見しことあらず。たとへば、灸治などし給ふにも、「灸小さきと數少きとは無益のことなり。」と仰せられて、大きなる灸をその數少からず、五所も七所も一時にすゑさせて、痛ませ給ふ氣色も見え給はず。

○氣色

身靜かなる時には、常におはします所を淨く掃ひて、壁上に古畫をかけ、花瓶には春秋の花を少しく挿みて、それに對して默坐して日を消し給ひ、また自ら繪かき給ふこともありき。それも色をまうけたる繪などをば好み給はず。

○手づから

身の病み給ふ時より外は、人を召して使ひ給ふといふことなく、何事も皆手づからなし給ひたりき。朝夕の物を召すことも飯は二椀を過ぎず。「手して椀をさゝぐるに、その輕重によりて飯の多き少きは知れぬれば、その餘物は飯の多少によりて多くも少くも食ひて、常に我が腹に滿つる分量を過すべからず。口にかなふものなりとも、一色をのみ多く食ひぬれば、必ずそのために傷めらるゝことあり。何物をも擇ばずして、皆々少しづつ食ふ時は、互に相制するところあるにや、食のために傷めらるゝことは少しと覺ゆるなり。」と仰せられき。

○世の常

世の常には、こなたより參らするものをめして、「何物を參らせよ。」と宣ひしことはあらず。たゞ、「四時の新味をば、その出で來りし初に、何物に限らず參らせよ。」と仰せられて、家人とともに聞し召しけり。酒は僅かも喉に下し給はば、大きに醉ひ給ひしかば、たゞ盃を把りて歡を受け給ふのみなりき。茶をば好みてめしけり。

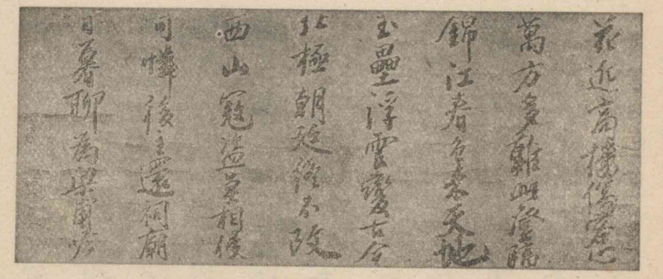
身にめしける物も家におはする時は、洗ひ濯ぎし物をもめし

白石筆蹟

花近高樓傷客心
萬方多難此登臨
錦江春色來天地
玉壘浮雲變古今
北極朝廷終不改
西山寇盜莫相侵
可憐後主還祠廟
日暮聊爲梁甫吟

○堪能

けれど、垢づきぬるをば、いね給ふ時もめすことなく、門を出で給ふに至つては、必ず新しく鮮かなる物をめす。それも身におひ給はぬ品の物用ひられしことはあらず。「むかし人は常に身死しなん後の見苦しからぬやうを心にかけしなり。」など宣ひたりき。「扇子などをも、人多き中に取りも落し遺れもすることあり。これらの物にても、その主の心は推量らるゝことなり。」と仰せられき。



新井白石筆蹟

我が母にておはせし人は、ものよく書き給ひしのみにあらず、歌の道をも傳へ習ひて、代々の集または物語の類など、我が姉妹に讀教へ給ひ、圍碁將棋なども堪能におはして、これらのことを

○致仕す
○髪おろす
○いみじく
折焚く柴の記　新井白石の自敍傳で和漢混淆文の代表的なものである。

も我に教へ給ひたりき。香爐箱の中に琴の爪を袋にして入れおかれしを見しことあれば、これらのことをも好き給ひしにや。我が見まゐらせしよりは、「織縫ふことこそ女の業なれ。」と仰せられて、年毎に美しき筋の布といろ〳〵の文ある絹を、みづからも織り、人にも織らせ給ひ、それを父にもめさせ參らせ、我にも賜はりしが、今も少しは家に殘れり。賤しきものの言葉に、「似たるものの夫婦とはなるなり。」といふことのあるが、もの宣ひ、爲し行ひ給ふことどもの、父にておはせし人にたがふところなくてぞおはしましたりける。父の致仕し給ひし後には、これも髪おろし給ひて、佛の道をいみじく行ひ、六十三にて終り給ひき。

（折焚く柴の記）

一三　末ひろがり

三人　大名（立烏帽子、素襖、袴、小さ刀）　冠者（半袴）　盜人（括り袴、傘）

大名「罷り出でたるは、隱れもない大名。太郎冠者あるか。」冠者「御前に。」大名「念なう早かつた。汝を喚び出すは別なる事でない。明日は何れもを申し入れうと思ふが、何とあらうぞ。」冠者「まことに內々は、御意なうても申し上げうと存ずる處に、一段でござりませう。」大名「よからうな。」冠者「はつ。」大名「さうあれば、引出物には何をか出さうな。」冠者「されば、何が好うござりませうぞ。」大名「やい、思ひつけた。下からは上が計らはれぬものぢや。某は末ひろがりを出さうと思ふが、何とあらうぞ。」冠者「ようござりませう。」大名「汝は大儀ながら、上方へのぼり、急いで求めて參れ。」冠者「畏つてござる。」大名「急げ。」冠者「はつ。さても

○念なう

○引出物

○大儀

さても某が賴うだる者は、立板に水を流すやうに、物を言ひつけられまする。まづ急いで參らう。とかう申すうちに、都さうにござりまする。やれさて失念の致した。末廣屋を存ぜぬが、何と致さうぞ。えい、欲しい物は呼ばはるていと見えてござる。某もこれから呼ばはりませうぞ。末廣買はう、末廣買はう。」すり「罷り出でたるは、洛中に住居する、心も直にない者でござる。何者やら、どんどと申す程に、さわたつて見ませうず。なう〳〵其方は何をわつばとおしやるぞ。」冠者「その事でござる。田舍者でござれば、末廣屋を存ぜぬによつて、かやうに申す事でござる。」すり「なう、其方は末廣といふ物をお見知りやつたか。」冠者「なう、都人とも見えぬ。知つたればこれを買はうといふ。」すり「なう〳〵、あやまりました。某は末廣屋の亭主でおりやるによつて、懇に問うておりやる。」冠者「はて仕合せな事でござる。し

○立板に水を流すやうに

○失念

○洛中

わつばと　聲高に。

問うて

なか〳〵

いかい　大層な。

合うたら

て末廣の出來合ひはござるか。」すり「なか〳〵。ござる。」冠者「急いで見せさつしやれ。」すり「心得てござる。それに待たつしやれ。」冠者「は。」

すり「やれさて、賣らうとは申してござるが、何を賣りませうぞ。思ひつけてござる。これに傘がござる程に、これを持てて賣りませう。なう〳〵田舍人、それにござるか。これ〳〵。」冠者「や。は。これが末廣でござるか。」すり「なか〳〵。」冠者「どれ見せさつしやれ。」すり「これ、どろんじやれ。」冠者「はゝ、まことに廣げさつしやれたれば、はて、いかい末廣でござる。さりながら、賴うだ人が注文のおこされてござる程に、これに合うたらば買ひませう。」すり「さらば讀まつしやれい。」冠者「まづ地紙好くとしてござる。」すり「これ〳〵、地紙好くとは、この紙の事でおりやる。師走狐の如く、こん〳〵といふほど張つてござる。」冠者「骨磨とござる。」

木賊

思うて

合うて

嬉しう

萬疋　昔廿五文を一疋と云つた。

すり「これ〳〵、骨磨とはこの骨の事。信濃木賊をかけて磨いたによつて、すべ〳〵致す。」冠者「要元締めてとござる。」すり「要元締めてとは、かう廣げて、この金でもつて、じつと締めるによつて、此處のことでござろ。」冠者「繪は戲繪としてござる。」すり「ふん、これ〳〵田舍人、これへ寄らつしやれい。えい。」冠者「なう〳〵、其方は、田舍人ぢやと思うて、打擲めさるか。」すり「いや、打擲ではおぢやらぬ。こなたと某と、かうして戲れるをもつて、卽ち戲繪といひまする。」冠者「さても〳〵、注文に合うて嬉しうござる。して價は如何程でござるぞ。」すり「高直におぢやる。」冠者「幾ら程でござるぞ。」すり「萬疋でおりやる。」冠者「これはまた高い事でござる。ちつとねぎりませう。」すり「おう、少しなどはぬいてやりませう。」冠者「百ばかりになりますまいか。」すり「なう其處な人、そのやうな下直な物ではない。ようお買ひやるまいぞ。」

○代物

冠者「申し〳〵、何と聞かつしやれたぞ。萬疋の内をば百ばかりもぬいて下されまいかと云ふ事でござる。」すり「はあ、聞分けました。五百ぬいて進じよ。」冠者「忝うこそござれ。」すり「して代物は、何處で渡さつしやれまする。」冠者「三條の布袋屋で渡しませう。」すり「これで受取りませう。」冠者「忝うござる。さらば、さらば」

すり「なう〳〵。」冠者「何でかござるぞ。」すり「其方は定めし主持でござろ。」冠者「なかなか。」すり「人の主は機嫌の善い事もあり、又惡しい事もある。若し自然とも機嫌の惡しうおぢやろならば、斯うおしやつたが好うおぢやろ。」冠者「さても〳〵忝うこそござれ。」すり「よう

末ひろがり

○合點

おりやつた。

冠者「やれさて、まづ賴うだ者に急いで御目にかけうず。殿樣ござりまするか。」大名「太郎冠者、戻つたか。」冠者「歸りました。」大名「やら大儀や。急いで見せい。」冠者「はつ。」大名「こりや何ぢや。」冠者「末廣でござりまする。」大名「これがや。」冠者「はあ。殿樣のお合點が參らぬこそ道理でござりますれ。かう致しまするとき、きつう廣がりまする。」大名「ふん、まことにこれはいかい末廣ぢやわいやい。しておのれは注文に合はして來たか。」冠者「なかなか、合はせましてござる。それで讀まつしやれませい。」大名「急いで合はせ居ろ。まづ地紙好しと。」冠者「はあ、それこそ念を遣ひましたれ。この紙の事でござろ。師走狐の如く、こん〳〵といふほど張つてござりまする。」大名「して又、骨磨は。」冠者「はつ、この骨の事でござる。信濃木賊をかけて磨いてござるによ

つて、すべ〳〵致しまする。」　大名「要元締めては。」　冠者「かう廣げまして、この金で締めるをもつて、これが要元締めてと云ふところでござる。」　大名「繪は、戲繪は。」　冠者「それにこそ念の遣ひましたれ。それに待たつしやれませい。や、覺えたか。」　大名「や、これは何をしをるぞ。」　冠者「いや申し、この柄でかうして戲れるをもつて、ざれえと申しまする。」　大名「やい其處な奴、しておのれは知らぬが定か。」　冠者「はいや存じませぬ。」　大名「知らずばこれへ寄りをろ。末廣とは扇のこと。これはおのれ古傘を買うてうせをり、いや末廣で候の、戲繪で候の、某が前へは叶ふまい。しさりをろ。やれさて憎い奴かな。」

冠者「まことに賴うだ人の云はるれば、これはさし傘ぢやげな物を。ひよんな事を致した。さりながら、都の者も皆まではぬきませなんだ。機嫌直しを教へてくれた。まづ急いで申して見

買うて
○しさる
ぬく
だます。

ませうず。（はやし）いえい、かさをさすならば、春日山、これも神の誓と、人がかさをさそなら、おれもかささゝうよ。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。いえい、かさをさすならば、春日山、これも神の誓と、人がかさをさすなら、おれもかささゝうよ。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさうよの。」　大名「いかにやいかにや太郎冠者、買物にぬかれて囃物をするとも前代の曲者、身が前へは叶ふまい。」　冠者「げにもさあり。やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさうよの。」　大名「買物にはぬかれたが、まづ此方へこけ入つて、鰻の鮨をば、えいやつと頬張つて、ようか酒を飲めかし。」　冠者「げにもさあり。やよ、げにもさうよの。」　大名「何かの事はいるまい。人がかさをさゝうなら、俺にもかさきせやれ。」（笛）ひやろ〳〵、ほつばい、ひやろ、ひい。

（狂言記）

狂言記
謠曲に伴つて室町時代に發達した一種の滑稽劇、狂言の詞章をあつめたもの。

四方赤良
徳川末期の狂歌師、本名は大田覃、號は南畝、蜀山人、江戸の人、文政六年（一八二三）歿、年七十五。

わらび

宿屋飯盛
江戸の俳人、狂歌師、本名は石川雅望、天保元年（一八三〇）歿、年七十八。

○かは

一四　狂歌

山吹のはながみばかり金入に
　みの一つだになきぞ悲しき　四方赤良

さわらびが握拳をふりあげて
　山の横面はるかぜぞ吹く

ほとゝぎす啼きつる跡に呆れたる
　後徳大寺のありあけのかほ　宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の
　動きいだしてたまるものかは

唐衣橘洲
江戸の狂歌師、本名は小島源之助、享和二年（一八〇二）歿。

鯛屋貞柳
大阪の俳人、榎並氏、享保十九年（一七三四）歿、年八十二。

○果報
○路銀

つむり光
江戸の狂歌師、本名は岸誠之、寛政八年（一七九六）歿、年四十三。

鹿都部眞顔
江戸の狂歌師、本名は北川嘉兵衛、文政十二年（一八二九）歿、年七十七。

菜もなき膳にあはれは知られけり
　しぎやき茄子の秋の夕ぐれ　唐衣橘洲

富士の山夢に見るこそ果報なれ
　路銀もいらず草臥もせず　鯛屋貞柳

ほとゝぎす自由自在に聞く里は
　酒屋へ三里豆腐屋へ二里　つむり光

爭はぬ風の柳の絲にこそ
　堪忍袋縫ふべかりけれ　鹿都部眞顔

栗柯亭木端　大阪一向宗某寺の僧　貞柳の高弟、安永二年（一七七三）歿、年六十四。

世の中は何のへちまと思へども
　ぶらりとしては暮されもせず

栗柯亭木端

大屋裏住　江戸の狂歌師、本名は久須美　通稱白子屋係左衞門、文化七年（一八一〇）歿、年七十七。

鶯も蛙もおなじ歌なかま
　經よむもありたゞ鳴くもあり

大屋裏住

朱樂菅江　江戸の狂歌師、本名は山崎景貫　寛政十二年（一七八〇）歿、年六十一。

天の原月すむ秋をまふたつに
　ふりわけみればちやうど仲麿

朱樂菅江

平秩東作　江戸の儒者、本名は立松愼之、號は東蒙、寛政元年（一七八九）歿、年六十四。

ゆく春を思ひきれとや舞臺から
　飛んで見せたる清水のはな

平秩東作

下田次郎　教育學者、文學博士、東京女子高等師範學校名譽教授、東京の人、昭和十三年歿、年六十七。

○附け味

○見かけ倒し

○實質的

一五　味はひある生活

下田次郎

物には味といふものがある。砂糖は初から甘いし、鰯は嚙んでゐるうちに味が出て來る。どちらもその物がもつた味であるが、その外附け味といふのもある。きなこ餅や田樂豆腐などはそれである。本人に取りえのある人は砂糖か鰯の如く、著物や紅白粉で外から味をつけた人は、きなこ餅や田樂豆腐の類であらう。

生活でもやはりそのやうなもので、本當に味はひのある生活と、一向見かけ倒しの實質的には何らの味はひのない生活がある。或高原に避暑に行つてゐる婦人が、夫の車の後押をして行く妻を見て羨んだといふことを聞いたが、年中することもなく、美服を著て人形のやうにしてゐたのでは、さぞつまらないこと

○空虛
○披露
○形式的
○傑作

であらう。頭の空虛な者は交換すべき思想がないから、カルタを交換するといつた人があるが、カルタやトランプを交換する外することのない人間は氣の毒なものである。

中には交際が生活だと思つて、しきりに交際してゐる人がある。かゝる人は、結婚の披露に呼ばれたり、葬式に行つたり、出產の喜に行つたりすることが、生活の重大事件だと思つてゐる。これは多くは形式的表面の生活で、自分の生活の實質に關係あるものではない。かゝる人たちの生活から儀式を除いたらば、何が殘るか。繪の貴ばれるのは、その繪が傑作であるからであつて、額緣が立派だからではない。世には中味の繪を忘れて、額緣が立派だと思つてゐる人もある。

富み足る生活は貧乏と缺乏の生活よりは好ましいものであらう。しかしそれも人によるので何をするといふ目的もなく、

ショーペンハウエル　十九世紀中葉のドイツの哲學者。

○連發
○交涉
○慇懃

貝原益軒　德川時代の儒者、福岡の人、正德四年（一七一四）歿、年八十五。
平田篤胤　德川時代の國學者、本居宣長の弟子、秋田の人、天保十四年（一八四三）歿、年六十八。

學問能力もなくて、徒に富み足つた生活は退屈である。ショーペンハウエルは「退屈ほど堪へられないものはない。そしてその眞の源は、心の空虛にある。」といつた。かゝる退屈の生涯こそは、眞に悲慘なものである。

かゝる生活は欠伸の連發か、儀式社交の出入かである。その結果は顎骨の發達か、世辭の巧妙であつて、眞の生活と何らの交涉なきものである。「若き時學ばぬ悔をかみしめて奧齒なきまで身は老いにけり」、はまだいゝが、若い時分からこれでは、何のための生活かわからない。內容の空虛な人の交際ほど慇懃を極めたものはない。それより外に何物もないからである。「つれづれといとまあるまゝに、訪ひ來りて長居するはわびし。」と貝原益軒は困り、「世俗無用の長談御容赦可被下候。」と平田篤胤は斷つた。しかしそれより外、暮しのつかぬ人があるのは氣

○學殖
○稀有
汝みづからを知れ　ギリシヤの古い諺。
○物質的
オスカー＝ワイルド　十九世紀半のイギリスの文學者。
○共鳴する

の毒である。その反對に、いくら聽いてゐても飽かない、きり上げられるのが惜しいやうな話をする人もある。それは學殖や趣味のある人の話である。そんな人になりたいものである。

生きるといふことは、世界における最も稀有なことである。古人は『汝みづからを知れ。』といつたが、それより大切なのは『汝みづからであれ。』といふことである。しかし多くの人間は、たゞそこにゐるといふだけである。人が物質的に何をもつてゐるかは大した問題ではない。大切なのは、その人が何であるかである。「人は己の有する特長を發揮し、自己として最も價値ある生活を營むべきである。」とのオスカー＝ワイルドの意見には、少しく生活といふことに就いて考へる者は、共鳴せざるを得ないであらう。

外からつけたもので活きてゐる人は、それが何であらうとも、

○貴金屬
○美裝する
○靈性
○安逸
ミレー　十九世紀中葉のフランスの畫家。
○凡人

大した人間ではない。寶石の指環を花火の筒のやうに指にはめた婦人は貴婦人といふよりは貴金屬の方だ。婦人はダンスと算筯が好きだといふが、著物と踊が生活の內容なら、美裝した猿だつてそのくらゐの生活はする。貧乏で苦しい生活にも生活の味はひがある。否、人間の靈性が光を放ち、その最善が發揮されるのは、富足と安逸の生活よりも、むしろ貧乏と苦痛の生活においてである。畫家ミレーはいかに貧乏を材料として、その生活と繪畫とを作り上げたか。傑作は必ずしも作物にのみあるのではない。生活そのものにも傑作はあるのである。ミレーに繪畫がなくても、その作品以上に、その生活が傑作であつたのである。凡人として、生活の傑作は望めないとしても、生きがひのある、味はひのある生活はしたいものである。それはたゞ交際や、儀式や、買物や、ダンスや、著物の見せあひの生活ではなく

○血のにじむ生活
○緊張
○見え
○洗練
○不撓

て、奮鬪の生活であり、努力の生活であり、汗の生活であり、血のにじむ生活であらねばならぬ。緊張もなく感激もない、氣の拔けたサイダーのやうな生活水にふやけたパンのやうな生活に、何の味はひがあらうぞ。

「立てる農夫は坐せる紳士に優る。」といふ語があるが、同じことが婦人に就いてもいへるであらう。遊んで暮してゐるのが見えの時代は過去つた。何か意義のあることをして、生活の內容を充實しなくてはならぬ。商店の飾窓の人形の樣な生活は、いかに美しくてもだめである。あらゆる附加物を取去つて、正味の自分が何であるかを考へてみよう。豐富な學問、優秀な技能、貴重な經驗、洗煉された趣味、微妙な感情、暖い同情、燃える意氣、不撓の努力、それ等が縱絲、橫絲となつて織りなされた生活こそは、眞に錦繡の生活であつて、最も生きがひあるものに違ない。

永井潛　生理學者、醫學博士、東京帝國大學名譽教授、廣島縣の人、明治九年生

時利あらず　雖逝かず

楚の項羽が垓下に敗れた時歌つた。「力山ヲ拔キ、氣世ヲ蓋フ　時利アラズ、騅逝カズ、騅逝カザル奈何ニス可キ、虞ヤ虞ヤ若ヲ奈何ニセン。」

○乾坤一擲
關ヶ原　岐阜縣不破郡にある地名

石田三成　秀吉恩顧の武將。近江の人。關ヶ原の一戰に敗れ、慶長五年(1600)三條磧に斬られた、年三十八。

○所望する
○嘲る

一六　鈍と根

永井潛

時利あらず雖逝かず、乾坤一擲の關ヶ原の戰に敗れて、草深い近江の山中に疫を病んで捉へられた石田三成が、京都へ護送される時の事であつた。途中で咽喉の渴きを覺えた三成は、湯を所望した。所がその邊に湯がなかつたので、警固の者が、

「あいにくこの邊には湯がありませぬ。幸ひ、此所に柿がありますから、これをめしあがつては如何で御座いますか。」

と尋ねると、三成は、

「いや〳〵、志は有難いが、それは胃腸の病には毒だといふから食べまい。」

と斷つた。間もなく首を刎ねられる身で毒忌もをかしいと、傍の者が嘲つたのを聞いて、三成は微笑しながら、

○大義
○決然
○貪る
○面目躍如
○爲すある人間

「お前たちがさう思ふのも無理ではないが、大義を志す者にあつては、假令間もなく首を落されるにしても、いよ〳〵の時までは命を大切にし、どうかして本意を達しようと思ふのが道である。」

と言つたが、家康がこれを聞いて憐んで、緞子の夜著を贈つて來た時、三成は決然としてこれを斥けて言つた、「敵人の恩惠に浴してまでも、我が生を貪る心はもたぬ。」と。三成の三成たる面目が躍如としてゐるではないか。誠に爲すある人間の心掛は常人と異なるもののある事を深く感ぜしめるのである。

昔から、立身出世になくてはならない條件として、運・鈍・根の三つを數へて來たが、生活に行詰り、餘裕の少くなつた近頃では、それに金を加へんとする者もあるやうである。

運とは人力で如何ともし難い、少くとも如何ともし難く見える

○向背
○周到
○機敏
○營利主義
○立身出世
○光彩
○奴隷
○軟化する

る自然の命數を引きくるめたもので、神ならぬ人間では、出世の準備にしたくとも、どうにもならないものかも知れぬ。さりながら、「洞物情之向背而握其機、察陰陽之消長乘其運。」と昔の人も教へてゐるやうに、周到であり機敏である事によつてこの大切な運をつかむ事は、或程度まで不可能の事ではなからう。

次には何事も營利主義の現代の社會生活では、金が非常な偉力をもつて立身出世の助になる事は言ふまでもないが、しかし、多くの場合にあつては、金をまうける事それ自身が、立身出世の重要な一方面をなしてゐるのであるから、初から金力をもつて競爭場裡に臨んだのでは、たとひその優者となつた所で、金の上に金の鍍金をするやうなもので、それでは一向に精華なく、光彩なく、痛快味がない。しかも、金をもつてゐるが爲に、或は金の奴隷となり、或は金の爲に軟化して、却つて立身出世を妨げる場合

○首肯する
○畢竟するに
○旺盛
○得意恬然
○失意泰然
○自若
○焦燥
○進退

も少くはないのであるのを見てもわかるし、また心ある人士が、兒孫のために美田を買はなかつた理由も首肯されるのである。

して見ると、立身出世の大切な準備は、所詮は、鈍と根との二つに歸著すると言ふべきである。

そして、鈍と根とは畢竟するに體力の問題に外ならぬ。體力旺盛で心身が常に健かであれば、心廣く體ゆたかであつて、物事に動ずる事がない。いはゆる得意恬然、失意泰然で、得る事があつても調子に乘らず、失ふ事があつても敢へていぢけず、自若として終始正しきに居り、正しきに處する事が出來る。これ卽ち鈍の成功に大切な所以である。

これに反して、體力は萎靡し身體が虛弱であると、精神もおのづから萎靡し、心身が鬱屈すると必ず神經過敏となり、事毎に焦燥憂苦して進退當に節度を失ひ、或はひたすら感情に馳せて輕

○輕舉
○妄動
○必然
○生存競爭の渦中に喘ぐ
○明々白々
○寄與する
○裨益する

舉・妄動し、或は猜疑・嫉妬して世と相容れず、必然失敗の谷底に陷るのである。殊にこの關係は、劇甚な生存競爭の渦中に喘ぎつつある近代人に取つて、最も大切な意義を持つてゐる。更にまた根が完全な健康によつて始めて保持される事は明々白々であつて、改めて言ふまでもないのである。

人が世に立ち志を遂げる上にかくばかり大切な關係をもつ所の體力は、その人が既に或程度の成功を收め、活動の地位を得て、その材に應じその分に隨つて、世道の進運に寄與し、人生に裨益する所あらんとする場合、一層大切になつてくる。エマーソンが言つたやうに、「人間第一の財產」は何と言つても健康である。若し健康でなかつたならば、人世は唯暗黑あるのみである。一切の名譽も財寶も、權力も、何等の幸福をかち得ないのである。

（人及び人の力）

小野賢一郎　日本放送協會文藝部長、俳人、號は燕子、福岡縣の人、明治二十一年生。

○本能的
○第一義
○ニュース News.
○必死
○世相

一七　新聞

小野賢一郎

一

現代の新聞紙には、世の中がありのまゝに映る。きのふの世の中、けふの世の中、あすの世の中、それが美しければ美しく、醜ければ新聞紙もまた醜いのである。

我々は何人も自分の世界が知りたい。自分自身の姿が知りたい。この本能的の要求が、有史以前から人類に鏡といふものを與へたが、新聞紙もまた全く同じ意味をもつて發達し、隨つてその使命の第一義もこゝにある。

即ち、世の姿のうごき、社會相のうごきを、ニュースとして正しく、速く、親切に讀者に報ぜんとして、新聞社が必死の苦心をすることは、世相の鏡としての使命を完全に果さんとするに外ならぬ。讀者は朝の新聞紙面、夕の新聞紙面、これ悉く自分自身とその周圍との姿であることを忘れてはいけない。

○司る
○直面する

二

新聞社は、編輯と印刷と營業とに大別される。編輯局は記事をつくり、印刷局はこれを印刷し、營業局はいかにしてこれを多くの讀者に與へんかといふ事務を司る。この三局は、新聞社の經營に於いていづれを一つ缺く事もできないが、使命の根源を果すものであり、新聞社の眼であり耳であるのは、いふまでもなく編輯局即ち「新聞記者」と稱せられるものであつて、これがまた內勤記者と外勤記者とに別かれる。

外勤記者は、常に世のうごきに直面してゐる。解り易くいへば有形無形の「新聞の種になる出來事」に相對してゐるのである。新聞の種、即ちニュースは、記者に向かつて、常に必ずしも呼

○第六感
○所謂
○完備
○按配
○一瀉千里

びかけては來ない。うつかりしてゐては飛んでもないことになる。こゝに外勤記者の苦心があり、第六感の働を必要とする。一口に外勤記者と稱しても、腕から手、手から指とあるやうに、特派員、特置員、通信員と、世界の到るところに配置され、所謂通信網が完備される。

三

内勤記者は、近來大抵の新聞社では、これを統一して「整理部」と呼び、外勤記者の持つて來た材料を、適當に按配・整理・編輯して、印刷局に廻し、印刷局は直ちにこれを全く一種の敏速なる工作として新聞紙に形づくり、營業局内の販賣配送をする機關へ渡す。こゝから直接讀者の手に渡るのであるが、試に夕刊の締切を午後二時半として、この瞬間一瀉千里に書流された原稿が整理部員に渡されたとする。それに適當な見出しをつけ、印刷局へ渡す整理にあたる内勤記者はテーブルの前へ坐つてばかりはゐられない。こんな時には、編輯局から印刷局迄、赤インキの筆を右手に、原稿を左手に讀みながら、見出しをつけながら走り込んで行くのである。

○組まれ
○邊鄙
○迅速

それから僅か二三十分の後には、この原稿が活字に組まれ、鉛版となり、紙型となり、輪轉機に移つて立派に刷上げられた夕刊の一部を手にすることができる。しかもそれが印刷局から營業局の手に移されて、市内到るところに「夕刊、々々。」の聲を聞くのは三時卅分前後、外勤記者の原稿が出されて僅かに一時間の後である。邊鄙な東京の郊外などの住宅へ配達されてさへ五時にはなるまい。

四

地方に起きた大事件を、その土地竝びに附近の人々へ特に迅

速に報道する爲に、刷上げられた新聞紙を、その地方の必要部數だけ飛行機に積んで、その土地へ運ぶといふやうな營業局各部の働も目まぐるしいものである。

就中、遞送課と稱する配達方面の部門擔當者は、編輯局の締切、印刷局の刷上り等と密接な關係があつて、時に非常な苦心をするのである。

朝刊紙の締切は、大抵午前零時半乃至一時半、それが大きな事件が突發し、或は豫想される場合、午前三時となり四時となり、昭和三年御大典の際などは五時となつた實例がある。勿論、記者も工場も、その他給仕迄も寢ずに仕事をするのであるが、この五時に締切つた新聞を、遲くも七時か八時迄には、東京市内はもとより、近郊郡部にも配達せねばならぬ。その苦心といふものはなか〳〵語り盡くせるものではない。

○目まぐるしい
○就中
○近郊

五

新聞社には、夜もなければ晝もない。たゞ締切時間によつて働き、締切時間によつて眠る。隨つて、いかなる深夜に新聞社を訪問しても、決してすべての人が寢てゐたり、活動が休止されたりしてゐることはない。記者が原稿を書いてゐなければ、輪轉機が廻つてゐる。電話が使はれてゐなければ、社の中に特設されてゐる電信局の機械がかち〳〵と鳴つてゐる。

その證據に、新聞社の電話交換手は、二名ぐらゐは徹夜してその職についてゐる。試に午前三時なり四時なりに呼出してみても、必ず彼女たちは元氣にそれに答へてくれるであらう。記者を乘せ、原稿を輸送し、寫眞を運び、また特種なる新聞紙の輸送をする優秀な飛行士も、社から直通の電話機をベッドの前において、その飛行機と共に格納庫に常にその出動を豫想してゐる。

○特設する
○徹夜する
○直通
○出動

電送寫眞の技術者も社に宿直してゐれば、スカイサインの技術者も泊つてゐる。鳩の訓練者も早朝の用意の爲に泊つてゐる。少し設備の完全な社になると、深夜から曉にかけて、朝の新聞配達の爲に活動する本社の遞送課員、工場技術者の外に、二百餘名の宿直員がゐるのである。

電送寫眞裝置

六

電送寫眞とスカイサインは、昭和三年秋の御大典を期し、初めて日本で實際に使用された。昭和六年末現在では、ともに大阪毎日新聞・東京日日新聞・東京大阪兩朝日新

聞のみであつて、電送寫眞は、外に通信社が一社これを持つてゐる。言葉を電報や電話で送ると同じく、寫眞を電波の作用によつて送るもので、例へば東京から大阪へ一枚の寫眞を送るとして、飛行機によるとしても、二時間以上を要し、特別急行列車でも八時間を必要とするが、電送寫眞は、カビネ版一枚を、僅かに三分四十五秒にして、完全にその任務を果すのである。昭和四年春、時の田中首相が東京日日新聞社を訪問してこの電送機を見學した際、その場で首相の見學の寫眞をうつして直ちに大阪毎日新聞社に電送し、これをまた大阪から逆に首相の面前に電送して驚歎させたことがある。而もこの機械は日本製のもので、外國製の電送寫眞機を壓倒して、いゝ成績を擧げたのであつた。

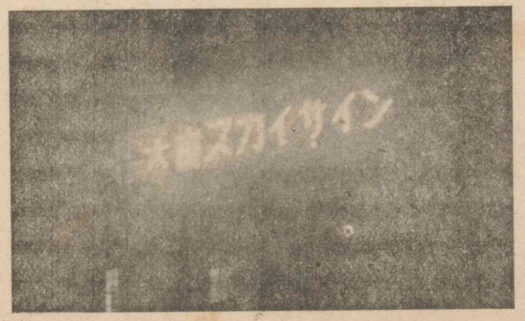
○驚歎
○壓倒する

七

スカイサインは、電光文字による一種の空中號外である。數

萬個の電球が平に放寫版へ竝び、それへ字形の電氣を感ぜしめて、鮮かな文字を輝かせる裝置である。光の文字は十數字づつ放寫版の上を流れてゆくが、人々は歩みながらにこれを仰いで、その電光によつてニュースを知ることを得るのである。通常の號外は發行までに少くも二十分や三十分の時間を要する。しかもこのスカイサインは今直ちに事件の瞬間を讀者に知らしめ得るものである。

鳩は、今では新聞社の有力なる一員として、動かし得ざる地位を占めてゐる。電信電話のない處、或はあるとしてもその使用に困難な場合には、この傳書鳩が最も偉大なる勳功をたててくれる。薄い紙へ



スカイサイン

（勳功

書いた原稿は、アルミニュームの筒へ入れて足へ、寫眞は背中に結びつけて、それを携へて行つてゐる特派記者、寫眞班の手から放たれる。鳩は矢の樣に新聞社へ飛んで戻る。特に優秀な鳩は、自己の重大な任務を知つてゐるとさへ思はれるやうな、涙ぐましい物語を殘す事が往々ある。

傳書鳩

東京を中心に、西は大阪、東は青森ぐらゐまでを使用の有效距離としてあるが、普通一里を四分、仙臺東京間汽車で十時間を要するところを四時間で飛んだ實例がある。途中で雨になることと、大風と日が暮れることさへなくば、まづ安全迅速な通信機關として、絶對に信用できる程度に訓練されてゐる。大きな社には、四百

（往々

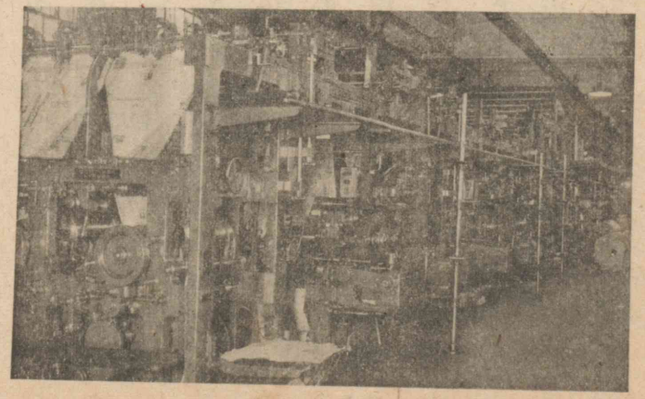
（絶對に

乃至五百羽ぐらゐづつ飼養されてゐる。

昭和二年八月、八丈島から天皇陛下小笠原島行幸の寫眞を背にして東京へ飛び、僅か五時間で天晴任務を果した鳩があつた。

八

新聞の輪轉機は、明治廿五年頃始めて日本へ來た時、一時間約二萬枚を印刷し得るといつて非常に驚いたものである。然るに今日では、一時間十五萬枚を刷る世界隨一の機械が、しかも日本で使用されてゐる。米國第一流のニューヨーク＝タイムスは、十萬枚機を持つて世界



輪轉機

○隨一

一と誇つたが、日本では、わざ〳〵米國へ出かけて、アール＝ホー會社によつて、十二萬枚機を造り、やがて十五萬枚機を造り、同社は「電光のやうな快速力をもつ日本の印刷機」と名づけて發表し、世界の新聞社をして心膽を寒からしめた。即ち一分間に二千五百枚の新聞が輪轉機を離れ、自動移送裝置で發送場へゆく。ここで手早く荷作りされ、更に遞送場に流れてゐる水平の自動移動帶の上へ乘ると、これが自然に運搬自動車に移つて、東京市内の配達分擔所に走り、或は地方行のため各停車場へ走る。大新聞社には、三十臺以上の專用運搬自動車があり、配達分擔所も東京市内だけで百五十箇所ぐらゐはあるのである。

盲人の爲の點字新聞・號外・特報掲示・ニュース映畫・社會奉仕事業・各地方版の發行等、世相の鏡としての新聞の眞摯な忙しさは、實に言語に絶するものがある。

○眞摯

○言語に絶する

徳冨蘇峰　史學者、貴族院議員、帝國學士院會員、帝國藝術院會員、名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年生。

松陰　吉田寅次郎、幕末の先覺者、長門國萩藩士、安政六年（一八五九）刑死、年三十。

○天成　○綱常

下田　靜岡縣加茂郡下田町。

三島　靜岡縣田方郡三島町。

○鼓吹

一八　松下村塾

徳冨蘇峰

松陰は天成の鼓吹者なり、感激者なり。踏海の策敗れて下田の獄に繫がるゝや、獄吏に說くに、自國を尊び、外國を卑しみ、綱常を重んじ、彝倫を敍づべきを以てし、獄吏の眼に涙あらしめたり。下田より檻輿江戸に赴き、途三島を經るや、警護の賤民に向かひて大義を說き、彼等をして憤勵の氣、色に見れしめたり。其の獄にあるや、其の感化は同囚者に及び、獄吏に及び、遂に司獄者までも彼が門人となるに至れり。彼の在る所、四圍彼の如き人を生ず。是れ何によりて然るか。薔薇の在る所、土も亦香しといふに非ずや。而して、彼が最も其の鼓吹者たり感激者たる特質を現したるは、松下村塾に於いて之を見る。

松下村塾は幕府顚覆の卵を孵化したる保育場の一なり。維

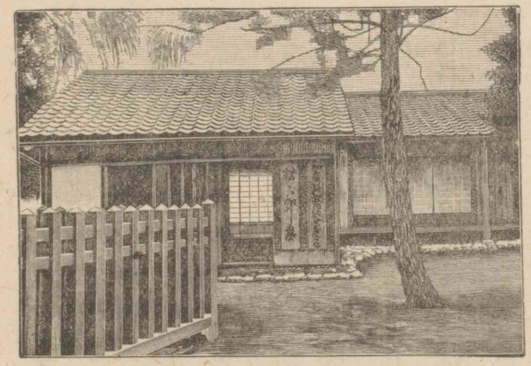
赤間關　下關のこと、馬關ともいふ。

○流風遺韻　○欽仰歎美

伊藤博文　明治の代表的政治家、公爵、我が國最初の內閣總理大臣、山口縣の人、明治四十二年薨、年六十九。

○蟄居

新の天火を燃したる聖壇の一なり。笑ふ勿れ、其の火、燐よりも微かに、其の卵、豆よりも小なりしと。赤間關の砲臺は粉にすべし、奇兵隊の名は滅すべし、然れども松下村塾に至りては、獨り當時に於いて結果の偉大なるものありしのみならず、流風遺韻今に及んで猶人をして欽仰歎美の情禁ずる能はざらしむるものあり。彼が門下の一人なる伊藤博文は言はずや、「如今廟廊棟梁、器多、是、松門受教人。」と。



松下村塾

彼は安政二年十二月、野山の獄より出でて家に蟄居せしめられたり。而して安政三年七月に至りて、蟄居中家學を授くるの許を得たり。松下村塾の名は其の內

○襲用す
○開山
○白面の書生
○匹敵する
○造化兒

叔玉木、外叔久保等が相繼いで用ひたる所にして、松陰これを襲用したりと雖も、吾人が所謂松下村塾に至りては、松陰を推して其の開山とせざるべからず。松陰が松下村塾に直接の關係を有したるは、安政三年七月より安政五年十二月までにして、其の歳月は僅かに二箇年半に過ぎず。しかも此の二箇年半の歳月が、其の後の日本歴史に於ける千波萬濤の激起點となりたるなり。

彼は學未だ深からず、識未だ高からず、齡未だ熟せず、經驗未だ多からず、要するに是れ白面の一中書生のみ。而して彼がよく其の力よりも大なる感化を及し、彼が人物と匹敵する、否、或點に於いては寧ろ彼よりも優れたる弟子を出し得たるは何ぞ。「感在知己」の一句、これを説明して餘りあるべし。

彼は造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈なり。一たび物に

○輕舉妄動
○必然
○生存競爭の渦中に喘ぐ
○明々白々
○寄與する
○裨益する

舉妄動し、或は猜疑嫉妬して世と相容れず、必然失敗の谷底に陷るのである。殊にこの關係は、劇甚な生存競爭の渦中に喘ぎつつある近代人に取つて、最も大切な意義を持つてゐる。更にまた根が完全な健康によつて始めて保持される事は明々白々であつて、改めて言ふまでもないのである。

人が世に立ち志を遂げる上にかくばかり大切な關係をもつ所の體力は、その人が既に或程度の成功を收め、活動の地位を得て、その材に應じその分に隨つて、世道の進運に寄與し、人生に裨益する所あらんとする場合、一層大切になつてくる。エマーソンが言つたやうに、「人間第一の財産」は何と言つても健康である。若し健康でなかつたならば、人世は唯暗黑あるのみである。一切の名譽も財寶も、權力も、何等の幸福をかち得ないのである。

（人及び人の力）

小野賢一郎　日本放送協會文藝部長、俳人、號は燕子、福岡縣の人、明治二十一年生。

○本能的
○第一義
○ニュース News.
○必死
○世相

一七　新聞

小野賢一郎

一

現代の新聞紙には、世の中がありのまゝに映る。きのふの世の中、けふの世の中、あすの世の中、それが美しければ美しく、醜ければ新聞紙もまた醜いのである。

我々は何人も自分の世界が知りたい。自分自身の姿が知りたい。この本能的の要求が、有史以前から人類に鏡といふものを與へたが、新聞紙もまた全く同じ意味をもつて發達し、隨つてその使命の第一義もこゝにある。

即ち、世の姿のうごき、社會相のうごきを、ニュースとして正しく、速く、親切に讀者に報ぜんとして、新聞社が必死の苦心をすることは、世相の鏡としての使命を完全に果さんとするに外ならぬ。讀者は朝の新聞紙面、夕の新聞紙面、これ悉く自分自身とその周圍との姿であることを忘れてはいけない。

○司る
○直面する

二

新聞社は、編輯と印刷と營業とに大別される。編輯局は記事をつくり、印刷局はこれを印刷し、營業局はいかにしてこれを多くの讀者に與へんかといふ事務を司る。この三局は、新聞社の經營に於いていづれを一つ缺く事もできないが、使命の根源を果すものであり、新聞社の眼であり耳であるのは、いふまでもなく編輯局即ち「新聞記者」と稱せられるものであつて、これがまた內勤記者と外勤記者とに別かれる。

外勤記者は、常に世のうごきに直面してゐる。解り易くいへば有形無形の「新聞の種になる出來事」に相對してゐるのである。新聞の種、即ちニュースは、記者に向かつて、常に必ずしも呼

○第六感
○所謂
○完備
○按配
○一瀉千里

びかけては來ない。うつかりしてゐては飛んでもないことになる。こゝに外勤記者の苦心があり、第六感の働を必要とする。一口に外勤記者と稱しても、腕から手、手から指とあるやうに、特派員、特置員、通信員と、世界の到るところに配置され、所謂通信網が完備される。

三

内勤記者は、近來大抵の新聞社では、これを統一して「整理部」と呼び、外勤記者の持つて來た材料を、適當に按配・整理・編輯して、印刷局に廻し、印刷局は直ちにこれを全く一種の敏速なる工作として新聞紙に形づくり、營業局内の販賣配送をする機關へ渡す。こゝから直接讀者の手に渡るのであるが、試に夕刊の締切を午後二時半として、この瞬間一瀉千里に書流された原稿が整理部員に渡されたとする。それに適當な見出しをつけ、印刷局へ渡す整理にあたる内勤記者はテーブルの前へ坐つてばかりはゐられない。こんな時には、編輯局から印刷局迄、赤インキの筆を右手に、原稿を左手に讀みながら、見出しをつけながら走り込んで行くのである。

○組まれ
○邊鄙
○迅速

それから僅か二三十分の後には、この原稿が活字に組まれ、鉛版となり、紙型となり、輪轉機に移つて立派に刷上げられた夕刊の一部を手にすることができる。しかもそれが印刷局から營業局の手に移されて、市内到るところに「夕刊、々々。」の聲を聞くのは三時卅分前後、外勤記者の原稿が出されて僅かに一時間の後である。邊鄙な東京の郊外などの住宅へ配達されてさへ五時にはなるまい。

四

地方に起きた大事件を、その土地竝びに附近の人々へ特に迅

速に報道する爲に、刷上げられた新聞紙を、その地方の必要部數だけ飛行機に積んで、その土地へ運ぶといふやうな營業局各部の働も目まぐるしいものである。

○目まぐるしい

就中、遞送課と稱する配達方面の部門擔當者は、編輯局の締切、印刷局の刷上り等と密接な關係があつて、時に非常な苦心をするのである。

○就中

朝刊紙の締切は、大抵午前零時半乃至一時半、それが大きな事件が突發し、或は豫想される場合、午前三時となり四時となり、昭和三年御大典の際などは五時となつた實例がある。勿論、記者も工場も、その他給仕迄も寢ずに仕事をするのであるが、この五時に締切つた新聞を、遲くも七時か八時迄には、東京市内はもとより、近郊郡部にも配達せねばならぬ。その苦心といふものはなか〳〵語り盡くせるものではない。

○近郊

五

新聞社には、夜もなければ晝もない。たゞ締切時間によつて働き、締切時間によつて眠る。隨つて、いかなる深夜に新聞社を訪問しても、決してすべての人が寢てゐたり、活動が休止されたりしてゐることはない。記者が原稿を書いてゐなければ、輪轉機が廻つてゐる。電話が使はれてゐなければ、社の中に特設されてゐる電信局の機械がかち〳〵と鳴つてゐる。

○特設する

○徹夜する

その證據に、新聞社の電話交換手は、二名ぐらゐは徹夜してその職についてゐる。試に午前三時なり四時なりに呼出してみても、必ず彼女たちは元氣にそれに答へてくれるであらう。記者を乘せ、原稿を輸送し、寫眞を運び、また特種なる新聞紙の輸送をする優秀な飛行士も、社から直通の電話機をベッドの前において、その飛行機と共に格納庫に常にその出動を豫想してゐる。

○直通

○出動

電送寫眞の技術者も社に宿直してゐれば、スカイサインの技術者も泊つてゐる。鳩の訓練者も早朝の用意の爲に泊つてゐる。少し設備の完全な社になると、深夜から曉にかけて、朝の新聞配達の爲に活動する本社の遞送課員、工場技術者の外に、二百餘名の宿直員がゐるのである。

電送寫眞裝置

六

電送寫眞とスカイサインは、昭和三年秋の御大典を期し、初めて日本で實際に使用された。昭和六年末現在では、ともに大阪毎日新聞・東京日日新聞・東京大阪兩朝日新

聞のみであつて、電送寫眞は、外に通信社が一社これを持つてゐる。言葉を電報や電話で送ると同じく、寫眞を電波の作用によつて送るもので、例へば東京から大阪へ一枚の寫眞を送るとして、飛行機によるとしても、二時間以上を要し、特別急行列車でも八時間を必要とするが、電送寫眞は、カビネ版一枚を、僅かに三分四十五秒にして、完全にその任務を果すのである。昭和四年春、時の田中首相が東京日日新聞社を訪問してこの電送機を見學した際、その場で首相の見學の寫眞をうつして直ちに大阪毎日新聞社に電送し、これをまた大阪から逆に首相の面前に電送して驚歎させたことがある。而もこの機械は日本製のもので、外國製の電送寫眞機を壓倒して、いゝ成績を擧げたのであつた。

七

スカイサインは、電光文字による一種の空中號外である。數

○驚歎
○壓倒する

萬個の電球が平に放寫版へ竝び、それへ字形の電氣を感ぜしめて、鮮かな文字を輝かせる裝置である。光の文字は十數字づつ放寫版の上を流れてゆくが、人々は歩みながらにこれを仰いで、その電光によつてニュースを知ることを得るのである。通常の號外は發行までに少くも二十分や三十分の時間を要する。しかもこのスカイサインは今直ちに事件の瞬間を讀者に知らしめ得るものである。

鳩は、今では新聞社の有力なる一員として、動かし得ざる地位を占めてゐる。電信電話のない處、或はあるとしてもその使用に困難な場合には、この傳書鳩が最も偉大なる勳功をたててくれる。薄い紙へ

スカイサイン

○勳功

書いた原稿は、アルミニュームの筒へ入れて足へ、寫眞は背中に結びつけて、それを携へて行つてゐる特派記者、寫眞班の手から放たれる。鳩は矢の樣に新聞社へ飛んで戻る。特に優秀な鳩は、自己の重大な任務を知つてゐるとさへ思はれるやうな、涙ぐましい物語を殘す事が往々ある。

東京を中心に、西は大阪、東は青森ぐらゐまでを使用の有效距離としてあるが、普通一里を四分、仙臺東京間汽車で十時間を要するところを四時間で飛んだ實例がある。途中で雨になることと、大風と日が暮れることさへなくば、まづ安全迅速な通信機關として、絶對に信用できる程度に訓練されてゐる。大きな社には、四百

傳書鳩

○往々

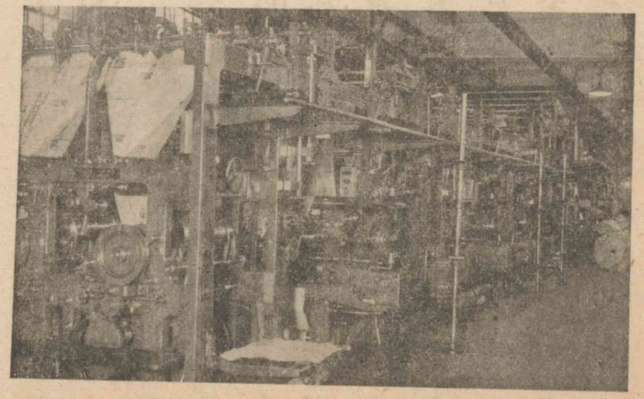
○絶對に

乃至五百羽ぐらゐづつ飼養されてゐる。

昭和二年八月、八丈島から天皇陛下小笠原島行幸の寫眞を背にして東京へ飛び、僅か五時間で天晴任務を果した鳩があつた。

八

新聞の輪轉機は、明治廿五年頃始めて日本へ來た時、一時間約二萬枚を印刷し得るといつて非常に驚いたものである。然るに今日では、一時間十五萬枚を刷る世界隨一の機械が、しかも日本で使用されてゐる。米國第一流のニューヨーク＝タイムスは、十萬枚機を持つて世界



輪轉機

○隨一

一と誇つたが、日本では、わざ〳〵米國へ出かけて、アール＝ホー會社によつて、十二萬枚機を造り、やがて十五萬枚機を造り、同社は「電光のやうな快速力をもつ日本の印刷機」と名づけて發表し、世界の新聞社をして心膽を寒からしめた。即ち一分間に二千五百枚の新聞が輪轉機を離れ、自動移送裝置で發送場へゆく。ここで手早く荷作りされ、更に遞送場に流れてゐる水平の自動移動帶の上へ乘ると、これが自然に運搬自動車に移つて、東京市内の配達分擔所に走り、或は地方行のため各停車場へ走る。大新聞社には、三十臺以上の專用運搬自動車があり、配達分擔所も東京市内だけで百五十箇所ぐらゐはあるのである。

盲人の爲の點字新聞・號外・特報掲示・ニュース映畫・社會奉仕事業・各地方版の發行等、世相の鏡としての新聞の眞摯な忙しさは、實に言語に絶するものがある。

○眞摯

○言語に絶する

徳冨蘇峰　史學者、貴族院議員、帝國學士院會員、帝國藝術院會員、名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年生。

松陰　吉田寅次郎、幕末の先覺者、長門國萩藩士、安政六年（一八五九）刑死、年三十。

○天成　○綱常

下田　靜岡縣加茂郡下田町。

三島　靜岡縣田方郡三島町。

○鼓吹

一八　松下村塾

徳冨蘇峰

松陰は天成の鼓吹者なり、感激者なり。踏海の策敗れて下田の獄に繫がるゝや、獄吏に說くに、自國を尊び、外國を卑しみ、綱常を重んじ、彝倫を敍づべきを以てし、獄吏の眼に涙あらしめたり。下田より檻輿江戸に赴き、途三島を經るや、警護の賤民に向かひて大義を說き、彼等をして憤勵の氣、色に見れしめたり。其の獄にあるや、其の感化は同囚者に及び、獄吏に及び、遂に司獄者までも彼が門人となるに至れり。彼の在る所、四圍彼の如き人を生ず。是れ何によりて然るか。薔薇の在る所、土も亦香しといふに非ずや。而して、彼が最も其の鼓吹者たり感激者たる特質を現したるは、松下村塾に於いて之を見る。

松下村塾は幕府顚覆の卵を孵化したる保育場の一なり。維

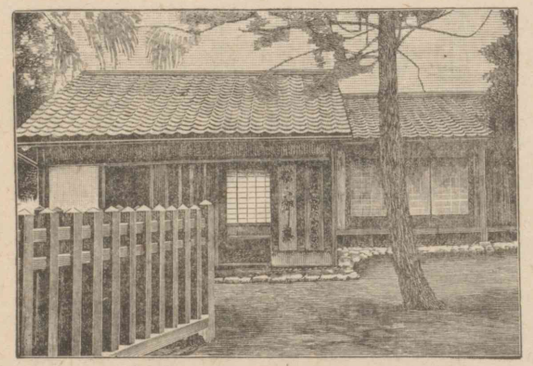
赤間關　下關のこと、馬關ともいふ。

○流風遺韻　○欽仰歎美

伊藤博文　明治の代表的政治家、公爵、我が國最初の內閣總理大臣、山口縣の人、明治四十二年薨、年六十九。

○蟄居

新の天火を燃したる聖壇の一なり。笑ふ勿れ、其の火、燐よりも微かに、其の卵、豆よりも小なりしと。赤間關の砲臺は粉にすべし、奇兵隊の名は滅すべし、然れども松下村塾に至りては、獨り當時に於いて結果の偉大なるものありしのみならず、流風遺韻今に及んで猶人をして欽仰歎美の情禁ずる能はざらしむるものあり。彼が門下の一人なる伊藤博文は言はずや、「如今廟廊棟梁、器、多、是、松門受教、人。」と。



松下村塾

彼は安政二年十二月、野山の獄より出でて家に蟄居せしめられたり。而して安政三年七月に至りて、蟄居中家學を授くるの許を得たり。松下村塾の名は其の內

○襲用す
○開山
○白面の書生
○匹敵する
○造化兒

叔玉木、外叔久保等が相繼いで用ひたる所にして、松陰これを襲用したりと雖も、吾人が所謂松下村塾に至りては、松陰を推して其の開山とせざるべからず。松陰が松下村塾に直接の關係を有したるは、安政三年七月より安政五年十二月までにして、其の歳月は僅かに二箇年半に過ぎず。しかも此の二箇年半の歳月が、其の後の日本歴史に於ける千波萬濤の激起點となりたるなり。

彼は學未だ深からず、識未だ高からず、齡未だ熟せず、經驗未だ多からず、要するに是れ白面の一中書生のみ。而して彼がよく其の力よりも大なる感化を及し、彼が人物と匹敵する、否、或點に於いては寧ろ彼よりも優れたる弟子を出し得たるは何ぞ。「感在知己」の一句、これを説明して餘りあるべし。

彼は造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈なり。一たび物に

飛ばす。
鎔かす
インスピレーション靈感。
○他なし
○眞骨頭
○金誠
○斃れて已む
○尊皇攘夷

觸著すれば、轟然として火星を飛ばす。此の時に於いては、物も碎け、彼も亦碎く。彼の全體は燃質にて組織せられたり、火氣に接すれば乍ち焔となる。其の焔となるや、鐵も鎔かすなり、金も鎔かすなり、石も鎔かすなり、瓦も鎔かすなり。彼の人に接するや全心を擧げてす。彼の人を愛するや全力を以てす。彼は往往インスピレーションの爲に精神的高潮に達す。而してこれを以て他に接し、他を導いて此の高潮に達せしむ。知るべし、彼が教育の道他なし、唯己が眞骨頭大本領を敍べて以て之を他に及すのみなるを。

彼が金誠たる士規七則に就いて見るに、質實義勇、斃れて已むの眞骨頭を以て尊皇攘夷の大本領を發揮したるもの、彼是を以て自ら感激し、彼是を以て自ら鼓吹す。其の一呼、虎嘯き、一吸、龍躍るもの、亦故なしとせず。

○主觀的

○獻身的精神

○年齒

○豈…んや

怪しむ勿れ、彼が教育の主觀的なるを。彼は、順序なく、次第なく、人に依りて其の教を異にするなく、才に應じて其の器を成すなく、才も不才も、壯も幼も、智者も愚者も、盡く己が欲する所を以て之に施ししものみ。思ひきりていへば、己を以て人に強ひしのみ。而して、他をして其の強ひらるゝを覺えしめざりしは、彼の熱血性と獻身的精神とによるのみ。

怪しむ勿れ、彼が師を以て自ら居らざるを。彼の眼中師弟なくして唯朋友あるのみ。是れ一は彼が年齒猶壯なるが爲、一は學校といはんよりも同志者の結合といふに幾きが爲なるべしと雖も、亦彼が天性然るべきものあり。顧ふに其の弟子が、彼が骨冷やかなる後に於いて猶涕を垂れて松陰先生を說くもの、豈故なしとせんや。

既に義勇節慨の眞骨頭たり、攘夷尊皇の活題目たるを知らば、

東坡　蘇軾、號は東坡、宋代の詩文の大家、建中靖國元年（西曆一一〇一）歿、年六十六。

○渙發

○奉戴す

松下村塾の所謂教育なるものも亦知るべきのみ。教育とは何ぞ。東坡の留侯論中の語を假り來れば、「其意不在書」の一句にて足るべし。彼等が學問は、書物の上の學問に非ずして實際上の學問なり。眼前の活事實を材料としたる學問なり、其の熱心に考究せしは、「米國より和親を申込めり。これは如何に爲すべきか。」「攘夷の大詔渙發せり、これを奉戴して運動するには、何事を爲すべきか。」といふが如き類にして、學校たるや革新運動の本部たるや區別なく、學問たるや運動の評議たるや境界なく、學問卽ち事業、事業卽ち學問にして、坐して言ふべく、起ちて行ふべく、行うて敗るゝも更に意とする所なしといふにあり。然れば彼等の學問は他日の用意に非ず。今日學ぶ所は卽ち今日の事にして、今日之を行ふを得べく、また行はざるべからざるの責任を有す。之を譬へば、なほ劍道の師範が道場を戰陣の眞中に行うて

高杉晋作　幕末の勤王志士、周防國山口藩士、慶應三年（一八六七）歿、年二十九、或は三十餘といふ。

口羽　松陰の知人。

開くが如く、其の勝負は所謂眞劍の勝負にして、勝つ者は活き、負くる者は死せんのみ。其の及第、其の落第、總べて活事實の上に存す。

彼等は如何にして此の活學問を講じたるか。彼が高杉晋作に與へたる書中に曰ふ、

隔日左傳八家會讀、勿論塾中常居七つ過ぎ會讀終る。夫より畠又は米春き、在塾生と之を同じくす。米春き大いに其の妙を得、大抵兩三人、同じく上り、會讀しながら之を春く。史記など二十四葉讀む間に米精げ畢る、亦一快なり。口羽に話し候へば、評して言ふ、「をかしい事許りする男。」と、

米を春きながら會讀する先生あれば、糠を篩ひながら講義を聞く生徒もあるべし。彼が他日再び野山の獄に投ぜられたるの時に於いて、福原又四郎に書を與へ、尊皇攘夷の事を論じ、諸友

○因循

○經綸　四十年後の今日　本文の書かれたのは明治二十六年。

○陶冶

の因循なるを尤め、曰く、「彼等或は又背き去ると雖も、蓋し村塾爐を圍み、徹宵の談を忘れざるべし。」と。嗟呼、寒爐火盡きて灰冷やかなるの處、霜雁月に叫んで人靜かなるの時、三五の青年相團欒し、灰に畫がきて天下の經綸を講じ、東方の白くるを知らざりしが如き、四十年後の今日に於いて、猶人をして永懷堪ふべからざらしむ。況んや時勢迫り、人物起ち、天下動かんとするの當時に於いてをや。

彼は社會の寵孫にあらず、彼が子弟も亦然り。彼等は恰も雪を踏んでアルプス嶺を攀づる旅客の如し。其の隆凍苦寒を凌がん爲には、互に負載し抱擁し、自他の體溫によりて其の呼吸を保たざるべからず。艱難は同情を生じ、同情は恩愛を生ず。先生前に斃れて弟子後に奮ふ。彼は知己の感を以て其の子弟を陶冶せり、激勵せり。彼は活ける模範となり、子弟に先立ちて難

○儒夫

○徒然

萩城　山口縣萩市の西北に其の趾がある。

洪太尉　支那の長篇小說水滸傳に見える洪信のこと。

○大立者

○輕視す

に殉ぜり、否子弟の爲に難に殉ぜり。此の時に於いて、懦夫と雖も猶起つべし、況んや平生の素養あるものに於いてをや。況んや恩愛の情、知己の感あるものに於いてをや。彼は其の子弟に向かつて我が如く做せといへり。而して做せり。彼等豈徒然として止まんや。

其の時を以てすれば、二年半に滿たず。其の處を以てすれば、萩城の東郊、臺所六疊、座敷八疊の矮屋に過ぎず。而して洪太尉が伏魔殿を發きて一百八の妖星を走らしめたる如く、唯此の中より無數の活劇及び活劇を演ぜし大立者を出したる所以のもの、豈其の由る所なくして然らんや。世或は一人を以て興り、世或は一人を以て亡ぶ。個人の社會に及す勢力も亦輕視すべからざるものあるにあらずや。

（吉田松陰）

野山の獄の松陰から、萩の妹千代への書簡。

十一月廿七日　安政元年。

○そもじ

○よもすがら

○和もじ

○あまつさへ

そもじの御家　千代は兒玉初之進の妻。

○萬端

一九　妹に訓ふ

吉田松陰

十一月廿七日と日附御座候御手紙並に九ねぶ三かんかつをぶし共に、昨晩相屆き、かこひの內はともし暗く候へども、大がい相わかり候まゝ、そもじの心の中を察しやり、なみだが出てやみかね、夜著をかむりてふせり候へども、如何にも堪へかね、又起きて御文くり返し見候て、いよ〳〵涙に咽び、つひにそれなりに寢入り候へども、間なく眼がさめ、よもすがら寢入り申さず、いろ〳〵なること思ひ出し候。

和もじは、父母樣や兄樣の御かげにて、著物も暖かに食物も豐かに、あまつさへ筆紙書物まで何一つ不足これなく、寒きにもまけ申さず候間、御安心成さるべく候。そもじの御家をば樣も御なくなられ候事なれば、そもじ萬端心がけ候はでは、相す

○年まし
○孝養

梅にい様
杉梅太郎、松陰の兄

まぬこと、殊にをぢ様も年まし御よはひ高く成らせられ候事故、別して御孝養を盡くし候へかし。又萬吉も日々太り申すべく候へば、心を用ひて育て候へ。赤穴のばあ様は御まめに候や。御老人の御事、萬事氣をつけて上げ候へ。かゝる御老人は家の重寶と申すものにて、金にも玉にもかへらるゝものにこれなく候。

そもじ事は、いとけなき折より心得よろしき者と思ひ、一しほ親しく思ひ候ひしが、この程御文拜し入らざる事までも申し進め候なり。

別にくだらぬ事三四枚認め遣はし候間、おとゝ様か梅にい様に讀みよきやうに寫してもらひ候へ。少しは心得の種にもなり申すべく候。

○就中
○一入
○ゆるがせ
○胎教

凡そ人の子の賢きもおろかなるも善きもあしきも、大抵父母の教に依る事なり。就中男子は多くは父の教を受け、女子は多くは母の教を受くること、またその大概なり。さりながら、男子女子共に十歳以下は母の教を受くること一入多し。故は父は嚴かに母は親し、父は常に外に出、母は常に内にあればなり。然れば子の賢愚善惡に關る所なれば母の教ゆるがせにすべからず。しかしその教といふも、十歳以下の小兒の事なれば、言語にてさとすべきにもあらず。只正しきを以て感ぜしむるの外あるべからず。昔聖人の作法には胎教と申す事あり。凡そ人は天地の正しき氣を得て形を拵へ、天地の正しき理を得て心を拵へたるものなれば、正しきは習はず教へずして自ら持ち得る道具なり。ゆゑに母の行正しければ、自ら感ずること更に疑ふべきにあらず。まして生まれ出て眼

も見え耳も聞え口も物言ふに到りては、たとへ小兒なればとて正しきに感ぜざるべきや。因つて茲に人の母たるものの行ふべき大切なることを記す。

一、夫を敬ひ舅姑に事ふるは至つてこれ大切なる事にて、婦たるものの行これに過ぎたることなし。しかれども是は誰しも心得ぬものなければ申さずともすむべし。さてかんえうは、元祖以下代々の先祖を敬ふべし。先祖をゆるがせにすればその家必ず衰ふるものなり。高大なる先祖の御恩をよくよく考へ、米一粒も先祖の御蔭と申すことを寢ても醒めても忘るゝ事なく、その祥月命日には先祖の事を思ひ出し、身を潔くし體を清め是を祭り奉るべし。又一事を行ふにも先祖へ告り奉りて後行ふやうにすべし。さすれば自ら邪事なく、する事なす事皆道理に叶ひて、その家自ら繁昌するものなり。

○事ふ

○祥月命日

註、婦人は己が生まれたる家を出でて人の家にゆきたる身なり。然れば己が生まれたる家の先祖の大切なる事は、生まれ落ちるとより辨へ知るべけれど、やゝもすればゆきたる家の先祖の大切なることは思ひつかぬこともあらん、よく〳〵心得べし。ゆきたる家が己が家なり、ゆるがせにすることなかれ。又先祖の行狀功績等をも委しく心得置き、子供等への昔噺の如く噺し聞かすべし。大いに益あることなり。

一、神明を崇め尊ぶべし。大日本と申す國は神國と申し奉りて、神々樣の開き給へる御國なり。然ればこの尊き御國に生まれたるものは、貴きとなく賤しきとなく、神々樣をおろそかにしてはすまぬことなり。併し世俗にも神信心といふ事する人もあれば、大抵心得違ふなり。神前に詣でて拍手を打

○註

○おろそか

○世俗

○立身出世
○長命富貴

菅丞相
菅原道眞。

○疎し

ち、立身出世を祈りたり、長命富貴を祈りたりするは皆大間違なり。神と申すものは正直なる事を好み、又清淨なる事を好み給ふ。それ故神を拜むには先づ己が心を正直にし又己が體を清淨にして、外に何の心もなくたゞ謹み拜むべし。是を誠の神信心と申すなり。その信心が積りゆけば二六時中己が心が正直にて體が清淨になる、是を德と申すなり。

菅丞相の御歌に、心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん。又俗語に、神は正直の頭に宿るといひ信あれば德ありといふ、よく〳〵考へて見るべし。

一、親族を睦まじくする事大切なり。是も大抵人の心得たる事なり。併し從兄弟と申すもの、兄弟へさし續いて親しむべき事なり。然るに世の中從兄弟となれば甚だ疎きもの多し、よく〳〵考へて見るべし。吾が從兄弟と申すは父母の甥

○さすれば

○如くはなし

なり。祖父母より見れば同じく孫なり。さすれば父母・祖父母の心になりて見れば、從兄弟をば決して疎くはならぬなり。併しながら從兄弟の疎きと申すは、元來父母祖父母の教の行き屆かぬなり。子を教ふるもの心得べきなり。凡そ人の力と思ふものは兄弟に過ぎたるはなし。もし不幸にして兄弟なきものは從兄弟に如くはなし。從兄弟・兄弟は年齡も互に似寄りて、もの學びしては師匠の教を受けし事をさらへ、事を相談しては父母の命を背かぬ如く計らふ、皆他人にて屆く事にあらず。此處をよく考ふべきなり。とかく婦人の詞よりして親族不和となる事多し、忘るべからず。

右に記しぬるは、先祖を尊ぶと、神明を崇むると、親族を睦まじくすると、以上三事なり。是が子供を育つる上に大切なる事

○埒もなき事

○家法

なり。父母たる者此の行あれば、子供は誰教ふるとなく自ら正しき事を見習ひて、かしこくもよくもなるものなり。さて又子供やゝ成長して人の申す事も耳に入るやうになりたらば右などの事を本とし古今の種々なる物語致し聞かすべし。子供の時聞きたる事は年を取りても忘れぬものなれば埒もなき事を申し聞かすよりは、少しなりとも善き事を聞かするに如くはなし。

杉の家法に世の及び難き美事あり。第一には先祖を尊び給ひ、第二に神明を崇め給ひ、第三に親族を睦まじくし給ひ、第四に文學を好み給ひ、第五に佛法に惑ひ給はず、第六田畠のことを親らし給ふの類なり。是等のこと吾みな兄弟の仰ぎ則とるべき所なり。皆々よく心懸け候へ、是卽ち孝行と申すものなり。

阿壽　松陰の次妹、小田村伊之助の妻。その下の文子は久坂玄瑞の妻。

○所詮

○鬼の眼にも涙

○ふし

○精誠の感通

○まじくや

○尊大人

此の書付は阿千代・阿壽等へ示し申すべしとて先日より胸中に蓄へ候處、所詮讀み書きの閑なくそれきりに致し置き候。昨朝事無き故ふと思ひつき認めかけ候。又暮程に見候へば餘り拙き故止め申すべしと存じ候處、夜中阿千代が文を見涙を流し、所謂鬼の眼にも涙とやら云ふふしにて、頻りに懷かしく相成候故、拙きながら妹等へ申し遣はしたく存じ候。久しく胸中に蓄へたるを昨日ふと筆を下し、その夜千代が文參り候事、精誠の感通かとも思はれ候。拙きはなんとせう、御閑御座候はゞ、半枚五行位に讀みよきやうに御認め、兩妹等へ御與へ遣はされまじくや、恐れながら尊大人へ御賴み仕りて然るべきや、萬々宜しく賴み奉り候。

（吉田松陰書簡集）

下田歌子　教育家、國文學者、實踐女學校長、岐阜縣の人。昭和十一年薨、年八十一。
太宰春臺　名は純。字は德夫。江戸時代の大儒。信濃の國の人、延享四年歿、年六十八。
程朱の學　支那の程明道、程伊川及び朱熹の流を汲める學派、朱子學。
荻生徂徠　名は雙松、字は茂卿本姓は物部、江戸時代の大儒、享保十三年歿、年六十三。
古學派　我が國儒學の一派、程朱、陸王等の學を離じ、漢・唐の注疏に遡りて、孔・孟の眞髓を傳へんとする學派。
○放任主義
○干渉

二〇　太宰春臺の母

下田歌子

太宰春臺といへば、江戸時代に名高かつた學者であります。彼は程朱の學を奉じて、後には荻生徂徠の古學派に入りましたが、道德堅固な、學識の卓絶した人でありました。春臺の父も亦漢學者として聞えた人で、號を柏樹齋と稱して居りました。或種の學者の習として、唯學問研究にのみ耽つて、一家の事、子女の事などは、少しも構はぬ方の性でありました。それ故、子息の春臺の教育については放任主義を執つて居たもので常に學問・技藝も其の人の天性にあるものだ、天性に適つたやうに自然に發達させるのが、眞の教育だといつて居りまして、一切我が子の教育上に、干渉がましい事は致さなかつたのであります。

それでは春臺があれ程の大學者となり、大文章家となつたのは、全然本人の天性を自然の儘に發揮したのかと申しますと、必ずしもさうばかりとは申されないのであります。勿論本人の天稟の勝れて居た事は申す迄も無い事でありますけれども、如何に勝れて居たからと申しても、それを其の儘に放任して置いては、所謂野育ちで、決して立派な者となり得るものではありませぬ。春臺をして十分に其の天才を伸びさせた後には其の母清水氏のあつた事を忘れてはなりませぬ。

下田歌子

春臺の母は、母として最も母らしい婦人であつたと共に、又此の當時には、殊に容易に得られない教育者であつたと存じます。

○野育ち

絶えず。

○懇々と

彼の母は、まづ武士の家、學者の家に生まれた子どもは、如何やうに教育すべきかを知つて居たのであります。父が全然放任主義をとつて何も教へなかつたのに拘らず、母は絶えず我が子を膝下に引きつけて置いて、武士として最も適切なる教育を施しました。即ち幼き子息を、自分の裁縫をする傍に坐らせて、源平盛衰記・保元物語・平治物語・其の他の軍書類等を繙いては、懇に教へました。如何なる夜でも、必ず一定してこれらの書物を一枚づつ朗讀させました。無論知らない文字や、解釋の出來ない句は教へて覺えさせるのであります。さてそれが濟むと、其の文の中に現れて居る人物を取つて、其の品性、其の技倆、其の他の事を自分も教へ、我が子にもいはせて、武士たる者の心得べき禮儀作法、武士となるべき品格、氣性の修養法等を、實例を引いては懇懇と說き聞かせ、文武二道に勵んで、名を擧げ、家を興す事の外、何事をも考へないで、一心に勉强せよと教訓するのでありました。

○怜悧

○服膺する

筆蹟　歌子

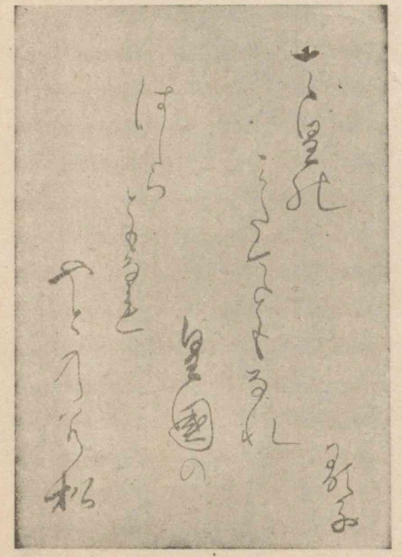
天皇のみたてともなれ
皇國のはしらともなれ
やどの若松

○剛直

孔子　名は丘、字は仲尼、支那魯の人、儒教の祖。

子路　名は由、衞の國に仕ふ、孔子の弟子。

怜悧な春臺は、又母より斯樣な教を受くる事を深く樂しみ、その訓戒を服膺致しました。母の教訓の感化は、非常に大なるものがあつたとみえて、彼は年一年と其の學力に於いて其の品性の修養に於いて、著しい進步發達を致しました。かくて遂に名を後世に殘す程の大學者となつたのであります。



下田歌子筆蹟

春臺は剛直・質實を以て聞えた人であります。自ら孔子の門弟子の子路を以て任じて居りました。子路は孔子が其の素朴なる氣風を愛して、高價なる狐の裘を著た紳士の中へ、見る影も

○堪能
○東叡山　東京市下谷區上野公園にあり、寛永寺といふ、天台宗、德川氏の菩提寺。
○聽聞
○復
○逸話

無き破れ袍を纏うて出ても、平然と交はつて居る者は子路其の人であらうと批評せられた程の賢人であります。此の子路に自分を比した程あつて、春臺も亦其の性行が頗る子路に似た所がありました。彼は非常に笛に堪能でありました。之を東叡山の法主が聞かれて、一度來て笛を聞かせてくれよと招かれました。すると彼は忽ちにそれを斷りまして、「私は儒者であります。儒者を儒者として、學問を御聽聞になるならば喜んで參りませうが、苟も孔子の道を學ぶ儒者に對ひ、音樂の業を以てせよとは御無理で御座らう。」といつて參りませんでした。そして其の後、復笛を手にしなかつたと申します。此の逸話によつて見ても、彼の性質を窺ひ知らるゝではありませぬか。然も此の性質を養成した功は、大部分その母にあると申さなければなりませぬ。

（香雪叢書）

北畠親房　吉野朝の忠臣、正平九年（一三五四）薨、年六十三。
○きほふ
○過分
前車の轍　前車覆、後車戒。（漢書）
○さのみ
○ことわり
鳥羽院　第七十四代鳥羽天皇。

二　人臣の道

北畠親房

およそ王土にはらまれて、忠をいたし命を棄つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵まし、その迹をあはれびて賞せらるるは、君の御政なり。下として、きほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして過分の望をいたすこと、みづからあやぶむるはしなれど、前車の轍を見ることは、誠にありがたきならひなりけむかし。中古までも、人のさのみ豪强なるをば戒められき。豪强になりぬれば、必ずおごる心あり。はたして身をほろぼし、家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の、源平の家に屬することをとゞむべしといふ制符度々ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時

○かたらふ

○めり
○さまで
○朝威
言語は云々
言行君子之樞機、樞機之發、榮辱之主也。（易經）
○あからさま
○ないがしろ

は宣旨を給はりて、諸國の兵を召具しけるに、近代となりて、やがてかたらはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されき。はたして今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりにけり。

北畠親房

この頃よりのことわざには、一度軍にかけあひ、或は家の子・郎從、節に死ぬる類ひもあれば、「わが功におきては日本國を給へ。若しは半國を給はりても足るべからず。」などぞ申すめる。まことにさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るゝはしともなり、また朝威のかろ〳〵しさもおし量らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも、君をないがしろにし、人

○こそ…（あれ）
堅き氷は云々
履霜堅氷至。（易經）

○末世
許由云々
許由耕二于潁水陽一、堯召爲二九州長一、由不レ欲レ聞レ之、洗二耳於潁水濱一、時巢父牽レ犢欲レ飲レ之、見レ由洗レ耳曰、汚二吾犢口一、牽二犢上流一飲レ之。（高士傳）
潁川　支那河南省にある川。

○などか

におごることは、あるべからぬことにこそ　堅き氷は霜を履むよりいたるならひなれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心詞を愼まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色のあらたまるにもあらじ。人の心のあしくなり行くを、末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へむとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて渡らざりき。その人の五臟六腑のかはるにはあらじ。能く思ひならはせる故にこそあらめ。

なほ行く末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。大かたおのれ一身は恩にほこるとも、萬人の怨を殘すべきことをば、などか顧みざらむ。君は萬姓の主にてましませば、限ある地をもちて、限なき人にわかたせ給はむことは、おしても量り奉るべし。

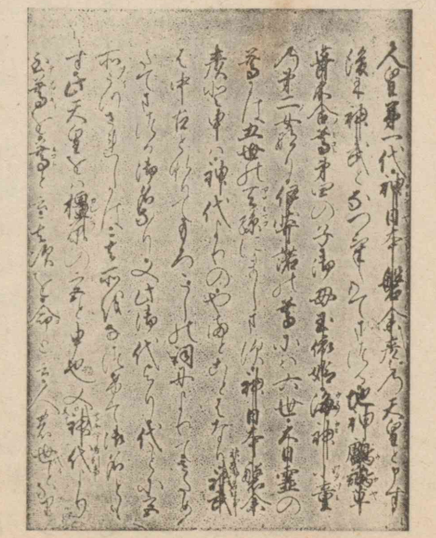
○なむ

○みながら

○しらす

比叡山　京都の東北、京都府と滋賀縣に跨る、

もし一國づつを望まば、六十六人にて皆ふさがりなむ。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悅ぶとも、千萬の人はよろこばじ。いはんや日本の半を心ざし、みながら望まば、帝王はいづくをしらせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にもいだし、おもてにも恥づる色のなきを、謀叛のはじめとはいふべきなり。將門は比叡山にのぼりて、大内を遠見して謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにやありけむ。むかしは人の正しくて、將門に見も懲り、聞きも懲りけむを、今は人の心のかくのみなりにたれば、この世はいよ〳〵衰へぬるにや。



神皇正統記　（青蓮院本）

蕭何　高祖に仕へ相國となつた。

韓信　漢が天下を取つたのは、多く信の功である、楚王に封ぜられのち殺された。

留　河南省開封府。

文治の頃　五年七月。

泰衡　藤原秀衡の子。

重忠　畠山氏。

長岡の郡　今宮城縣遠田郡の内二三村を含む。

○○こそ…（ありけれ。）

漢の高祖の天下を取りしは、蕭何・張良・韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、「籌（はかりごと）を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するは、この人なり。」と宣ひしかど、おごることなくして、留（りう）といひて、すこしきなる所を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多くほろびしかど、張良は身を全くしたりき。近き代のことぞかし、賴朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、身づから向かふことありしに、平重忠が先陣にて、その功勝れたりければ、五十四郡の中、いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、きはめたるすくなき所を望み給はりけりとぞ。これは人にひろく賞をも行はしめむがためにや、賢かりけるをのこにこそ。

直實　熊谷氏。

○奏聞す

○をかし

○こそ…め。

神皇正統記　親房が常陸の小田城にたてこもつてゐた時記したもので、神代から後村上天皇の御代までの歷史、吉野朝廷の正統なることを說いてゐる、六卷。

又直實といひける者に、一所を與へ給ふ下文に、「日本第一の剛の者なり。」と書きて給ひてけり。一とせ、彼の下文をもちて奏聞する人のありけるが、「褒美の詞の甚しきに、與へたる所のすくなき、まことに名を重くして利を輕くしける、いみじき事。」と口々に譽めあへりけり。いかに心得て譽めけむと、いとをかし。これまでの心こそなからめ、事に觸れて君をおとし奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀もかはりはてぬ、公家のふるき姿も無し、いかになりぬる世にかと、歎くともがらもありと聞えしかど、中一とせばかりは、誠に一統のしるし覺えて、天の下こぞり集りて、都の中はえ〴〵しくこそ侍りけれ。

（神皇正統記）

中村直勝　史學者、京都帝國大學助教授、滋賀縣の人、明治二十三年生。

世良親王　後醍醐天皇の第二皇子。

○精魂を捧げる

○何くれとなく

○遺命

○憔悴

○心肝も消え果てる思ひ

○冥加

○越えて

萬里小路季房　藤原吉野朝の忠臣、藤房氏、宣房の子、藤房の弟。

三　北畠親房

中村直勝

元德二年九月十三日の夜深く、月影かすかに、蟲の聲々漸く細りゆくころ、世良親王は御側離れず御看護に精魂を捧げまつつてゐる北畠親房を御枕邊近く召させられて、御臨終の期の迫れることを御告げになり、そして御亡き後の事何くれとなく御遺命になつた。が、日頃の憔悴と、今また、まのあたりの悲しい御言葉とに、心肝も消え果てる思ひの親房には、その御遺命を直ちに筆にしまゐらせるだけの力がなかつた。一日延し、二日延し、今はたゞ、神佛の祈念に冥加の兆のあらはれ來るをのみ待ち望んでゐたのであつたが、それも空しくして、越えて十七日にはあへなくも、遂に薨去あらせられた。父みかどの御悲しみは申すも畏し。せめてはと、右大辨萬里小路季房を勅使として御遺跡の

○優　諚
○奏上する
○別　業
○禪　院
○所　領
○寄進する
○成人の曉
○世離れる
住まはせられる
○近侍する
○輔　導
○誠衷を捧げる
○神　去る
○掌中の玉を失ふ

ことなどを、ねんごろに問はせられた。親房は御優諚を拜して、しばしは涙にくれてゐたのであるが、やがて御遺命のことなど奏上し、なほのちの爲にもと、始めて筆を染めて、これを書き記した。

河端の別業を禪院となして御所領を寄進せらるゝこと。

二人の姫宮は御成人の曉、佛門に入らしめらるべきこと。

その他にもなほいろ〳〵のことがあつた。

この河端の別業と云ふのは嵯峨桂川の畔にあつて水の流れ山の眺め、誠に世離れて、趣深い所であつたので、世良親王は、好んで此所に住まはせられた。それゆゑ、親王を呼んで世に河端の宮とも申し上げる。親房はこの河端の宮に御幼少のころから近侍して、御養育に御輔導に誠衷を捧げてゐたのであつた。しかもその皇子は遂に神去りましたのである。掌中の玉を失へ

抱いて
奉侍しよう
○歴仕する
○信　望
○重　鎭
○正中の變
○宿　望
日野俊基
藤原氏、吉野朝の忠臣。
○東奔西走
文　觀
眞言宗の僧、京都醍醐寺の座主、北條氏のために硫黄島に流された。
圓　觀
法勝寺の僧、北條氏のために陸奥に鋸せられた。

るにも似た悲しみを抱いて、彼は遂に剃髮して法名を宗玄と改めた。せめては亡き皇子のみ靈に奉侍しようと志したのである。

親房は既に伏見・後伏見・後二條・花園・後醍醐の五天皇に歴仕して、その誠忠と學識とは、よく一世の信望を集め、常に時勢を指導する地位に立つてゐた。この國家の重鎭が急に身を退けることは、天皇の御歎きを一入深からしめるものであつた。時は正中の變あつて以來、未だ數年を出でず、表面は泰平事無きが如くに見えたけれども、裏面には、天皇の御宿望たる討幕の御計畫が著々とその歩を進めて、大内記日野俊基が姿を變へて東奔西走の最中であつたのである。

果して翌元德三年六月には、その謀が洩れて俊基朝臣は捕へられて鎌倉に送られ、七月には文觀・圓觀相ついで流され、八月二

○國歩艱難
○居然
増鏡　後鳥羽天皇から後醍醐天皇に至る十五代百五十年間の編年體の歴史物語。作者未詳。
○あたらし
○當座
○正覺
○頓證菩提
○遺孤
○塵外

十四日には、畏くも天皇にはひそかに都をのがれて、一旦笠置に落ちさせ給ふの餘儀ない時運に立ち至つた。この國歩艱難の際に、居然として重きをなす親房の姿が宮廷から消え去つたことは、いかに淋しいことであつたであらうか。増鏡の筆者は彼の出家を叙して、「世にもいとあたらしく惜しみあへり。」と云つてゐるが、正しくその通りであつたのである。かくて、入道宗玄の名はしばらく歴史の表面から隠れてゐた。この間に彼は果して何を爲してゐたであらうか。

勿論出家の當座は、かの禪業にいそしんで、正覺を求めるに日もこれ足らぬ思ひであつた。亡き皇子の頓證菩提を祈つて、ひたすらに心の痛みを繕つてもゐた。二人の御遺孤を託するに足るべき黒衣の袂を求めても見た。しかし彼が出家の直後に相繼いで起り來つた世相の轉變は、果して彼をして塵外にのみ

○蒙塵
○徂徠する
○芟除
○稽古
○こそ…侍れ。
○經學
○隆替
○造詣
司馬光　字は君實、宋の神宗の時相となる、卒して大師温國公を贈られた。
資治通鑑　司馬光が神宗の時勅命によつて撰した書。
○思索する

思ひを馳せしめたであらうか。笠置の蒙塵・隱岐の遷幸、親房の眼前に徂徠する幾多の悲しむべき異變は、彼をして、その所由の探求と、その誘因の芟除とに心を向けしめたのであつた。

抑、北畠の家は、「代々和漢の稽古を先として朝家に仕へ、政務にも交はる道をのみこそ學び侍れ。」と親房自らも云つてゐるやうに、代々學問の家であり、經學の統を繼いでゐたのである。從つて親房は、政道の變遷・國家の隆替に就いては古今東西に亙つて研究を重ねてゐたし、近くは此の頃新しく輸入された宋儒の理性の説にも造詣深く、司馬光の資治通鑑などをも已に讀破してゐたのである。その彼が、今や世を捨て俗を去つてゐると云ふことは、彼をして、徐に世相の所由を稽へ、廣く盛衰の跡を討ね、以て我が皇國の大道を思索するに最も好い機會を與へたものであつた。

○素地
○檢討する
○闡明する
○精神生活を深化する
○內面生活
○高揚
○西狩
○千古不磨
輝いて

かくして親房後年の大著たる神皇正統記の生まれ出づる素地は作られたのである。何をか我が國の本質とはすべき、何ゆゑ我が國を呼んで神國とは云ふべきかの理由は、檢討せられたのである。神皇正統なるべき古今を貫く皇國の大道は闡明せられたのである。世良親王の御薨去、それは親房の精神生活を深化する因となつたと共に、彼の內面生活の高揚に對する靜かな機會を與へたものでもあつた。車駕は西狩中である。身は隱遁の一沙門である。思を錬り想を磨いた。かくてこそ千古不磨の大道は彼の胸中に確乎たる信念となつて輝いて來たのであつた。

（北畠親房）

義朝　源爲義の長男、永暦元年（一一六〇）歿、年三十八。
秦野次郎　名は延景。
○不便
○相構へて
○わびしむ
船岡　今京都市上京區にある小丘陵。
○力なし
○物詣で
○公達

三乙　若

さるほどに、內裏よりすなはち義朝を召され、藏人右少辨資長朝臣を以て仰せ下されけるは、「汝の弟どもの未だ多くあるなるを、たとひ幼くとも女子の外は皆尋ねて失ふべし。」となり。宿所に歸つて秦野次郎を召してのたまひけるは、「あまりに不便なれども、勅諚なれば力なし。母か傅か抱きて山林に逃げ隱れたらむはいかゞせむ。六條堀河の宿所にある當腹の四人をばすかし出して、相構へて道のほどわびしめずして、船岡にて失へ。」とぞきこえける。

延景難儀のお使かなと心うく思へども、主命なれば力なし。涙を袖に收めつゝ、泣く〳〵輿を舁かせて、かの宿所へぞ赴きける。母上は折節物詣での間なり。公達は皆おはしけり。兄を

入道殿　爲義
守殿　下野守源義朝。
○つゝましし
雲林院　船岡の東、今の大宮北大路の附近にあつた寺。
○見參
○冥途の使
羊のあゆみ　譬ヘバ旃陀羅羊ヲ驅リテ居所ニ就カシムルガ如シ、歩々死地ニ近ヅク、人命亦是ノ如シ。（摩耶經）

ば乙若とて十三、次は龜若とて十一、鶴若は九つ、天王は七つなり。此の人々延景を見つけてうれしげにこそありけれ。秦野次郎「入道殿のお使にまゐつて候。殿は十七日に比叡山にて御さまをかへさせ給ひて、守殿の御もとへ入らせ給ひしを、世間も未だつゝましとて、北山雲林院と申す處に忍びてわたらせ給ひ候が、公達の御事おぼつかなくおぼしめし候間、御見參に入れ奉らむ爲に、具し奉つて參らむとてお迎へにまゐつて候。」と申せば、乙若出であひて、「まことに樣變へておはしますとは聞きたれども、軍の後は未だお姿を見奉らねば、誰も〳〵皆戀しくこそ思ひはべれ。」とて、我先にと輿に爭ひ乘られけるこそあはれなれ。これを冥途の使とも知らずして各輿どもに向かひつゝ、「急げや急げ。」と進みける。羊のあゆみ近づくを知らざりけるこそはかなけれ。

大宮　大宮通。
○いかゞせまし
○ややあつて
大殿　爲義。
守殿　義朝。
八郎御曹子　源爲朝。
四郎左衞門　源頼賢。
九郎　源爲仲。

大宮を上りに船岡山へぞ行きたりける。峰より東なるところに輿かきすゑて、いかゞせましと思ふところに、七つになる天王走り出でて、「父はいづくにましますぞ。」と問ひ給へば、延景涙をながして、しばしはものをも申さざりしが、ややあつて、「今は何をか隱し參らすべき。大殿は守殿の御承りにて、きのふの曉斬られさせ給ひ候ひき。御舍兄たちも、八郎御曹司の外は、四郎左衞門殿より九郎殿まで五人ながら、ゆふべ此の表に見えて候山もとにて斬りたてまつり候ひぬ。君たちをも失ひ申すべきにて候。『相構へてすかし出し參らせて、わびしめたてまつらぬやうに。』と、仰せつ

船岡山

けられ候間、入道殿のお使とは申しはべるなり。おぼしめすこと候はば、延景に仰せ置かせ給ひて、みなお念佛候べし。と申せば、四人の人々これを聞き、みな輿より下り給ふ。九つになる鶴若殿、「下野殿へ使を遣はして、『如何に吾等をば失ひ給ふぞ。四人を助け置き給はば、郎等百騎にもまさりなむずるものを。』このよし申さばや。」とのたまへば、十一歳になる龜若、「誠に今一度人を遣はしてたしかに聞かばや。」と申されける所に、乙若殿生年十三なるが、「あな心うの者どもの言甲斐なさや。われらが家に生まるゝものは、幼けれども心はたけしとこそ申すに、かく不覺の事を宣ふものかな。世のことわりをもわきまへ、身の行末をも思ひ給はば、六十になり給ふ父の病氣によつて出家遁世してたのみて來り給ふをだに斬る程の不當人の、まして我我を助け給ふことあらじ。あはれ、はかなき事し給ふ守殿かな。

下野殿義朝
○なむず
○心う
○不覺
○出家遁世
○不當人
○はかなきこと

これは清盛が和讒にてぞあるらむ。多くの弟を失ひはてて、只一人になして後、事のついでに亡さむとぞ計らふらむを覺らず、只今わが身を失はせたまはむこそ悲しけれ。二三年をも過し給はば、幼かりしかども、乙若が船岡にてよくいひしものをと、汝等も思ひ合はせむずるぞとよ。さても、下野殿討たれ給ひて後、忽に源氏の世絶えなむことこそ口惜しけれ。」とて、三人の弟たちにも、「な歎き給ひそ。父も討たれ給ひぬ、誰か助けおはしまさむ。兄たちもみな斬られたまひぬ。情をかけ給ふべき守殿は敵なれば、いまは定めて一所懸命の領地もよもあらじ。されば命助りたりとも、乞食、流浪の身となりて、こゝかしこにまよひ行かば、『あれこそ爲義入道の子どもよ。』と人々に指をさゝれむは、家のためにも恥辱なり。父戀しくば、たゞ西にむかつて南無阿彌陀佛と唱へて、西方極樂に往生し、父御前と一つ蓮に生ま

○こそ…けれ
○な…給ひそ
○一所懸命の領地
○往生す

○おとなしやか

○ぞ…ける。

○内記平太　名は政遠。

○宮仕へ

○じ

れあひたてまつらむと思ふべし。」とおとなしやかにのたまへば、三人の公達おの〳〵西にむかつて手をあはせ、禮拜しけるぞあはれなる。これを見て、五十餘人の兵も、みな袖をぞぬらしける。

此の公達に、各一人づつ傅どもつきたりけり。内記平太は天王殿の傅、吉田次郎は龜若、佐野源八は鶴若、原の後藤次は乙若殿の傅なり。さし寄つて髪結ひあげ、汗拭ひなどしけるが、年來日來宮仕へ、朝夕に撫ではだけたてまつりて、只今をかぎりと思ひける心どもこそ悲しけれ。されば、聲をあげて叫ぶばかりにありけれども、幼き人々をなかせじと、おさふる袖のひまよりも、あまる涙の色深く、包むけしきもあらはれて思ひやるさへあはれなり。

乙若、延景に向かつて、「われこそ先にと思へども、あれらが幼

○無慚

○ばや

○いしう

○こそ…らめ

○ほかゐ　（外居・行器）餅・飯などを入れて人に贈り又は他所へ運ぶ器。

心におぢ怖れむも無慚なり。また言ふべき事も侍ればあれらをさきに立てばや。」とのたまひければ、秦野次郎太刀を拔いて後へ廻りければ、傅ども、「御目を塞がせたまへ。」と申して皆のきにけり。即ち三人の首まへにぞ落ちにける。乙若これを見給ひて、少しも騷がず、「いしう仕りつるものかな。我もさこそ斬られむずらめ。さてあれはいかに。」とのたまへば、ほかゐを持たせてまゐりたり。手づから此の首どもの血のつきたるを押し拭ひ髪かきなで、あはれ無慚の者ども

乙若等の最後

○果報
○かねて　ぞ…たとしへなき。
八幡　石清水八幡宮。
○片恨
○下向

や。かほどに果報少なく生れけむ。只今死ぬる命より、母御前のきこしめし歎き給はむそのことを、かねて思ふぞたとしへなき。『乙若は命を惜しみてや後に斬られける。』と、人いはむずらむ。全くその儀にてはなし。かやうの事をいはむにつけても、亦わが斬られむを見むにつけても、留りたる幼き者のまた泣かむも心苦しくていはぬなり。母御前のけさ八幡へ詣で給ふに『われもまゐらむ。』と申せば、『皆まゐらむ。』といへば、『具せば皆こそ具せめ、具せずば一人も具せじ、片恨に。』とて、我等が寢たる間に詣でたまひしが、下向にてこそ尋ね給ふらめ。我等かゝるべしとも知らざりしかば、思ふ事をも申し置かず、形見をも參らせず、只入道殿のよび給ふと聞きつる嬉しさに、急ぎ輿に乘りつるばかりなり。さればこれを形見に奉れ。」とて、弟どもの額髮切りつゝ、我が髮を具して、もし違ひもやせむずるとて、別々に

○たぶ
○よな
○なか〳〵
○かつは
○親子は一世の契
○天に仰ぎ地に伏す

包み分けて、各、その名を書きつけて、秦野次郎にたびにけり。

「又、ことばにて申さむずるやうはよな、『けさ御供に參りなば、遂には斬られ候とも、最期の有樣をば、互に見もし見え參らせ候はむずれども、なか〳〵互に心苦しき方も侍らむ。お留守に別れ奉るも、一つの幸にてこそ侍れ。此の十年餘りの間は、かりそめに立ちはなれ參らするごとも侍らぬに、最期の時しも御見參に入らねば、さこそ御心にかゝり侍るらめなれども、かつは八幡の御はからひかとおぼしめして、いたくな歎かせおはしまし候ひそ。親子は一世の契と申せども、來世は必ず一つ蓮に參りあふやうにお念佛候べし。』とて、「いまはこれらが待ち遠なるらむ、とく〳〵。」とて、三人の死骸の中へわけ入つて、西に向かひ念佛三十遍ばかり申されければ、首は前にぞ落ちにける。四人の傅ども急ぎ走り寄り骸を抱きつゝ、天に仰ぎ地に伏して、をめき

叫ぶもことわりなり。まことに涙と血と相和して流るゝを見る悲しみなり。

内記平太は、直垂の紐を解きて、天王殿の身を我が肌に當てて申しけるは、「此の君を手馴れたてまつりしより後、一日片時も離れ參らすることなし。我が身の年の積ることをば思はず、早く人と成らせ給へかしと、あけくれ思ひてはぐくみまゐらせ、月日の如く仰ぎつるに、只今かゝる目を見ることの心うさよ。常は我が膝の上にゐたまひて、髭を撫でて、『いつか人となりて、國をも庄をも設けて知らせむずらむ。』とのたまひしものを、うたたねの寢覺にも、『内記々々。』と呼ぶお聲耳の底にとゞまり、只今のお姿まぼろしにかげろへば、さらに忘るべしとも覺えず。これより歸りて命生きたらば、千年萬年を經べきや。死出の山・三途の河をば誰かは介錯申すべき。おそろしくおぼしめさむ

○手馴る
○一日片時
○人と成る
○介錯

につけても、まづ我をこそ尋ね給はめ。生きて思ふも苦しきに主の御供仕らむ。」といひもはてず、腰の刀を抜くまゝに、腹かき切つてぞ失せにける。

恪勤の二人ありけるも、「幼くおはしましかども、情深くおはしつるものを、今は誰をか主と頼むべき。」とて、刺し違へて、二人ながらに死にけり。此れ等六人が志類なしとぞ申しける。同じく死する道なれども、合戰の庭に出でて、主君と共に討死し腹を切るは常の習なれども、かゝる例は未だなしとて譽めぬ人こそなかりけれ。

此の首ども渡すに及ばず、あまりに父を戀しがりければとて圓覺寺へ送りて、入道の墓の側にぞ埋めける。

（保元物語）

○恪勤
○首を渡す
圓覺寺　洛東岡崎にあつた。
保元物語　保元の亂の顛末を記した軍記物、三卷、著者未詳、或は葉室時長の作といふ。

百田宗治　詩人、大阪の人、明治二十六年生。

○颯爽

冷えた

○なほかつ

二四　詩　二篇

一　曝冬

百田宗治

わたしはあの風がすきだ、
冬の朝の四辻を引裂く
あの颯爽たる風がすきだ。

もりあがつた土の穗さきを、
あの冷えた霜の刄にとざして
なほかつそれを凍らせてゆかうとする……。

かじかんでゐる人間の氣息を、

○峻烈

富田碎花　詩人、名は戒治郎、岩手縣の人、明治二十三年生。

○念禱

日の出るまへのあの峻烈な
外氣のなかで曝し上げよう。

二　雪のなかの樹（何もない庭）

富田碎花

これは念禱の姿である。
全く葉の落ちつくした樹は
無數の枝頭を
夕空へと
一齊に上げて
無言の祈禱を描く。

そして、世界は、いま、

空しい白さに冴えかへつて
凡ゆるものは聲をのみ
壓し迫るやうに動く「自然」の歩みも
しばらく停められたかたちである。

おお、
數限りもない手を擧げて
あらはな祈禱を捧げる
雪の野のなかの
偶然の樹の立姿——
人は一心になつて
こゝに、いま、櫂路を急ぐ。

（登高行）

○「自然」の歩み

○あらは

夏目漱石　小説家、俳人、英文學者、名は金之助、東京の人、大正五年歿、年五十。

三重吉　姓は鈴木、小説家、漱石の門人、昭和十一年歿、年五十五。

○不斷

○大儀

○素足

三重吉は鳥籠を丁寧に箱の中に入れて、緣側へ持出し、「此所に置きますから。」といつて歸つた。自分は伽藍の樣な書齋の眞中に床をのべて冷やかに寢た。夢に文鳥を背負ひこんだ心持は少し寒かつたが、眠つて見れば不斷の夜の如く穩かである。

翌朝眼が覺めると、硝子戸に日が射してゐる。忽ち文鳥に餌をやらなければならないなと思つた。けれども起きるのが大儀であつた。今に遣らう、今に遣らうと考へてゐるうちに、とうとう八時過になつた。仕方がないから顏を洗ふ序をもつて、冷たい緣を素足で踏みながら、箱の蓋を取つて、鳥籠を明るみへ出した。文鳥は眼をぱちつかせてゐる。もつと早く起きたかつたらうと思つたら、氣の毒になつた。

文鳥の眼は眞黑である。瞼の周圍に、細い淡紅色の絹絲を縫附けたやうな筋が入つてゐる。眼をぱちつかせる度に、絹絲が急に寄つて一本になる。と思ふと、又丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾けながら、此の黑い眼を移して、初めて自分の顏を見た。さうして、ちちと鳴いた。

文鳥

自分は靜かに鳥籠を箱の上に据ゑた。文鳥はぱつととまり木を離れた。さうして又とまり木に乘つた。とまり木は二本ある。黑味がかつた青軸を、程よき距離に橋と渡して横に並べた。其の一本を輕く蹈まへた足を見ると、如何にも華奢に出來てゐる。細長

○据ゑた

○華奢

い淡紅の端に眞珠を削つたやうな爪が着いて、手頃なとまり木をうまく抱へ込んでゐる。すると、ひらりと目先が動いた。文鳥は既にとまり木の上で向きを換へてゐた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首をふと持直して、心持ち前へ伸したかと思つたら、白い羽が又ちらりと動いた。文鳥の足は、向ふのとまり木の眞中あたりに、具合よく落ちた。ちゝと鳴く。さうして遠くから自分の顏を覗き込んだ。

自分は顏を洗ひに風呂場へ行つた。歸りに臺所へ廻つて戸棚を明けて、昨夕三重吉の買つて來てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、又書齋の緣側へ出た。

三重吉は周到な男で、昨夕丁寧に餌をやる時の心得を說明して行つた。其の說によると、無暗に籠の戸を明けると文鳥が逃

○手頃

○周到

げ出してしまふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手を其の下へあてがつて、外から出口をふさぐやうにしなくては危險だ。餌壺を出す時も同じ心得でやらなければならない。と其の手つきまでして見せたが、かう兩方の手を使つて、餌壺をどうして籠の中に入れることが出來るのか、つい聞いて置かなかつた。

○やむを得ず

自分はやむを得ず、餌壺を持つたまゝ、手の甲で籠の戸をそろりと上へ押上げた。同時に左の手が開いた口を塞いだ。鳥はちよつと振返つた。さうしてちゝと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の處置に窮した。人の隙を窺つて逃げるやうな鳥とも見えないので、何となく氣の毒になつた。三重吉は惡い事を敎へた。

大きな手をそろ〳〵籠の中へ入れた。すると文鳥は、急に羽

○日課
○伽藍

ばたきを始めた。細く削つた竹の目から、暖いむく毛が白く飛ぶ程に翼を鳴らした。自分は、急に自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺を、とまり木の間に漸く置くや否や、手を引込ました。籠の戸はぱたりと自然に落ちた。文鳥はとまり木の上に戻つた。白い首を半ば横に向けて、籠の外にゐる自分を見上げた。それから曲げた首を眞直にして、足の下にある粟と水を眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行つた。

其の頃は日課として小說を書いて居る時分であつた。飯と飯の間は大抵机に向かつて筆を握つて居た。靜かな時は自分で紙の上に走るペンの音を聞くことが出來た。伽藍の樣な書齋へは誰も入つて來ない習慣であつた。筆の音に淋しさといふ意味を感じた朝も晝も晩もあつた。しかし時々はこの筆の音がぴたりと止む、又止めねばならぬ折も大分あつた。其の時

○一應

○受合ふ

は指の股に筆を挾んだまゝ、手の平へ顎を載せて、硝子越に吹き荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが濟むと、載せた顎を一應つまんで見る。それでも筆と紙が一緒にならない時は、つまんだ顎を二本の指で伸して見る。すると緣側で文鳥が忽ちちよ〳〵と二聲鳴いた。

筆をおいて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いたまゝ留り木の上から、のめりさうに白い胸を突出して、高くちよといつた。三重吉が聞いたら、さぞ喜ぶだらうと思ふ程な美い聲でちよといつた。三重吉は「今に馴れるとちよと鳴きますよ、きつと鳴きますよ。」と受合つて歸つて行つた。自分は又籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨らんだ首を二三度竪横に向け直した。やがて一體白い體が、ぽいととまり木の上を拔け出した。と思ふと綺麗な足の爪が半分餌壺の緣から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つくり返りさうな餌壺は、釣鐘の樣に靜かである。さすが文鳥は輕いものだ。何だか淡雪の精の樣な氣がした。

文鳥は、つと嘴を餌壺の眞中に落した。さうして二三度左右に振つた。綺麗にならして入れてあつた粟が、ばら〳〵と籠の底にこぼれた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微かな音がする。又嘴を粟の眞中に落す。又微かな音がする。其の音が面白い。靜かに聽いて居ると、丸くて細やかで、しかも非常に速かである。堇程な小さい人が、黃金の槌で瑪瑙の碁石をつゞけざまに敲いて居るやうな氣がする。

嘴の色を見ると、紫を薄く混ぜた紅のやうである。其の紅が次第に流れて、粟をつゝく口先の邊は白い。象牙を半透明にした白さである。此の嘴が粟の中へはひる時は非常に早い。左右に振蒔く粟の珠も非常に輕さうだ。文鳥は身を逆さまにし

○寂然

ないばかりに、尖つた嘴を黄色い粒の中に刺込んでは、膨らんだ首を惜氣もなく左右に振る。籠の底に飛散る粟の數は、幾粒だか分からない。それでも餌壺だけは寂然として靜かである。重いものである。餌壺の直徑は一寸五分程だと思ふ。

自分はそつと書齋へ歸つて、淋しくペンを紙の上に走らしてゐた。緣側では、文鳥がちゝと鳴く。折々はちよ〳〵とも鳴く。外では木枯が吹いてゐた。

夕方には文鳥が水を飲むところを見た。細い足を壺の緣に掛けて小さい嘴に受けた一雫を大事さうに、仰向いて飲み下してゐる。此の分では一杯の水が十日位續くだらうと思つて又書齋へ歸つた。晩には箱にしまつてやつた。寢る時硝子戸から外をのぞいたら、月が出て、霜が降つてゐた。文鳥は箱の中でことりともしなかつた。

（漱石全集）

二六　早春の賦

阿部次郎

阿部次郎　哲學者、東北帝國大學教授、山形縣の人、明治十八年生。

○調節

○凛然

余は一年の中のあらゆる季節を愛する。光と生命とに溢れる夏も、靜かに澄みわたりつゝ鎭まり行く秋も、自然の生命の墓の中に溫かに雪に籠る冬も、盛んなるにつけ、寂しいにつけ、靜かなるにつけ、悲しいにつけ、愁を含むにつけ、快活なるにつけ、漲り溢れるにつけて、余は一年の中のあらゆる季節を愛する。

しかし、かくいふのは、余と容易に同化し難い季節と、余と最も調子の合ふ季節の差別があることを否定する意味ではない。梅雨の美しさや、雪の美しさを感ずるには、余にとつては身神の特に强健で調節せられた狀態が必要である。余の心の痛み易く感じ易い時、葉蔭に熟する梅の實の美しさよりも、灰色の空と肌を襲ふ濕潤の氣の厭はしさによつて、凛然たる霜晨の勇まし

○たゆたふ
○羞ぢらふ

さよりも、裸な土と梢を搖る風の音の峻しさによつて、余の心は容易にかき亂される。これに反し一年の中最もよく余の心と調を等しくするのは春の微かに動き始める頃、吹く風に遠山の雪の冷たさを傳へながらも日の光の肌に親しい頃、ぬくみ始めた細流の邊に青いものの漸く芽ぐむ頃である。その時、自然の生命の營は、なほ半ば大地の下に行はれて、中に籠る力はたゆたひつゝ、羞ぢらひつゝ、しかも怠るところのない伸張を續けて行く。生命の車はいまだ全力を盡くして急轉することをせずに、前途の遙けさを豫想しつゝ、その靜かに緩

早春

○懶惰
エレメント適所。
○回想する

かな廻轉を開始する。外に發するよりも内に籠ることを愛する余は、懶惰で急調の旋轉に堪へない余は、しかも内より溫める力を自覺せずには生きがひを感ずることのできない余は、一年の中この季節に於いて、最も自己のエレメントにゐる事を感ずるのである。かくて余は、晴れた日はひとり野を歩き、丘を行き、春淺い雜木林の下陰を行きつゝ、頰に冷い風と背に暖かい日の光とを貪り味はふ。書を讀みつゝ夢みるものは旅である。雨に籠つて夢みるものもまた旅である。

梅

余はまた早春に當つて特に幼年の時を回想する。土の上に

蕗

○ときめき

黑くなつて凍つてゐた雪もいつしか解けて、暖い日の光を吸ふ大地の面の日毎に廣がり行く時、久しぶりに草履を穿いて外出する喜に溢れつゝ、街道を過ぎる雪解の水の小流を跨いで獨樂を廻した時分のこと。雪の下に芽を出す笹筍の赤い頭や、蕗の臺の青い頭を捜し廻る心のときめき、遠山の雪を眺めながら、雪解の水の碧く勢よく流れ行く山川の邊に腰を下して、詩と人生とを思つた年少の頃。思へば是等の人生の早春も、自分には既に流れ過ぎてしまつたのである。

やがて桃が咲き、櫻が咲き、霞が流れ、また櫻が散る。さうして自然はまた余の特愛する第二の季節に——こたびは木々の梢の上にあつて、自然の力が再び籠りつゝ羞ぢらひつゝ、すく〳〵と伸び行く晩春初夏の節に——入るのである。（北郊雜記）

二七　道

芳賀矢一

昔、刀鍛冶が刀を鍛錬する時は一心不亂であつた。精進潔齋、一切の邪念を棄てて、神明に感通するまで心を籠め、思を凝らした。さういふ至誠と集中があつて、始めて武士の魂とするにふさはしい名刀は鍛へ出されたのである。しかしこれはひとり刀劍鍛錬の上のみではなく、萬事此の境に到らなくては、到底其の奥儀は極められない。我々の祖先は、何事にまれ一事を修めようとするに當つては、實に此の覺悟と決心とをもつて刻苦し、勉勵したのである。

これは、古來すべての藝術に道といふ語が用ひられてゐることによつても明らかである。道とは、神道・儒道・佛道等の語に於ける如く、人の依るべき所の意で、道德的な意味が主となつてゐ

芳賀矢一　國文學者、文學博士、東京帝國大學名譽教授、國學院大學長、帝國學士院會員、福井の人、昭和二年歿、年六十一。

○精進潔齋

○邪念

○奥儀

○まれ

○刻苦する

○極意
○極樂淨土
住吉明神　大阪市住吉區住吉町に在る住吉神社、和歌三神の一である。
○固有
○末技
○畢竟
○融合する

て、單なる術とは違ふ。劍術・弓術・馬術などといへば單に其の技術をいふのであるが、其の極意奥儀をいふ場合には必ず劍道といひ、弓馬の道といふ。昔は、和歌を學ぶ人は、歌道を學べば直ちに極樂往生が出來るとまで信じた。それ故、名歌を得られるやうにと住吉明神に參籠したことなどは決して珍しくない。歌道は又日本固有の道であるといふ所から、敷島の道・葦原の道などとも名づけられたのである。其の他書法を書道といひ、茶の湯を茶道といひ、更に香のやうな末技までも香道といつた。音樂はもとより、活花でも蹴鞠でも、投扇でも、すべて道として尊んでゐる。

藝術は指の先や手の先で唯其の技術を練習するだけでも、勿論或程度までは上達出來るが、それは畢竟生命のない技術に過ぎない。眞の上手になり、奥儀を究めるには、心がこれと融合し

○放擲する
○考へもの
○非難する

なければならぬ、一心不亂、其の藝術に專らにならなければならぬ。

碁を打つ人でも、碁の外には何も考へないやうにならなければ上手にはなれぬといふ。碁などはもとより一種の遊戯に過ぎないから、普通の人が其の爲に一切を放擲するのは考へものだが、碁や將棋のやうな遊戯に於いてさへ、專門家になるにはそれだけの覺悟がなくてはならないといふのである。言換へて見れば、何の業もすべて精神を打込まねばならぬといふのである。しかも其の精神たるや、道德に合して非難する所のない立派な精神でなくてはならぬ。

凡そ人の趣味性格は必ず其の動作技能の端にまであらはれるもので、人の筆蹟を見れば其の人物がわかるとは一般にいはれてゐる所である。まして詩歌等の作品の上にあらはれるの

○極致

は勿論で、歩き方や靴の減り方からさへ人物を見分けることが出來るといふ人がある。かくの如く、如何なる技藝・藝術にも、其の人の性格があらはれるものであるから、其の技藝・藝術の極致に到らうとするには、上に敍べたやうに、一切の邪念を棄てて、精進潔齋の心でこれに當らなければならぬのは蓋し當然の事であらう。茲に至つて智と德とは合一する。といつても智から德が出るのではなくて、德がなければ、眞の智には達せられぬといふのである。此の意味を以て見れば、我等の祖先が小さい藝能までも道と稱し、又其の道の師を同時に人間の師として尊んだことが、甚だ意味深いことに思はれる。

今日の普通教育に於いては、種々の教科目を立て其の中修身科以外の科目は、單なる知識・技能の修得を目的とするかのやうに考へられてゐるが、これは甚だ誤つた考であつて、教育の本義

○開發する

○蘊奥

○動もすれば
○方便

○第一義

は、やはりすべてを修行として一貫することでなければならぬ。いはゆる道が一切の根柢をなすのでなければならぬ。人間としての根柢を鍛へ、性格を練り磨くことと、知識・技能を開發させることとが二つであつてはならぬ。知識・技能を磨くことによつて人間を磨き、人間を向上させることによつて知識・技能を進めてゆくのである。又高等教育に於いて專門の學業を修めるにも其の學業をあくまで自分の道と考へ、一身を捧げて之に當らなければ、到底其の蘊奥には達し得られないであらう。學者も、藝術家も、皆それ〴〵の學問・藝術を尊び、これに仕へる心でなければならぬ。然るに、動もすればこれを單なる方便と考へ、其の結果自らも頭の人・手先の人となるのに甘んじてゐる人々があるが、これは學問・藝術の第一義を忘れたもので、學問の人たり藝術の人たる資格のないものである。

○勉強
○神聖視する
○骨身を削る
○際立つ
○上達する

元來修行といふことは竝大抵の事ではない。それで古人は、修行には何より勉強が大切であると信じてゐた。今は勉強といふ語が非常に安價に使はれて、一時間位讀書しても、今日は一時間勉強したなどといふ。一時間の讀書が果して勉強といへるであらうか。古人の勉強はさういふやさしいものではなかつた。彼等は學問・藝術を道として神聖視したので、其の道を得るためには、眞に骨身を削るやうな刻苦をしたのである。例へばかの寒稽古を見よ。人が衣を重ね褥を厚くして寒さを凌ぐ嚴冬の朝、稽古著一枚で、火の氣も無い道場に、平素よりも激しい稽古をする。寒ければ火鉢を入れ、ストーヴを焚くといふ今日の勉強振とは非常に違つたものである。しかしかく寒中朝早く起きて劍術を學び、柔術を學んだ所で、術其のものが短時日の間にさう際立つて上達するといふわけではない。むしろ寒苦

○換言すれば
○鼓舞する
○原動力
○不惜身命

を忍んでつとめるといふことに重要な意義が存したので、修行の容易ならぬことを悟つて、これに對する覺悟・態度を確かにする所以であつた。換言すれば、寒暑に負けず困苦に打克つて、目ざす道一つに集中し精進しようとする熱心と氣力を鼓舞するところに目的があつたのである。そして此の熱心と氣力こそ、あらゆる學問・藝術を道として成就させる原動力であつたのである。

我々は、我々の祖先が、かくの如く、一藝を學ぶにも常に道として其の修行に志し、不惜身命の覺悟を以て志業の大成を期したことを新たに考へてみなければならぬ。

（日本人）

黑板勝美　歷史學者、文學博士、東京帝國大學名譽教授、帝國學士院會員、長崎縣の人、明治七年生。

北畠親房　吉野朝の忠臣、學者、正平九年(一三五四)薨、年六十三。

神皇正統記　六卷、神代から後村上天皇までの事歷を記した歷史。

○寶祚

○肇國

二八　日本國民の大信條

黑板勝美

准后北畠親房の書いた神皇正統記の開卷第一に、「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神永く統を傳へ給ふ。我が國のみ此の事あり。異朝には其の類なし。此の故に神國といふなり。」とある通り、天照大神以來、萬世一系の天皇を上に戴いて居る我が大日本皇國が、寶祚と國運とが天壤無窮であり、そこに國民の榮があることは、我が日本に生まれた者の誰も心に思ひ口にして居る所であるけれども、さて、どうして我が日本が神の國として今日まで數千年間傳はり、なほ將來も此の數千年間傳はつて來た言ふべからざる一つの力を以て進んで行くかと云ふことは、肇國以來の歷史を味はひ、さうして、こゝに皇國と國民との關係を知り、それに依つて我が國體が如何に自然に發達

○神話
○傳說
○信條
○環境

して來たかを知らねば、了解する事は出來ないのである。

日本の太古から上代にかけての歷史の中に含まれてゐる神話或は傳說の起源及び其の發達して來た途を辿つて見ると、まさしくその神話・傳說が萬世一系なる歷史的事實を基礎として起つてゐると考へられる。即ちそれらの神話・傳說の中に此の萬世一系といふ信條が生き〳〵と顯れて居るのである。

之に就いての研究は先づ人類社會の成立に對して、其の環境竝に自然界がどういふ關係であつたかと云ふ事を、地理的にも生活狀態の上からも考へて見ねばならぬ。其の關係が我が日本には如何に現れて來たかを觀察して見ねばならぬ。先づ我が日本の如き島國が、而も平野の少い山國であるのと、支那或は印度の如き大平原國であるのとでは、其の社會的集團の進みが異なつて居る。我が國の如き島國や山國では、先づ限られた地

○接觸

○依存する

○細胞

方で社會的集團が起るから、他の民族との接觸がよほど遲れる。隨つて其の社會には、生存競爭よりも、寧ろ相互に依存する平和な氣分が、より多く現れたであらうと思はれる。まだ原始的の社會であつて、たゞ自分等の目に觸れる範圍が世界の全體であると考へて居つた時代に於いては、若し我々の祖先の起つた所が、四方山で圍まれ或は山若しくは海で圍まれた高天の原又は日高見の國と云ふものであつたとすれば、其の狹い小さな世界で一つの社會的集團を作つて行くには、よほど平和的であつて、かの强者が弱者を苦しめるやうな意味はなかつたであらう。其の社會を平和的に作り上げることに進んで行かねば、其の社會は滅亡するのである。此の事は社會の一つの細胞とも云ふべき家庭の組織に就いても考へ得られる。隨つて家庭の組織される本となつて居る夫婦の成婚にも、日本の上代の社會に於

○專門的

中臣　天兒屋根尊から出た氏族、祭祀を掌つた。

齋部　天太玉命から出た氏族、祭器を作り祭祀を掌つた。

物部　可美眞手命から出た氏族、宿衞を掌つた。

いては近親結婚で社會を作り出してゐた事は神話・傳說の中に能く現れて居る。さう云ふ風で出來た家庭は、夫婦・親子の關係が極めて親密であつて、隨つて平和な愛を以て結ばれた社會がこゝに成立つて來たことを信じ得るいろ〳〵な條件が、日本の社會の發達の上に備つて居る。

さて此の平和な社會がだん〳〵發達する具合を見ると、一番初には、別に專門的の職業が各家々にあつたものではないらしい。それがだん〳〵進んで來た時に於いて、其の社會の成立、其の國民生活に必要な精神的の分業が、自然に行はれて來たものであらう。さうして、其の家々の名前は最初は職業の名前を以てすることに進んで行つたものである。中臣・齋部・物部などの名稱は職業の名稱であるが、それで一つの家の名前が出來て居るのである。此の場合に、それはまた國家的組織とも一致して

○尊稱

○主權者

居るのである。また我が國上古の氏族制度で、國家の最高地位を占められ、特殊な職業がない家は、たゞ一軒しかないのであるから、別に家の名稱を呼ばぬ。隨つて名前を作る必要がなく、ただ尊稱だけを作れば宜しい。今もお上とか上樣とか申上げれば天皇陛下の御事であるやうに、大昔から我が皇室には御家名と云ふものがない。たゞ親王や皇族の御方が別家をなされば、何の宮樣と申すだけである。天皇陛下には「すめらみこと」即ち我々を統べて居られる御方と云ふやうな意味の尊稱はあるが、それ以外に、特別に皇室として御名前を附して、かう云ふ御家の誰といふ必要はないのである。

主權者の家に名稱を持つてゐない國は、世界中今日に於いてたゞ我が大日本皇國があるだけである。如何なる國でも、日本以外の國では皆主權者の家名がある。是は要するに、もと國民

○類例

天照大神の神勅
豐葦原の千五百秋の瑞穗國は、これ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治らせ。さきくませ。寶祚の隆えまさむこと當に天壤と窮りなかるべし。

○根本義

○回顧する

の一部であつた者が、後に勢力を得て主權者となつたからである。日本の皇室は此の點に於いて、社會發達の最初から主權者として今日まで繼續せられた事を、事實の上に於いて示すもので、實に世界に類例のない萬世一系を、此の事實の上に證明して居るのである。若し日本に何れの時代にか革命が行はれたものとすれば、現主權者には必ず家の名前がなければならぬ筈である。

以上の所說によつて皇室の天壤無窮なるべき天照大神の神勅の、實に皇室にも國民にも國民的自覺を作るべき根源となつて居る根本義が了解されるであらう。我々が此の肇國の昔に遡つて祖先の偉業を回顧する時に、我々は國民としての信仰に生きる。我々は其の信仰を益々養成して行かねばならぬ。即ち歷代天皇は萬世一系をこの事實に於いて永久に傳へる事に御

○君臨する

武烈天皇　第二十五代。

日本書紀　三十卷、舍人親王・太安麿等の編、天地開闢から持統天皇までの事歴を漢文で記した編年體の歴史。

百濟　三韓の一、天智天皇の二年(一三三)に亡んだ。

努力があり、我々國民は其の意味に於いて皇室をお助け申すことに努力があり、こゝに初めて日本民族として進んで來た意義が現れるのである。さうして、前に述べた日本の最初に出來た家庭の成立に於ける親子及び夫婦の關係を推し擴げたものが、此の皇室と國民との關係となつたので、一に歴代天皇が義は君臣であるが親しみは父子のやうな大御心で國民に君臨せられ、隨つて神武天皇から今日まで連緜として皇統を傳へられ、御一人の天皇も國民を虐げられた御方がおありにならぬと云ふ美しい歴史となつて現れて居るのである。武烈天皇の御事蹟として日本書紀にあるものには、百濟末多王の事蹟が混入して居ると云ふのが、早く學者の定說となつて居る。仁德天皇が民家の炊煙を御覽になつての御聖德も、醍醐天皇が寒夜に御衣を脫がせられた御事も、皆各時代の天皇の御仁慈の御心が、仁德天皇

末多王　百濟の暴君。

仁德天皇　第十六代。

醍醐天皇　第六十代。

後奈良天皇　第百五代。

○供御

般若心經　般若波羅密多心經の略、唐の玄奘の譯。

や醍醐天皇の御聖德の上に現れて居るのであつて、仁德天皇醍醐天皇だけが聖德の天皇であらせられたと云ふのではない。後奈良天皇が其の日の供御にもお困りになつて居られるほど皇室の衰微した時代にも、なほ宸筆を染めて般若心經を書寫し給ひ、國民の病苦を救はうとせられたことは、此の皇室の式微から二たび盛んな皇運の光が射して來た所以である。隨つて我我日本國民は、皇室のために身命を捧げて御奉公をすると云ふ考の上に立つて、初めて萬世一系の皇運を扶翼し奉ることが出來るのである。

神皇正統記にも、「窮りあるべからざるは我が國を傳ふる實祚なり。仰ぎて尊み奉るべきは日嗣を承け給ふ皇になんおはします。」といつてあり、また、「凡そ王土にはらまれて忠をいたし生を捨つるは人臣の道なり。必ず之を身の高名と思ふべき

○中核

モットー　標語、格言。

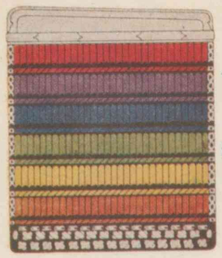
にあらず。然れども後の人を勵まし其の迹を憐びて賞せらるるは君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。」と述べてあるのは、親房が如何に能く日本國民の精神の中核に觸れてゐたかを觀るに足るもので、我等國民が服膺すべきモットーであらねばならぬ。

我々は、皇室の御繁榮が同時に日本國の榮昌であり、また日本國の幸福が皇室の御繁榮と一致するのでなければ、肇國の大精神に矛盾すると考へねばならぬ。茲に始めて天照大神の神勅の意味が強く現れて、日本の國運と民福とが進んで來るのである。我々は外來文化に對して、我が皇室及び國體を中心として、精神的にも物質的にも向上を圖るべきである。若し皇室及び國體を忘れて、只外來文化に心醉し國民的自覺を失つたら、日本民族の滅亡が到來する。我々日本國民は永劫に此の大信條の

○心醉する
○永劫に
○信條

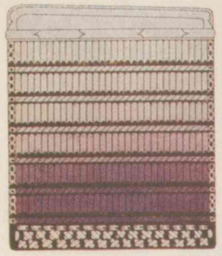
下に進まねばならぬ。

聖代女子國語讀本　卷六　終



色々縅

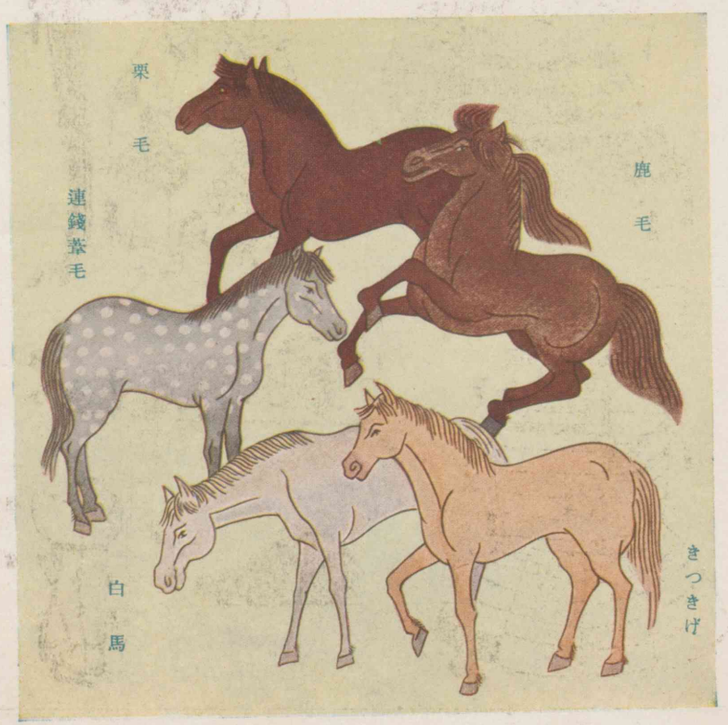
小櫻縅



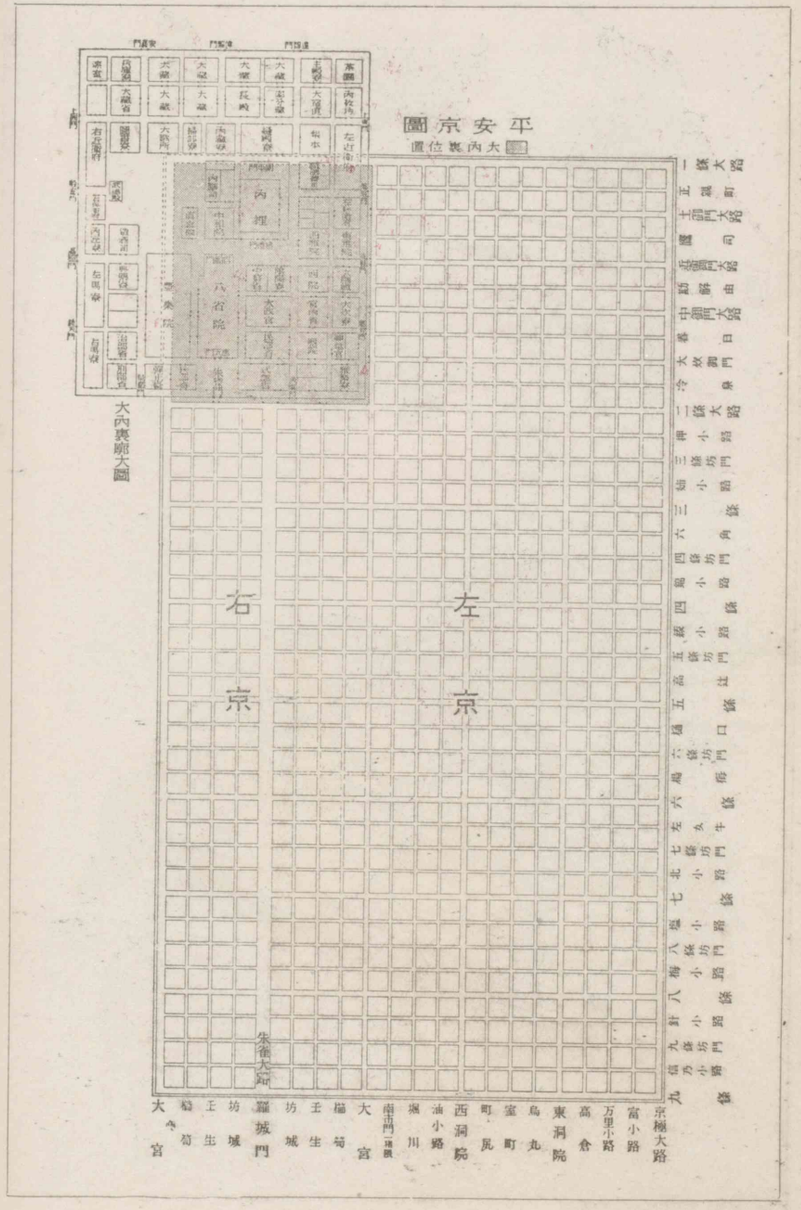
紫裾濃縅

大鎧着用圖（澤瀉縅）

雑兵
胴丸
腹巻


栗毛
連錢葦毛
鹿毛
白馬
きつきげ

半首
面頬
猿頬
兜
大鎧
胴丸
鎧直垂着用
烏帽子
籠手
脛当
貫


平安京圖
大内裏位置
大内裏廓大圖
右京
左京
朱雀大路
羅城門
一條大路
正親町大路
土御門大路
中御門大路
二條大路
三條大路
四條大路
五條大路
六條大路
七條大路
八條大路
九條大路
京極大路
宮小路
万里小路
高倉
東洞院
烏丸
室町
西洞院
油小路
堀川
南北門通
大宮
福祥
壬生
坊城
壬生
坊城
大宮

歴代女子國語讀本附錄

文語動詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段書	カ	キ	キ	ク	ク	ケ	ケ
上二段起	キ	キ	キ	ク	クル	クレ	キヨ
上一段（著）	キ	キ	キル	キル	キル	キレ	キヨ
下二段兼	ネ	ネ	ヌ	ヌル	ヌル	ヌレ	ネヨ
下一段（蹴）	ケ	ケ	ケル	ケル	ケル	ケレ	ケヨ
カ行變格（來）	コ	キ	ク	クル	クル	クレ	コヨ
サ行變格（爲）	セ	シ	ス	スル	スル	スレ	セヨ
ナ行變格	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌル	ヌレ	ネ
ラ行變格	ラ	リ	リ	ル	ル	レ	レ
有	ラ	リ	リ	ル	ル	レ	レ

文語形容詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ク活用清	ク	ク	ク	シ	キ	ケレ	シケレ
シク活用涼	シク	シク	シク	シ	シキ	シケレ	シケレ

文語助動詞活用表

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	命令	
受身可能尊敬	る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	下二段活用
受身可能尊敬	ら	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	
使役尊敬	す	せ	せ	す	する	すれ	せよ	
使役尊敬	さ	せ	せ	す	する	すれ	せよ	
使役尊敬	し	め	め	む	むる	むれ	めよ	
時	つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ	ラ行變格活用
時	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	ナ變
時	り	ら	り	り	る	れ	ー	
時	たり	ら	り	り	る	れ	れ	
時	たり	ら	り	り	る	れ	れ	
時	けり	ら	り	り	る	れ	れ	
指定	たり	ら	り	り	る	れ	れ	
指定	なり	ら	り	り	る	れ	れ	
否定	ざり	ら	り	り	る	れ	れ	
推量	べかり	ら	り	り	る	れ	れ	
推量	めり	ー	り	り	る	れ	れ	
推量	べし	く	く	し	き	けれ	ー	形容詞活用
推量	まじ	く	く	○し	き	けれ	ー	
希望	たし	く	く	し	き	けれ	ー	
希望	まほし	く	く	し	き	けれ	ー	
比況	ごとし	く	く	し	き	ー	ー	
否定	ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	ー	
否定	じ	ー	ー	じ	じ	じ	ー	
時	き	ー	ー	き	し	しか	ー	特殊
時	む	ー	ー	㋐む	㋐む	め	ー	

口語動詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段書	カ	キ	キ	ク	ク	ケ	ケ
四段死	ナ	ニ	ヌ	ヌ	ヌ	ネ	ネ
四段有	ラ	リ	リ	ル	ル	レ	レ
上一段起	キ	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ(ロ)
上一段兼（著）	キ	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ(ロ)
下一段（蹴）	ケ	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ(ロ)
カ行變格（來）	コ	キ	キ	クル	クル	クレ	コイ
サ行變格（爲）	セ(シ)	シ	スル	スル	スル	スレ	セヨ(シロ)

口語形容詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	假定	
ク活用清	ー	ー	クウ	イ	イ	ケレ	
シク活用涼	ー	シク(ウ)	シイ	シイ	シイ	シケレ	

口語助動詞活用表

種類	語	未然	連用	終止	連體	假定	命令	
受身可能尊敬	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ	下一段活用
受身可能尊敬	られる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ	
使役	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ	
使役	させる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ	
否定	ない	ー	く	い	い	けれ	ー	形容詞活用
推量	らしい	ー	く	い	い	けれ	ー	
希望	たい	ー	く	い	い	けれ	ー	
時	た	たら	たり	た	た	たれ	ー	
時	だ	だら	だつ	だ	(な)	なら	ー	
指定	う	ー	ー	う	ー	ー	ー	特殊活用
時	よう	ー	ー	ー	ー	ー	ー	
推量	まい	ー	しまい	まい	ー	ー	ー	

音便表

動詞	一 い音便	書きて 防ぎて い
	二 う音便—言ひて—う	死にて 飛びて 積みて ん
	三 撥音便	
形容詞	一 白き花—い	
	二 甘くなる—う	

種類	助動詞						
時	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
時	り・たり・けり	ら	り	り	る	れ	―
指定	たり・なり	ら	り	り	る	れ	れ
否定	ざり	ら	り	り	る	れ	れ
推量	べかり	ら	り	り	―	―	―
推量	めり	―	―	り	る	れ	―
推量	べし・まじ	く	く	○し	き	けれ	―
比況	ごとし	ぐ	く	し	き	―	―
希望	たし・まほし	く	く	し	き	けれ	―
否定	ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	―
否定	じ	―	―	じ	じ	じ	―
時	き	―	―	き	し	しか	―
時	む	―	―	(ん)む	(ん)む	め	―
推量	けむ・らむ	―	―	(ん)む	(ん)む	め	―
推量	らし	―	―	らし	(らし)	(らし)	―
推量	まし	―	―	し	し	しか	―

ナ變 ／ ラ行變格活用（り・たり・けり・なり・たり・ざり・べかり・めり） ／ 形容詞活用（べし・まじ・ごとし・たし・まほし） ／ 特殊活用（ず・じ・き・む・けむ・らむ・らし・まし）

種類	助動詞						
希望	たい						
時	た	たら	たり	た	た	たれ	―
指定	だ	だら	だつ	だ	(な	なら	―
時	う・よう	―	―	う	―	―	―
推量	まい	―	―	まい	―	―	―

特殊活用 ／ 用活

音便表

動詞	一 い音便 {書きて・防ぎて} い
	二 う音便 言ひて―う
	三 撥音便 {死にて・飛びて・積みて} ん
	四 促音便 {立ちて・買ひて・破りて} つ
形容詞	一 白き花―い
	二 甘くなる―う

文語助動詞連續法

	ラ變	四段	ナ變	上二段	上一段	下二段	下一段	カ變	サ變	體言
未然形につくもの	有ら	讀ま	死な	起き	著	受け	蹴	來(こ)	爲(せ)	花
	す る（ラ變・四段・ナ變）			らる さす（上二段〜サ變）					り（サ變）	
	しむ む まし ず ざり じ まほし									
連用形につくもの	有り	讀み	死に	起き	著	受け	蹴	來(き)	爲(し)	花
	けむ き（カ變・サ變は特例） けり つ ぬ（ナ變にはつかぬ） たり たし									
終止形につくもの	有り	讀む	死ぬ	起く	著る	受く	蹴る	來(く)	爲(す)	花
		べし べかり らむ らし めり まじ なり（詠嘆）								
連體形につくもの	有る	讀む	死ぬる	起くる	著る	受くる	蹴る	來る	爲る	花
	べし べかり らん らし めり まじ（ラ變）									
	なり（指定） 如し									
已然形につくもの	有れ	讀め	死ぬれ	起くれ	著れ	受くれ	蹴れ	來れ	爲れ	花
		り（四段）								

口語助動詞連續法

	四段	上一段	下一段	カ變	サ變	體言
未然形につくもの	書か	落ち	捨て	來(こ)	爲(し)	花
	れる せる う（四段）	られる させる よう まい（上一段〜サ變）				
	ぬ ない					
連用形につくもの	書き	落ち	捨て	來(き)	爲(し)	花
	た たい ます					
終止形につくもの	書く	落ちる	捨てる	來る	爲る	花
	まい（四段）					
	らしい					
連體形につくもの	書く	落ちる	捨てる	來る	爲る	花
	のだ のです やうだ やうです					

接續助詞と動詞・形容詞との接續法

	動詞	形容詞
未然形	ば で	ば とも
連用形	て つつ	
終止形	と とも	
連體形	(と) (とも) が を に	が を に
已然形	ば ど ども	ば ど ども

昭和十二年七月一日 發行
昭和十二年十二月五日 訂正再版印刷
昭和十二年十二月十五日 訂正再版發行
昭和十六年九月廿二日 訂正三版印刷
昭和十六年九月廿七日 訂正三版發行

聖代女子國語讀本
定價金六拾錢

著作者 吉澤義則

發行者 東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治

印刷者 京都市下京區坊城通五條下ル
久保田光好

發行所 東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

星野書店
五

（賜名）星野吉澤女國

日本出版配給株式會社 元配給
東京市淡田區神田町二ノ九

三月十二日より
池永照

時間割

土	金	木	水	火	月	
	家	國	体	被	数	1
	数	英語	物	國語	被	2
	生	書道	々	音	々	3
	英語	漢	音	家	國	4
	作	家	作	数	公	5